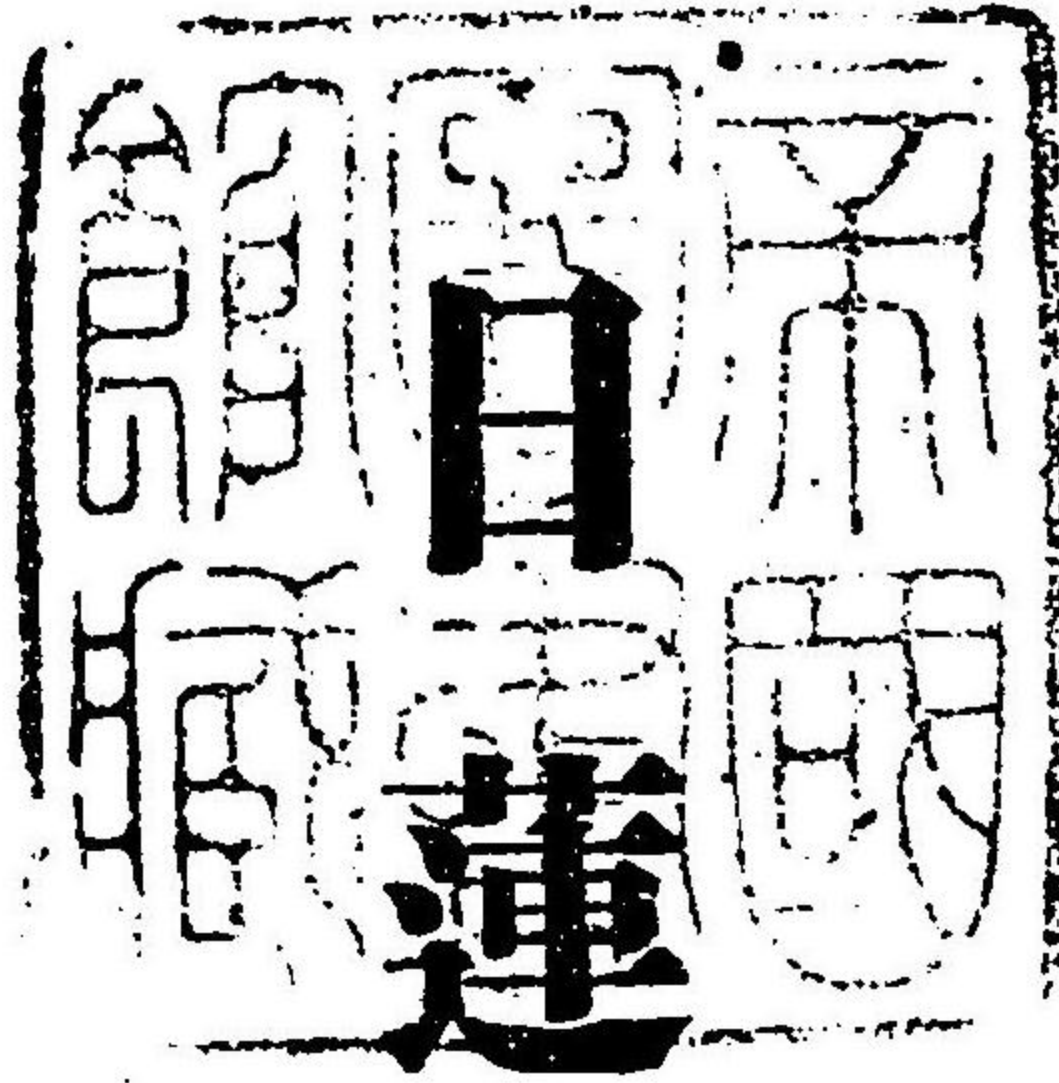


324-192



上人

大屋德城

著



序

人の欲するところは名と利と是れ也。人は名利を併せ得るを以て、最大の成功と爲す。若し名利併せ取ることを得ざらむか。或は名を棄て、利を取り、或は利を棄て、名を取るを常とす。而して、其の一を得たるものは猶以て成功者と稱す。其の兩つながら之れを得ざるもの、之れを劣敗者と稱し、或は其の爲す無きを嗤ひ、或は其の爲し能はざるを憫む。斯くの如くにして、世は名と利と併せ得たるものを偉人と爲し、俊傑と爲し、名士と爲し、崇拜し、尊敬し、欽仰し、景慕す。而して、名か利かの何れかを得たるもの、之れに亞ぎて、崇拜せられ、尊敬せられ、欽仰せられ、景慕せらる。

是れ滔々たる現代の風潮也。豈嘗に現代のみならむや。人情は古今相同じく、東西相似たるものありて存す。史記の蘇秦傳に稱す。蘇秦東の方齊に遊ぶこと數年、鬼谷先生に就いて、縦横の術を學ぶ。而も事志と違ひ、落魄して故郷に歸れり。兄弟嫂妹妻妾皆之れを笑ひて曰く。周人の俗産業を治め、工商を勤め、什が二を逐ひ、以て務と爲す。今子は本を釋て、口舌を可とす。

其の苦むも亦宜ならずやと。蘇秦之れを聞きて大に耻ぢ、更に出で、策するところあり。六國の相と爲り、六國の印綬を帯び、六國の使臣に送られ、服飾駕從王者の如くにして、再び故郷に歸れり。時に昆弟妻嫂目を側て、敢て仰ぎ視るものなし。蘇秦問うて曰く。前には彼れが如く、今は斯くの如し。何ぞ夫れ變ずることの甚だしきやと。彼れ等の曰く。夫子の位貴く金多ければ也と。嗚呼。何等の名言ぞや。然り位貴く金多きものは正に斯くの如く遇せらるべきは、千載の古へ猶然り、現今の世猶然り、想ふに、今より千載の後、亦正に然るべし。何となれば、凱旋の將軍は到るところに、歓迎せらるべき運命を有すれば也。

昔伯夷頌を作るものあり。口を極めて、伯夷叔齊の二人が、周の粟を食まずして、首陽に蕨を採りしを頌せり。謂へらく。一家之れを非として、而も之れを爲すものは甚だ稀れなり。一郷之れを非として、而も之れを爲すものは甚だ稀れなり。一國之れを非として、而も之れを爲すものは最も稀れなり。天下を擧げて之れを非として、而も之れを爲す者に至りては古今の一人のみと。

かくて夷齊の大節に殉したるを以て、稱揚して措かざりき。而もこれ豈人情の論ならじや。學者の論のみ。現代の思想を以て、之れを論せば、夷齊の如きは事理を解せざる迂漢、其の首陽に餓うるや、當然のみと爲さん。

吾人は敢て名と利とを惡むものにあらず。得ることを得べくんば、王侯の名も之れを辭せず。鉅億の富も之れを辭せず。吾人は又敢て、夷齊の行動を飽くまで賞讃するものにも非ず。物に勢ひあり。時に變遷あり。吾人は其の大節を誤らざるを賞して已まんのみ。

然れども、吾人は名と利とを以て、人間を律する唯一の標準となすは其のただ窮屈なるを惜む。凡そ人は其の活けりし時代に於いて、名と利とを得て、賞讃せらるゝものあり。或は其の何れかを得て、賞讃せらるゝものあり。是れ謂はゆる時に遇ひしもの也。或は其の活けりし時代に於いては、衣食給せず、宮室具はらず。落魄飄零の間に死し、而も死後大に尊ばるゝものあり。是れ謂はゆる時に遇はざりしもの也。嗚呼時に遇ふと遇はざるとは、同一のものをして、斯くの如き差を生ぜしむ。過去既に然りとせば、現時も亦焉んぞ然ら

ずといふことを得むや。

讀者よ。我が日蓮は世に遇ひし人なりしか。彼れは伊豆と佐渡とに流されたりき。日蓮は果して世に遇はざりし人なりしか。彼れは今や一宗の祖師として崇拜せらる。是れを以て之れを觀るに、彼れは活けりし時は世に遇はざりし也。死せりし後には、其の世に遇はざりしを償はれしと謂つべき歟。然れども、這箇の品隲彼れに取つて何かあらむや。蟬蛻より觀れば、一日も一生也。大椿より觀れば、十年も一瞬也。毀譽褒貶は由來雲煙の大空を度るが如きのみ。彼れは快男兒なり。言はんと欲するところを言ひ、爲さんと欲するところを爲し、宇宙の大化に従ひて來り、宇宙の大化に従ひて去りき。彼れは一生計數器を解せざりし也。

彼れは果して狂僧なりし乎。將た偉人なりし乎は吾人の知るところにあらず。問はんと欲せば身延山頭の白雲に問へ。偶、人生の事に感あり。卷頭に題すること此の如し。

明治四十三年六月

大 屋 徳 城 識

凡 例

- 一 本書は之れを三篇に分ち、第一篇は鎌倉以前の佛教の大勢を叙し、第二篇は鎌倉時代の佛教の大勢を叙し、以て日蓮の佛教史上に於ける地位を明にせむと努めたり。
- 一 本書第一第二の兩篇は研究的態度を取りて、概括的叙述を試み、第三篇は評傳にして、専ら日蓮の一生を記述し、参考として、所々に遺文を附載せり。
- 一 現今刊行の日蓮の遺文が、自筆の原本と同一なりや、否やに就いては、十分疑ふべき點あり。故に本書は通途の傳説と雖も、強ち排斥せず。時には之れに従ひたり。
- 一 本書引用する遺文は悉く和譯して、何人にも讀み易からしめたり。

日蓮上人

目次

第一篇	鎌倉以前の日本佛教	一
上篇	寧樂朝以前及び寧樂朝の佛教	一
第一章	古文化の追懐	一
第二章	寧樂朝以前の文化と佛教	七
第三章	寧樂朝以前の佛教	三
第四章	寧樂朝の佛教	六
第五章	寧樂朝の政治と佛教	四
第六章	寧樂朝の文化と佛教	三
第七章	佛教興隆の弊	六

下篇 平安朝の佛教

第一章 時勢概観…………… 四〇

第二章 新京の二宗…………… 五一

第三章 新宗と舊宗…………… 五九

第四章 最澄の畫策…………… 六六

第五章 僧風の變遷…………… 七七

第六章 神佛合一の思潮…………… 九〇

第七章 諸大寺の鎮守…………… 一〇三

第八章 密教の興隆及び其の分派…………… 一〇六

第九章 諸大寺の跋扈…………… 一二七

第二篇 鎌倉時代の佛教

第一章 社會精神の動搖…………… 一二五

第二章 交替神教と一神教及び汎神教…………… 一三六

第三篇 日蓮上人評傳

第一章 法華經の行者…………… 一七一

第二章 「旃陀羅が子」日蓮…………… 一七七

第三章 佐渡御勘氣鈔…………… 一八三

第四章 清澄山の修學…………… 一八三

第五章 鎌倉求法…………… 一八六

第六章 叡山の苦學…………… 一八八

第七章 諸寺歴遊…………… 一九二

第七章 再び叡山に登る……………一七九

第八章 豫言の信仰……………二〇四

 観心本尊抄……………二二一

第九章 歸郷……………二二三

第十章 清澄の折伏……………二二七

第十一章 主師親……………二三三

 主師親書……………二三三

第十二章 教機時國……………二三六

 教機時國鈔……………二三七

第十三章 名越の菴……………二三三

第十四章 小町の辻……………二三四

第十五章 安國論成る……………二三七

 立正安國論……………二四一

第十六章 松葉が谷の法難……………二五九

第十七章 伊東の法難……………二六四

 船守彌三郎許書……………二七一

第十八章 小松原の法難……………二七三

第十九章 蒙古來……………二七八

 宿谷入道許狀……………二八三

 與北條彌源太書……………二八四

 與建長寺道隆……………二八五

 與極樂寺良觀書……………二八六

 弟子檀那中書……………二八八

第二十章 龍ノ口の法難……………二八八

第二十一章 師弟の情……………二九四

 土籠書……………二九七

第二十二章 佐波の幽囚(上)……………二九九

 寺泊書……………三〇〇

佐渡書……………三〇一

第二十三章 佐渡の幽囚(下)……………三〇五

開目抄……………三〇八

第二十四章 赦免状來る……………三二二

第二十五章 身延の雪池上の雨……………三二八

身延書……………三二九

波木井書……………三三二

日蓮上人

第一篇 鎌倉以前の日本佛教

上篇 寧樂朝以前及び寧樂朝の佛教

第一章 古文化の追懐

元祿の俳人が落花雨のやうな古京の夕ぐれに立ちつくして行く春の恨みに、限りなき追懐の情を寄せ、

奈良七重七堂伽藍八重ざくら

と歌つた青丹よし寧樂の都の文化は實に美はしいものであつた。寧樂朝は實に太秦、波刺斯、印度等西域古文明を綜合した唐代の文化が、或は遣唐使、或は留學生、或は學問僧に依つて潮の低きに就くが如く、導き入れられた時代であ

つた。音楽にせよ。美術にせよ。新しい香りをもつた空氣が大和路をさして海船から輸入された時代であつた。従つて制度の上にも服飾の上にも於いても新しい形式が採用せられ、古き形式は笥の皮の落つるやうに脱ぎ棄てられたのであつた。此の潮流が思想史の上にもあざやかに流れてをる。佛教史の上にもあざやかに流れてをる。

古京の文化！

寧樂朝の文化！

我れ等は此の言葉を聴いただけでも、神祕の力を包む悪魔の呪符のやうに、我れ等の若き血潮が湧く。

寧樂朝の文化に對する我れ等の憧憬は、譬へば月のまぼろしに霞んだ春の夜に、どこから香ふともなく香うて來る名香のゆくへにあこがるゝ思ひである。曾ては華のやうに盛んであつた。夫れが今は一千有餘年の寄せては返し、返しては寄せ來る時の荒濤の漲り狂ふ間に、其の大部分は夢の跡と消え去りながら、其の幾分は今も尙いたまはしき姿ながらに遺つてをる。斯様な文化に

對する我れ等の趣味は又ゆく春を惜む心と同じだともいへよう。

古の西域の文化！

古の唐朝の文化！

それらを渾融した寧樂朝の文化！

我れ等の心は夫れを慕ふはりつめたあくがれの強い情と、今や消えなんとし、て僅に遺つてをる古文化の微かな光を悼むうら寂しい甘い愁ひとが綿々として盡さず、縷々としてどこまでも續く。

あはれなつかしき寧樂朝の文化！

飛火野！

春日野！

嫩草山！

といふやうな野の名山の名にも、古い文化のひびきはこもつてをる。

青丹よし寧樂の都は咲く花の

匂ふが如く今さかりなり

といふ萬葉の歌を誦すると、和銅二年二月遷都の詔勅が聯想される。

朕祇奉上天、君臨宇內、以非薄之德、處紫宮之尊、常以爲作之者勞、居之者逸、遷都之事、必未遑也、而王公大臣咸言、往古已降、至于近代、揆日瞻星、起宮室之基、卜世相土、建帝皇之邑、定鼎之基、永固無窮之業、斯在、衆議難忍、詞情深切、然則京師者、百官之府、四海所歸、唯朕一人、猶逸豫、苟利於物、其可遠乎、昔殷王五遷、受中興之業、周后三定、致太平之稱、安以遷其久安宅、方今平城之地、四禽叶圖、三山作鎮、龜篋並從、宜建都邑、宜其營構、資須隨事情、亦待秋收後、令造路橋、子來之義、勿致勞擾、制度之宜、令後不加。

「四禽叶圖、三山作鎮、龜篋並從」といはれた寧樂の都！七十餘年帝王の居となつた平城の地も、今は唯圓陀々たる青山が昔を語つてをるのみである。我れ等は「古今」の歌人と共に、

ふるさととなりにし寧樂の都にも

いろはかはらず花は咲きけり

と歌はざるを得なす。

纏つて此の時代に於ける佛教の興隆を思ふと、又我れ等の心には廣い廣い春の野に出たやうな感じがどこからともなく流れて来る。

法隆寺！

興福寺！

大安寺！

藥師寺！

元興寺！

東大寺！

招提寺！

是れが寧樂朝の佛教を代表するものとして、巡禮記に記された七大寺である。

俱舍！

成實！

三論！

法相！

華殿！

律！

是れが謂はゆる南京の六宗であつた。

七大寺！

六宗！

講經の盛筵、法會の莊嚴、今果して何くにあるであらう。遺れるものは寂寥たる伽藍と古藝術の鑿のかをりのみではないか。我れ等は竹外の一絶にそゝるに懷舊の涙を濺がざるを得ない。

半空湧出兩浮圖

更有伽藍俯九衢

十二帝陵低不見

黑風白雨滿南都

寧樂朝の文化と佛教とは斯くの如く美はしいものであつた。而もそは平城の地に突如として起つた文化ではない。實に推古朝の文化、白鳳時代の文化に依つて起つたものである。故に寧樂朝の文化を知らんが爲には、少しく溯

つて其の源を探らねばならぬ。

第二章 寧樂朝以前の文化と佛教

讀者も知らるゝ通り、欽明天皇の十三年十月に、百濟の聖明王が怒唎斯致契等を遣し、釋迦佛金銅像一軀、經論幡蓋を獻せられたのが、我が國に佛教があからさまに傳はつたはじめてあつて、夫れからといふものは、歷朝、三韓及び隋唐との交通が絶えず、彼の地の名僧智識が我が國にやつて來たこともあれば、我が國から彼の國に使臣を出し、留學生や學問僧を派遣して、我が國は智識上殆んど全く彼れの指導に待つたといふも敢て過言ではない有様となつた。寧樂朝もさうであるが、寧樂朝以前も亦左様であつた。従つて、我が國の古代文化といふものが、殆んど儒教及び佛教並に佛教の傳來に従つて、起り來つた彼我的交通に依つて、培養せられ、豊富にせられたので、古代文化の導きとなつたものは、儒教、佛教、並に之れに従つて來る交通であるといふことは否定する事の出來ない明々白々の事實である。故に今寧樂朝以前に於いて、如何程彼我

の交通が頻繁であつたか。又其の謂はゆる交通なるものが如何程佛敎と密接の關係を有してをつたかといふことを示さんが爲に、左に其の略年表を掲げよう。

隋唐及び三韓と我が國との交通に關する略年表

(自欽明天皇十三年(西曆五五二)至元明天皇和銅二年(同七〇九)一百五十八年間)

欽明天皇

十三年十月(西曆五五二) 百濟國王佛像經卷を獻ず。

十五年二月(西曆五五四) 百濟國曇惠等九人を遣し、道深等七人に代らしむ。

む。

敏達天皇

六年十一月(西曆五七七) 百濟國經論僧尼、呪禁師、佛工、造寺工を買す。

八年十月(西曆五七九) 新羅國佛像を獻ず。

十二年(西曆五八三) 百濟國日羅來朝す。

十三年九月(西曆五八四) 鹿深臣、佐伯連百濟國より歸り佛像を齎す。

崇峻天皇

元年(西曆五八八) 百濟國佛舍利を獻ず。

同(西曆) 同 百濟國僧及び寺工、鑿盤博士、瓦博士、葺工を獻ず。

同(西曆) 同 善信、尼等百濟國に赴く。

三年三月(西曆五九〇) 善信、尼等歸朝す。

推古天皇

三年五月(西曆五九五) 高句麗國僧惠慈歸化す。

同(西曆) 同 百濟國僧慧聰來朝す。

五年(西曆五九七) 百濟國太子阿佐來朝す。

十年十月(西曆六〇二) 百濟國僧觀勒來朝し、曆本天文地理書遁甲方術の書を獻ず。

同 閏十月(西曆) 同 高麗國僧僧隆、雲聰歸化す。

十三年(西曆六〇五) 高麗國大興王黄金三百兩を獻じ造像に資す。

十五年(西曆六〇七) 小野妹子を隋國に遣す。

十六年四月(西曆六〇八) 隋使裴世清來朝し、小野妹子歸朝す。
同 九月(西曆 同) 小野妹子を再び隋國に遣す、留學生及び學問僧

八人隨ふ、隋使歸る。

十七年四月(西曆六〇九) 百濟國僧道欣、惠彌等肥後に漂着す。

十八年三月(西曆六一〇) 高句麗國僧曇徽、法定を貢す。

二十年(西曆六一二) 百濟國人味摩之歸化し、伎樂舞を傳ふ。

二十三年十一月(西曆六一五) 惠慈、高句麗國に歸る。

二十四年七月(西曆六一六) 新羅國佛像を獻す。

三十一年七月(西曆六二三) 新羅國及び任那國使を遣して佛像を獻す。入唐

學問僧惠濟、惠先、醫惠日、福因隨ひて歸朝す。

三十三年正月(西曆六二五) 高麗國僧惠灌を貢す。

舒明天皇

四年八月(西曆六三二) 唐使高表仁來朝す。學問僧靈雲僧旻隨ひて歸朝す。

十一年九月(西曆六三九) 入唐學問僧惠隱、惠雲、新羅の使臣に送られて歸

朝す。

十二年十月(西曆六四〇) 入唐學問僧清安歸朝す。
孝德天皇

四年二月(西曆六四八) 學問僧を三韓に遣す。

白雉四年五月(西曆六五三) 學問僧入唐す。(紀に據る但し定慧を除く)

齊明天皇

四年七月(西曆六五八) 學問僧智通、智達等入唐す。

天智天皇

五年(西曆六六六) 唐僧智由指南車を獻す。

六年(西曆六六七) 定慧入唐す。

十年十一月(西曆六七二) 入唐僧道文歸朝す。

天武天皇

六年九月(西曆六七八) 定慧道光歸朝す。

十三年五月(西曆六八五) 學問僧觀常、雲觀歸朝す。

持統天皇

朱鳥元年閏十二月西曆六八六 太宰府三韓の僧尼六十二人を獻す。

同 元年九月西曆六八七 智隆歸朝す。

同 三年四月西曆六八九 學問僧明聰觀智等歸朝す。

同 年同月西曆 同 新羅國佛像を獻す。

同 四年二月西曆六九〇 新羅國僧詮吉等五十人歸化す。

同 年九月西曆 同 入唐僧智宗、義德、淨願歸朝す。

同 七年三月西曆六九三 學問僧辨通、神睿等新羅に赴く。

文武天皇

大寶三年西曆七〇三 智鳳、智鸞、智雄入唐す。

慶雲四年五月西曆七〇七 學問僧義鳳等新羅國より歸朝す。

右のやうな有様であつたので、此の時代の文化は殆んど全く此の交通に依つて培養せられたことが分るであらう。而して、此の交通が又殆んど全く佛教に關するものたることを知る時は、我が國古代の文化が佛教に依つて培養さ

れたといふことも否定することは出来ぬ。殊に佛僧にて政治上に功績あるもの多く、大化元年六月には僧晏國博士と爲り、同五年三月には僧晏、高向玄理と共に詔を奉じて、八省百官を置かるゝにつき畫策してをるし、朱鳥七年六月には高麗僧福喜を、文武天皇の四年八月には、通德、惠俊の二人を、大寶元年三月には、辨紀を、同八月には、惠耀、信成、東樓の三人を、同三年十月には、隆觀を夫れ夫れ還俗せしめて、政治の方面に用ひられてをる。斯様な有様であるから、當時の先覺者は概ね僧侶であつて、従つて、佛教は非常な勢ひをもつて、興隆したのである。

第三章 寧樂朝以前の佛教

寧樂朝以前の佛教といへば、欽明天皇の十三年十月から、元明天皇の和銅三年三月平城遷都に至るまで、一百五十七年五箇月間の佛教を指すのである。

此の間に於いては、蘇我氏の奉佛あり、聖德太子の出世あり、藤原鎌足の歸佛、延いては、天智、天武、持統、文武四朝の佛教興隆となり、其の勢ひは實に旭日の昇る

が如きものであつた。即ち推古天皇の二年二月には、三寶興隆の詔勅を下し給ひ、同三十二年の四月には、僧正、僧都、法頭の職を置かれ、孝徳天皇の大化元年八月には十師を置かれ、天武天皇の白鳳十一年三月には、小僧都を置かれ、同十一年三月には、更に律師を置かれ、同十三年の三月には、天下に詔して、民家に佛舎を作り、佛像經卷を置かしめ給ひ、持統天皇の朱鳥五年二月には、公卿に詔して、佛教を奉せしめ給ひ、次いで、文武天皇の二年十一月には、大僧都を置き給ひて、大寶令の發布と共に、其の中に唐制に基いて、僧尼令を置かれ、大寶二年の二月には、天下の諸國に國師を置かるゝこととなつた。是に於いて、佛教は全く國教の形式を採るに至つたので、佛教の基礎悉く成り、我が國民思想に於いて、重大なる位置を占むるに至つたのである。

更に翻つて、僧尼の數と、寺院の數とを見れば、此の有様が具體的に尤もよく分るのである。即ち、推古天皇の三十二年には、寺四十六所、僧八百十六人、尼五百六十九人あつたといふことであるが、これは、欽明天皇の十三年佛教渡來から、七十二年目のことである。夫れから、百四十一年目に當る持統天皇の朱鳥

六年には、寺の數が五百四十五寺、扶桑略記になつたといふのであるから、凡そ七十年の間に、寺院の數が凡そ十二倍になつてをる。之を見ても、其の如何に盛んであつたかが分るであらう。左に史籍にあらはれた寺院建立の略年表を掲げよう。

寧樂朝以前寺院建立畧年表(國名なきは概れ
大和の國なり)

欽明天皇

十三年(西曆五五二) 向原寺建つ。

用明天皇

二年四月(西曆五八七) 坂田寺建つ。

同年(西曆 同) 攝津四天王寺建つ。(推古天皇元年
難波に移す)

崇峻天皇

元年(西曆五八八) 法興寺建つ。

推古天皇

十一年十一月(西曆六〇三) 蜂岡寺建つ。

十四年(西曆六〇六) 橘寺建つ。

十五年(西曆六〇七) 斑鳩寺建つ。(法隆寺)

二十五年(西曆六一七) 熊凝寺建つ。

三十三年(西曆六二五) 河内井上寺建つ。

舒明天皇

十一年七月(西曆六三九) 百濟大寺建つ。(大安寺)

皇極天皇

三年十一月(西曆六四四) 杵削寺建つ。

孝德天皇

五年三月(西曆六四九) 山田寺建つ。

白雉元年九月(西曆六五〇) 播磨法華山寺建つ。

齊明天皇

元年(西曆六五五) 川原寺建つ。

天智天皇

七年正月(西曆六六八) 近江崇福寺建つ。

八年(西曆六六九) 山階寺建つ。(興福寺)

九年(西曆六七〇) 下野薬師寺建つ。

天武天皇

八年十一月(西曆六八〇) 薬師寺建つ。(文武二年十月成る)

十年二月(西曆六八二) 當麻寺建つ。(禪林寺といふ)

十一年三月(西曆六八三) 多武峰講堂建つ。(十三重塔は六年十一月建つ)

持統天皇

朱鳥元年(西曆六八六) 近江御井寺建つ。

文武天皇

慶雲元年(西曆七〇四) 和泉家原寺建つ。

元明天皇

和銅元年(西曆七〇八) 願興寺建つ。

以上は極めて大略であるが、推古天皇の二十四年五月には、聖徳太子が天皇の

爲に諸寺を建立され、又諸國の國造伴造が其の國々に、夫れ夫れ寺院を建て、居るので、其の數は非常なものであつたであらうし、後世聖德太子建立と稱する寺院でも四五十に上る位であるから、此の時代に於いて、寺院が如何に盛んに建てられたかは、想像することが出来るのである。朱鳥六年に、五百四十五寺あつたとすれば、夫れから十九年目の和銅三年には、一千寺位あつたかも知れぬのである。斯様にして、和銅三年の三月、都が平城に遷さるゝと共に、諸大寺の主なるものは、又新京に移されて、愈々莊嚴の美を飾るに至つた。

第四章 寧樂朝の佛教

寧樂朝と稱するのは、元明天皇の和銅三年三月、都を平城に遷されてから、桓武天皇の延暦三年十一月山城の國長岡に遷都せらるゝまで、凡そ七十五年間を指して稱するのである。此の時代の佛教は、前時代から追々と傳へられたもので、謂はゆる南都の六宗と稱せらるゝものである。今六宗の渡來と、其の傳播の概略を述べよう。

抑、南都の六宗とは、南都に於いて開いた六宗といふ意味ではなく、寧樂朝に盛んに行はれた六宗といふ意味である。従つて、六宗の中には、寧樂朝以前に於いて傳はつたものもあれば、寧樂朝になつてから傳來したものもある。又外來の歸化僧の傳へたものもあれば、我が留學僧の傳へたものもあるといふ有様で、其の傳來の状態は一樣でない。加之、六宗の中にも、非常に流行して、隆盛を極めたものもあれば、左程行はれなかつたものもある。而して、更に注意しておかねばならぬことは、此の時代の宗派といふのは、今日我れ等がいふ宗旨宗派とは違つて、一種の學問であつたのである。それで、例へば、俱舍宗といへば、俱舍學といふ佛教の一學科を講ずる學派のやうなものである。従つて、當時の僧侶は一人て幾多の學科を修めたのであつて、謂はゆる諸宗兼學であつた。

さて六宗といふのは、前にも一寸述べておいたやうに、俱舍、成實、三論、法相、華嚴、律の六つの宗派學派である。就中、最も行はれてゐたのは、三論、法相の二宗であつた。今一々の宗派を簡単に紹介しよう。

俱舍宗といふのは、印度の世親論師の作の俱舍論を所依とする宗旨で、此の論は玄奘三蔵が翻譯してから、支那、日本に傳はつたが、我が國では、法相宗の附宗となつて、獨立しなかつた。

成實宗は印度の訶梨跋摩の成實論を所依とする宗旨で、三論を譯した羅什に依つて翻譯せられてから、一時盛んに行はれたが、我が國には天武天皇の頃、百濟の僧通藏が傳へたが、三論宗の附宗となつて、これ亦獨立しなかつたのである。

三論宗は印度の龍樹菩薩の作に係る中觀經略して中論といふ、十二門論の二部と同じく印度の提婆論師の作に係る百論の三部の論を所依とするので、三論宗といはるゝのであるが、此の三部は羅什が支那に来て、翻譯してから、盛んに行はるゝやうになつた。我が國では、推古天皇の三十三年に來朝した高麗の僧惠灌が支那の吉藏から受けて、傳へたのである。惠灌は元興寺に住し、後、井上寺に居つたが、其の門下に僧旻、福亮、智藏、惠師、惠輪、道登、惠雲、靈雲、惠妙、常安、惠隣、智圓等といふ名僧が輩出したので、三論宗は甚だ昌んに行はれた。後、

道慈律師が入唐して、又此の宗を傳へて來たので、我が國の三論宗は二流に分れた。即ち惠灌の一流を元興寺流といひ、道慈を大安寺流と呼ぶのである。

法相宗は六經十一論を所依とする宗旨であるが、就中、彌勒説といふ瑜伽論と世親作の唯識論を主とするので、玄奘が印度の戒賢に受け、支那に歸つてのち、唯識論を翻譯してから、唐朝に盛んに行はれた。我が國では、百濟の歸化人の裔である道眼が入唐して、玄奘に就いて學び、歸朝の後、之れを廣めた。其の後、智通、智達の二人が又入唐して、玄奘と其の高足の吉藏に就いて學び、歸朝して之れを廣めたが、其の後、智鳳、智意、智雄等が入唐して、智周大師から傳へて來た。斯様に、我が國の法相宗には、三傳あるのであるが、併し二流に分れてをる。道昭、智通、智達の傳へた方を南寺の傳又は元興寺の傳といひ、智鳳等の傳へた方を北寺の傳又は興福寺の傳と稱するのである。有名な行基や義淵も此の宗の人である。

華嚴宗は華嚴經を所依とする宗旨で、三回支那に翻譯されてをる。隋の末、唐の初の頃に、杜順が出て、始めて本宗の基を開き、其の門下の智儼から、法藏に

傳へ、夫れから澄觀、宗密の二人に至つて盛んになつた。我が國では古い時代から華嚴經を寫したこともあり、養老の頃講じたこともあり、聖武天皇の頃、道璿が來朝の時、多くの華嚴經に關する註釋書を齎したこともあるが、新羅の僧審祥を祖とすると云ふのが通説である。夫れから良辨が出て盛んになつたのである。

律宗は釋迦の説かれた戒律の本が五部ある中に、曇無德部の四分律を所依とする一宗で、支那には道宣、南山宗、法礪、相部宗、瓊素、東塔宗の三派に分れて、唐朝に昌んであつた。我が國には善信尼が百濟に赴いて、戒法を學んだのが始まりで、天武天皇の時、道光が入唐して、之れを傳へ、聖武天皇の時、唐僧道璿が又之れを傳へ、同じき天皇の時、唐僧の鑒眞が三たび之れを傳へたので、之れを律の三傳と稱するのである。

以上謂はゆる後世から、南都の六宗、又は古宗の六宗と稱せらるゝ六つの宗旨の概要を述べたのであるが、此の時代の佛教は、夫れに依つて、自己の安心立命を得るといふよりは、寧ろ佛法の功德に依つて、小は組人の事から、大は天下

國家の事に至るまで、災禍を禳ひ、幸福を祈り、泰平を祈るといふ風であつた。謂はゆる現世の幸福を來す功德のあるものとして、佛教が大層尊崇せられたのである。従つて、當時の政治は其の一面に於いて、常に佛教の功德に依つて、泰平の治、無爲の樂を致さんと苦心してをつたので、此の傾向が著しく、當時の法令や行政の上にはあらはれてをる。即ち佛教は政治の一部として行はれたのであつて、全然國教の姿になつて居たのである。即ち僧侶の得度法、寺院の管理法、僧官の補任法等總て、政府で行つて居たので、今日のやうな政府と殆んど表面上何等の關係のない宗派とは、全く其の趣を別にしてをる。従つて、當時の佛教を知るには、此の政治的方面にあらはれた佛教を知らねばならぬ。佛教は勿論來世の幸福の爲にも信ぜられて居たには違ひないが、併し治國平天下の良法として、より多く行はれて居たといふことを忘れてはならぬ。此の點を明白にせぬ以上、寧樂朝の佛教を解することは到底不可能である。故に、今次章に於いて佛教と政治との關係を極めて簡單に述べようと思ふのである。

第五章 寧樂朝の政治と佛教

上述の如く、寧樂朝に於いては、佛教を以て、治國平天下の妙法と考へたのであるから、上は朝廷に於いて、盛んに講經轉經を行ひ、法會寫經を行はれたばかりでなく、天變地異に際しては、必ず天下諸國に詔して、轉經せしめ、或は經典を書寫せしめ、或は佛像を造立せしめて、以て災禍を禳ひ、五穀成熟、國土泰平を祈らしめたものである。此の時代に於いて、尤も尊崇された經典は、法華經、金光明經、最勝王經、仁王經、金剛般若經、大般若經、藥師經、觀音經等で、何れも、其の講讀書寫の功德に依りて、大層な功德があるものと信ぜられて居たので、鎮護國家の三經等と稱するものも出来たのである。夫れから、天變地異等の災禍は人間の善からぬのを、天地鬼神が怒つて、下すのであるといふ信仰から、懺悔といふことを種々行はれた。即ち懺悔げんげといふのがそれであつて、藥師を本尊として、懺悔をするのが、藥師懺悔、吉祥天を本尊として懺悔法を修するのが、吉祥懺悔といふ類が、其の例である。斯様に此の時代の佛教は殆んど全く現世の幸

福安泰を求むる手段として、行政の一面として行はれたのである。

此れ等の精神が最もよくあらはれてゐるのは、聖武天皇の天平十三年の三月に發表された國分寺建立の詔勅である。即ち此の詔勅に依れば、天下の諸國に悉く國毎に僧寺と尼寺を一寺宛建つべきことを令せられたので、僧寺は國分寺又は金光明四天王護國之寺と稱し、尼寺は法華滅罪之寺と稱せしめ、僧寺には、毎寺封五十戸、水田十町を施入し、僧二十人を置かしめ、尼寺には、毎寺水田十町、尼十人を置かれたのである。而して、此れ等の國分寺は何をする爲に造つたのであるかといふに、毎月の八日に最勝王經を轉讀して、國家の泰平を祈らせる爲に造られたのである。

同天皇は大層佛教を信じ給うた御方で、讀者も知らるゝ通り、躬ら三寶奴と稱し給うた程である。皇后の光明子も又篤い信者で、多くの慈善事業をなされてゐる。同天皇の御代には有名な東大寺が建てられたのであるが、此の東大寺は諸國に置かれた國分寺の本山で、總國分寺である。それから、國分尼寺の方の本山も大和の國に造られたが、法華寺といふのがそれである。斯様に

して、天下の諸國には國毎に必ず國府といふものがあつて、中央政府から任命せられた國造即ち地方長官があると共に、國分寺に駐在する國師讀師なるものがあつた。國師は後に講師といふ名になつて、平安朝の頃までも行はれて居たのであるが、是れは國造が地方の政治を行ふと同じく、地方の教化事業を監督して居たのである。斯様にして、佛教は天下到るところに行はれ、南は大隅、薩摩の國々から、北は蝦夷の部落にまで行はるゝやうになつたのである。管に行はるゝやうになつたのみでなく、蝦夷の人で、自ら出家して僧になるものさへ出來て來た。斯様な勢ひであるから、上の行ふところ下之れに倣ふのは、水の低きに就くが如くて、天下は滔々として佛教に赴いたのである。従つて、弊害も生じて來るのは、數の免れないところであるので、遂には、弓削の道鏡などいふやうな惡僧が出るといふことになつたのである。今此の時代に於ける政治と佛教との關係を示す爲に、左に此の種の事件の略年表を掲げよう。

政治的方面としてあらはれたる佛教に關する略年表

元正天皇

養老四年(西曆七二〇) 諸國に放生會を修せしむ。

聖武天皇

神龜二年七月(西曆七二五) 諸國に詔して、國家平安の爲に、金光明經又は

最勝王經を轉讀せしむ。

同 三年六月(西曆七二六) 太上天皇不豫、天下に放生し、僧尼三十人を度す。

同 五年十二月(西曆七二八) 國別金光明經十卷を頒つ。

天平元年六月(西曆七二九) 仁王經を宮中及び畿内七道に講ぜしむ。一

代一度仁王會の始。

同 九年三月(西曆七三七) 詔して、國毎に釋迦像一軀、挾侍二軀を造り、大般若經一部を寫さしむ。

同 八月(西曆 同) 諸國に命じ、毎月數度最勝王經を讀ましめ、六

齋日に殺生を禁ず。

同 八月(西曆) 同 天下泰平國土安寧の爲に宮中に大般若經最

勝王經を轉讀せしめ、四百人を度し、諸國に五百七十八人を度す。

同 十年四月(西曆七三八) 京畿七道に詔して、最勝王經を讀ましむ。

同 十一年七月(西曆七三九) 天下に詔して、五穀成熟經を轉讀せしめ、悔過せしむ。

同 十二年六月(西曆七四〇) 國毎に法華經十部を寫し、七重塔を建てしむ。

同 九月(西曆) 同 勅して國毎に觀音像一軀を造り、觀音經十卷を寫し、廣嗣の亂を祈らしむ。

同 十三年二月(西曆七四一) 牛馬屠殺並に田獵を禁ず。

同 三月(西曆) 同 國分寺建立の詔勅出づ。

同 十五年正月(西曆七四三) 最勝王經を金光明寺に讀ましむ。

同 十六年七月(西曆七四四) 國別正稅稻四萬束を國分二寺に分納せしむ。

む。

同 十二月(西曆) 同 天下諸國に一七日藥師悔過を修せしむ。

同 十七年九月(西曆七四五) 三年殺生を禁ず。

同 九月(西曆) 同 天皇不豫、諸寺に藥師悔過を修せしめ、三千八百人を度す。

同 九月(西曆) 同 京都及び諸國に詔して、大般若經一百部藥師經七卷を寫し、藥師像七軀を造らしむ。

同 十八年三月(西曆七四六) 勅して仁王經を講せしめ、天下に大赦す。

同 十九年五月(西曆七四七) 仁王經を宮中及び諸國に讀ましむ。

同 二十年七月(西曆七四八) 太上天皇の爲に法華經一千部を寫さしむ。

孝謙天皇

天^天平^平元^元年^年正^正月^月(西曆七四九) 天下の諸寺に悔過を修せしめ、殺生を禁ず。

天^天平^平二^二年^年五^五月^月(西曆七五〇) 宮中及び畿内七道に仁王經を講せしむ。

同 四年正月(西曆七五二) 殺生を禁ず。
同 七年十月(西曆七五五) 殺生を禁ず。
同 八年六月(西曆七五六) 一年間殺生を禁ず。

淳仁天皇

天_平元_字元年正月(西曆七五七) 四月十五日より五月二日に至る毎國梵網經を講ぜしむ。

同 二年七月(西曆七五八) 國別に金剛經三十卷を寫さしむ。

同 八月(西曆) 同 天下に般若經を念ぜしむ。

同 四年七月(西曆七六〇) 光明皇后の爲に天下諸寺に阿彌陀淨土の畫像を作らしむ。

同 五年六月(西曆七六一) 諸國國分尼寺に阿彌陀像を造らしむ。

同 八年十月(西曆七六四) 放鷹司を廢し放生司を置く。

同 十月(西曆) 同 田獵を禁ず。

稱徳天皇

神_護元_靈元年正月(西曆七六七) 吉祥悔過を諸國國分寺に修せしむ。

同 二年正月(西曆七六八) 御齋會を宮中に修す、御齋會の始。

光仁天皇

寶龜元年四月(西曆七七〇) 百萬塔功終る、十大寺に分置す。

同 七月(西曆) 同 大般若經を諸寺に轉讀せしめ、天下に勅し一七日間酒肉を禁ず。

同 二年正月(西曆七七一) 諸國の吉祥悔過を停む。

同 三年十一月(西曆七七二) 詔して諸國國分寺に毎年正月一七日吉祥悔過を修せしむ。

同 五年四月(西曆七七四) 天下に般若經を念ぜしむ。

同 六年九月(西曆七七五) 勅して天長節を置き、諸寺に轉經せしむ、天長節の始。

第六章 寧樂朝の文化と佛教

前時代から引續いて、寧樂朝時代に於いても、時代の先覺者は僧侶であつて、新知識の輸入者も亦僧侶であつた。入唐する者は留學生といふものがあるにはあるが、比較的活動してをらぬやうである。之れに比べて、僧侶の方の留學生即ち學問僧は、常に佛教を學習して歸朝するばかりでなく、其の他の藝術や學術のことも心得て歸るものあれば、佛典以外の書籍を齎して歸朝するものもあるといふ工合で、此の時代の新知識の多くは僧侶に依つて輸入せられたといつても過言ではないのである。殊に玄昉等といふ人は非常な學者で、歸朝の際には、佛像及び經論五千餘卷を持來したといふことである。此の人は随分從來の歴史家からは、あらぬ風説の爲に悪くいはるゝ人であるが、我が文化史の上には大層功績を遺した人である。夫れから佛徹といふ林邑の僧が來たが、此の人は音樂に秀でた人で、林邑樂といふものを傳へてをる。其の他、一々に掲ぐるまでもないが、東大寺の建立を始めとして、招提寺、西大寺等

の建立があつた爲に、繪畫、彫刻、建築の上には、實に言ふべからざる偉大なる影響を與へてをる。我が繪畫史、彫刻史、乃至建築史の此の時代は殆んど全く佛教繪畫、佛教彫刻、佛教建築ともいふべきものばかりで、今日遺つてをるものも、佛教に關係を有せぬものは少ないのである。殊に正倉院に收められてをる當時の美術工藝品を拜觀すれば、當時の交通が如何に頻繁で、且つ佛教に負へるところが多いかといふことは直に分るのである。左様なことを詳に述べることが省略することゝして、左に此の時代に於ける交通の有様を示す略年表と、寺院建立に關する略年表を掲げて、讀者の想像に任せることゝしよう。

寧樂朝に於ける唐及び三韓と我が國との交通に關する略年表

元正天皇

靈龜二年(西曆七一六)八月 玄昉入唐す。

養老二年(西曆七一八)九月 行善高麗國より歸朝す。

同 (西曆同) 道慈唐より歸朝す。

聖武天皇

天平五年(西曆七三三)四月 榮叡、普照入唐す。

同 七年(西曆七三五)四月 玄昉唐より歸朝す。

同 八年(西曆七三六)五月 天竺僧善提憊那、林邑僧佛徹、唐僧道璿等太宰府に着す。

孝謙天皇

^{天平}勝寶四年(西曆七五二)六月 新羅國王子金泰廉來朝し、大安寺及び東大寺を禮す。

同 五年(西曆七五三)十二月 入唐僧普照、唐僧鑒眞、法進、如寶を伴ひて太宰府に着す。

淳仁天皇

^{天平}寶字二年(西曆七五八) 新羅國の歸化僧尼三十四人を武藏國に移し、新羅郡を置く。

同 七年(西曆七六三)十月 入唐僧戒融、勃海より歸朝す。
寧樂朝に於ける寺院造營に關する略年表

元明天皇

和銅三年(西曆七一〇)三月 山階寺を平城春日に移し、興福寺と稱す。

同 (西曆同) 大安大寺を平城に移す。

同 七年(西曆七一四)三月 興福寺を慶す。

元正天皇

靈龜元年(西曆七一五) 越前國氣比神宮寺建つ。

同 二年(西曆七一六)五月 元興寺を平城左京に移し、本元興寺と稱す。

養老二年(西曆七二八)九月 法興寺を平城に移し、新元興寺と稱す。

同 (西曆同) 大和永隆寺建つ。

同 五年(西曆七二二)五月 大和長谷寺の造營を始む。

同 七年(西曆七二三) 興福寺に施藥院及び悲田院を建つ。

聖武天皇

神龜四年(西曆七二七)三月 大和長谷寺を慶す。

天平五年(西曆七三三) 大和綱索院建つ。

同十三年(西曆七四一)三月 諸國國分寺造營せらる。

同十八年(西曆七四六)六月 筑紫觀世音寺成る。

同十九年(西曆七四七)三月 新藥師寺建つ。

同 (西曆同) 近江石山寺建つ。

孝謙天皇

勝平 四年(西曆七五二)四月 東大寺落慶大佛開眼供養を行ふ。

同 五年(西曆七五三)八月 大和普光寺建つ。

同 七年(西曆七五五)十月 東大寺戒壇院を慶す。

同 八年(西曆七五六) 鹿島神宮寺建つ。

淳仁天皇

天平 三年(西曆七五九)八月 唐招提寺建つ。

同 四年(西曆七六〇)三月 大和子島寺建つ。

同 五年(西曆七六一)六月 大和法華寺淨土院建つ。

稱徳天皇

天平 元年(西曆七六五) 西大寺建つ。

神護 元年(西曆七六七)九月 八幡比賣神宮寺建つ。

景雲 三年(西曆七六九) 下野中禪寺建つ。

光仁天皇

寶龜 元年(西曆七七〇) 紀伊粉河寺建つ。

同 八年(西曆七七七) 勝尾寺金堂建つ。

寺院の建造は略右の通りであるが、此の外行基建立の寺四十餘寺あり。此の中で、殊に注意せねばならぬのは、諸國國分寺の建立に依つて、地方の工藝の發達を促したことが一通りではなかつたらうといふこと、及び興福寺、大安寺のやうな大寺が新京に移されたこと、並に新藥師寺、東大寺、招提寺、西大寺等の諸大寺の造營に依つて、我が國の彫刻や建築が如何に多大の進歩をなしたかといふこと等である。夫れから印刷術は百萬塔造營の時に、陀羅尼の摺本を作つて、塔の中に納めたのが、我が國では、始まりであることも注意するに足る事柄である。

第七章 佛教興隆の弊

凡そ天下の事一面に利あれば他面に害あるを免れぬもので、春があれば秋があり、天あれば地ありといふ有様で、一面の柄は何處へ往つても發見されぬのは是非もないことである。寧樂朝に於いて、斯様に興隆された佛教は、思想上はいふに及ばず、風俗習慣の末から、文學藝術政治の大に至るまで、非常なる影響を及ぼし、従つて好結果を與へたのであるが、夫れと共に他面に於いては、少なからぬ弊害を惹起したのである。其の弊害數ある中に、最も重く且つ大きなものは、保護の厚きに馴れて漸く起つて來た僧風の墮落、夫れから、佛教と政治とが接近した結果として起つて來たものとしては、僧侶の俗權に干渉する機會が多くなつたので、終に道鏡の如き大逆無道のものを生じたことの一つである。即ち此の時代に於ける佛教の弊は、經濟的方面の充實に依つて起つた寺院及び僧侶の濫行及び墮落、夫れに従つて起つて來る信仰の墮落、次には、國教制度の餘弊として起つて來た政權の爭奪に關する軋轢が宗教を腐敗

せしめ、墮落せしめたことであるといふことが出來ようと思ふのである。

先づ此の時代の僧侶に關する法制は如何であるかといへば、大寶令の僧尼令に規定された法律が依然拘束力を有して居たのである。而して、僧侶を取締ること、換言すれば、宗教行政の方面は如何であるかといへば、治部省の立蕃寮に於いて、僧尼令に依つて行ふのであるが、是れはいはゞ外面のこととして、佛教内部の取締は別に僧侶に自治的方法を採らせるやうにしたので、僧綱といふものを置いて、其の責に任じたのである。併し僧綱は前時代から出來て居たので、必ずしも、此の時代に出來たのではないが、併し此の時代に其の制度が出來上つたといふことは事實である。此の時代に於いて、僧綱と稱するのは、僧正、僧都、律師の三階であつて、僧正に大僧正と僧正との二級あり、僧都に大僧都と少僧都との二級あるので、三階二級となる譯である。左に表を出さう。

僧綱

僧正

大僧正（聖武天皇天平十七年行基初任）
僧正（推古天皇三十三年觀勒初任）

僧都

大僧都(文武天皇二年道昭初任)

少僧都(文武天皇二年磯成初任)

律師(文武天皇十二年初置。初任の人未詳)

最も律師には、稱徳天皇の天平神護二年に大律師(基真任)及び中律師(圓興任)を置かれたこともあるが、これは一時のこととて、其の後は行はれなかつた。夫れから寺院の俗務を司るものとして、寺司、法頭等を置かれ、寺院造營の爲には造寺司を置かれたのである。又放生の事を司る爲に、放生司を置かれたこともある。

右の僧綱は元正天皇養老六年七月の令に依つて、其の後は藥師寺に居つて、法務を行つてゐたが、天智天武の朝から、佛教が非常に興隆されて、諸國に寺院が澤山建つた結果、中には維持に困難を來すものも少なからずあり、又は造りかけて、費用の續かぬ爲に其の儘になつたものもあつたらしい。元正天皇の靈龜二年五月には、藤原武智麻呂が寺院の頽廢を歎じて、興隆を朝廷に請うたので、廢寺を合併すべしといふことになつたことが、續日本紀に見えてをる。

同天皇の養老五年五月には、再び合寺の令を七道及び太宰府に下されたのを見れば、益、此の傾向が著しくなつたと見える。聖武天皇の天平七年六月に至つて、合寺を禁ぜられたが、筑紫の觀世音寺等は度々促されて漸く出來た位であるから、此の頃は寺院濫造の弊が既に著しくなつて、維持困難に赴き、寺院が衰頽して居たことは蔽ふべからざる事實である。夫れから、僧風の頽廢も漸く盛んになつて來たので、養老元年の四月には僧弊を匡すこととなり、同六年の七月、天平勝字三年の六月にも僧弊を匡されたが、中々行はれなかつたと見えて、光仁天皇の寶龜十一年の正月には、殊に僧風の頽廢を誡められてをる。夫れから、僧侶が優遇されるので、一般の人民も僧侶になりたがつて、遂には私に出家するもの等もあつたと見え、養老元年の五月には、浮浪の徒の素に出家するを禁じて、出家制度の年齢を定められ、同四年の正月には、僧尼に公驗を授與することを始められ、同年の八月には、公驗の授與を嚴しくして、十五人に限ることとなり、越えて、神龜元年の十月には、僧尼の名籍を勘定して、公驗を給することとなり、光仁天皇の寶龜十年の八月には、僧尼の本籍、諸寺の名籍を製し

て、公驗を與ふることゝ定めらるゝに至つた。其の他、僧侶や巫女等が種々な巷説を造つて、人民を迷はすので、巫呪淫祠を禁ぜられたことも、度々であつた。それから、儀式の方も、追々と亂れて來たものと見えて、養老四年の十二月には、轉輕唱禮の音を正す詔勅が出てをる。加之、僧侶であつて、罪を犯した爲に、配流に處せられ、或は還俗の刑に處せられたことも、度々であつた。斯様に僧風が衰ふると共に、一方には、諸の寺院が寺田を澤山有つてをるので、經濟上の資力が充實して、漸々寺田を増さうと圖るやうになり、又弊害が續出して來た。そこで、元明天皇の和銅六年四月には、諸寺の田記を改作せしめられ、同十月には、諸寺の田野の過格を還さしめられたことがある。それから、聖武天皇の天平十八年三月には、寺家の買地を禁止せられ、同五月には、再び寺家の墾田園地を買うて寺地と爲すことを禁止せらるゝに至つた。これを見ても、當時寺院が如何に俗權に汲々として居たかといふことが分るのである。

此の時代に於ける僧侶と藤原氏との政權爭奪は、凡そ三回の大事件を惹起してをる。即ち第一回は、玄昉對藤原廣嗣の争ひで、これは廣嗣の反亂と爲り、

43

玄昉の勝に歸したが、併し玄昉も筑紫觀世音寺の落慶供養の時、廣嗣の冤魂の爲に頓死したと傳へられてをる。第二回は、道鏡對藤原仲麿即ち惠美押勝との争ひで、これも道鏡の勝利に歸し、道鏡は一時太政大臣禪師と爲り、百官の朝賀を受くるといふ勢ひであつたが、第三回の衝突は藤原氏に依つて企てられ、藤原百川が中心となり、和氣清麿を通して、遂に道鏡を下野の藥師寺に謫死せしむるに至つた。是に於いて、政權の爭奪の一幕は終つたが、稱徳天皇崩じて、藤原百川が光仁天皇を擁立するに至つて、天智の血統は此に天武の血統に代つて帝位に即き給ふといふことになつて、局面が一變したのである。此の局面一轉に亞いて、桓武天皇の御出世と爲り、延暦三年の十一月には、東大寺をも棄て、山城の國長岡に遷都といふことになつて、寧樂朝の舞臺は大なる轉回を來すことになつたのである。此の政治上の變革と共に、佛教史も亦新たな局面を展開して來た。新たな局面とは何であらう。最澄及び空海に依つて綴られた平安佛敎史の初頁が正に是れてある。

桓武天皇は實に即位の初、着々として、佛教の弊を矯めんことに叡慮を惱し

給うた形跡が明に見えてをる。即ち延暦二年の四月には、國分寺の僧に闕員があつても、新たに出家させて、之れを補ふには及ばぬといふ規定を設け給ひ、同六月には、私に道場を建て、田宅園地を捨施し、並に寺地を賣易することを禁止せられ、同じく十月には、諸國の國師の員數を減じて、大國二人、小國一人と定められ、越えて十一月には、梵唄の亂れてをるのを正されるといふやうに、天皇の御政策は佛教の弊害を救済する爲に、種々に案出されたものであるといふことは拜察するに餘りあることである。而して、長岡遷都の後六年、延暦八年の三月には、有名な造東大寺司を廢するの御英斷に出で給うた。斯様に、佛教史の舞臺は正に一轉せんとしてをる時に、最澄と空海とは呱呱の聲を擧げたのである。即ち最澄は神護景雲元年に近江の滋賀に生まれ、空海は寶龜五年、讚岐の國屏風ヶ浦に生まれたのである。而して、延暦三年長岡遷都の年は、最澄は正に十八歳、空海は十一歳に達してゐたのである。一花開いて天下の春を知るとすれば、光榮ある平安佛教史の第一頁は、將に希望ある二青年に依つて開かれんとしてをるのであつた。

下篇 平安朝の佛教

第一章 時勢概観

桓武天皇が延暦三年の十一月、七朝七十五年間の玉城を棄て、山城の國長岡の地に遷都し給うてから、十年目の延暦十三年の十月に、同國平安の地に再び都を遷し給うた。それから、源賴朝が鎌倉に幕府を開くまで(元暦元年十月公文所竣工に至る)凡そ三百九十年間を平安朝と稱するのである。

凡そ我が國の古代は中々中央集權の政治を行ふことが出来なかつた。夫れは如何いふ譯かといふと、氏族といふものが重んぜられた結果として、謂はゆる氏族政治なるものが行はれて、蘇我氏、中臣氏、物部氏等といふ大氏族は、各其の私有の土地と、私有の人民とを有して居たので、實際、朝廷に屬する人民は僅に一部分であつた。そこで、聖德太子は天下の人民を悉く公民とし、天下の土地を悉く公地と爲したいといふ御希望から、種々の御計畫があつたやうに

思はれる。有名な憲法十七條を拜讀して見ても、左様な御考へてあつたことが伺はれるやうである。憲法の第十二條に、

國司國造、勿斂百姓、國靡二君、民无兩主、率土兆民、以王爲主、所任官司、皆是王臣、何敢與公賦斂百姓。

とあるが如きは、此の間の消息を漏らしてをるものであらうと思はるゝ。而して、大化の改新に依つて、此の事が成就し、朝廷の威權は漸く重く、中央集權の實が擧がつて來た。加之物部氏、蘇我氏等といふ大氏族が倒れたので、此方面の事業が愈進捗して來たのである。夫れから、寧樂朝に入つては、愈中央集權の實が擧がつたのであるが、併し、佛教興隆の結果、物部氏、蘇我氏に代るに、僧侶なる一階級を以てし、夫れが爲に、當時の大氏族であつた中臣氏即ち藤原氏との軋轢を生じた。而も光仁天皇の御代に至つて、藤原氏の勝利に歸し、僧侶の勢力は衰へた。斯様にして、世は平安朝と移つたのである。

平安朝は主權の實權の移動から見れば、凡そ三期に分つことが出来るやうに思はるゝ。即ち桓武天皇から平城、嵯峨の兩朝の末頃迄、即ち延暦、大同、弘仁

天長の頃は、主權が確に天皇に屬して居た時代であつて、最も興國の氣象に富んだ時代である。文化の上から言つても、弘仁時代は此の期の花である。次には、藤原氏の威權が漸く盛んになつて、宇多醍醐の時代には、例の時平等といふ人が出て、藤原氏の權力は非常に盛んになり、宇多天皇の制禦策も、道眞の左遷に依つて、空しく水泡に歸し、藤原氏の勢ひといふものが愈盛大になり、遂には、攝政關白などといふ官が出来て、天子は空しく大位に備はり給ふといふやうな事となつたが、此の風潮の頂點を代表してをるものが、御堂關白道長である。此の習慣は一面に於いて、其の女を皇室に納れて、天子の外戚と爲るといふ奇習を生じて、藤原氏の長者は實に官は、太政大臣から、攝政關白に至り、天子の外戚と爲つて、天下に號令するに至つたので、主權の形式こそ天子の有し給ふところであるが、實際の權力は、攝政關白の謂はゆる攝關にあつたのである。故に、此の時代を藤原時代と稱するも、差支ない位である。現に、道長の如きは、

此の世をば我が世とぞ思ふ望月の

かけたることもなしと思へば

と歌つたことは、人のよく知るところである。斯様に藤原氏が盛んになるに従つて、今度は氏族内の軋轢が生じて來て、兄弟叔姪互に相反目し、相傷けるといふことになり、一面には泰平に慣れて、氣力を消耗した結果、其の實力を失ふと共に、土地私有制度が漸々確立せらるゝやうになり、地方の土族、豪族等といふものが生じて來た。源平二氏の如きは其の代表者である。斯様にして、軍事警察の實際が武人に移るに従つて、朝廷の檢非違使、追捕使等といふものは有名無實になり、地方の豪族は土地を私有すると共に、人民をも私有して、家の子、郎等などといふものを生じ、謂はゆる御家人なるものが出來て來た。而して、地方の豪族共は互に鬭争を事とするに至つた。天慶の亂の平將門を始めとして、前九年、後三年の兩役の如きは其の一例である。斯様に藤原氏の勢力が事實に於いて失はるゝと共に、地方の豪族は漸く勢力を蓄積して來た。即ち藤原氏を榮華の夢に酔うてをるギリシアとすれば、地方の豪族は北方の強マケドニアである。此のマケドニアのフィリッポが平忠盛となつてあらはれ、其の子の清盛は正にアレキサンダー大王としてあらはれ、一舉にして、ギリ

シアなる藤原氏を壓倒したのである。併し主權の實力は清盛が太政大臣に任ずるまでは、一代の上皇乃至法皇にあつたのである。即ち院にあつたのである。此の奇しき習慣は後三條天皇の御計畫になつたといふことで、愈々實行の運びに至つたのは、次の白河法皇の時からである。故に此の時代を院政時代と稱することが出来る。院政時代で、白河、鳥羽、後白河の三法皇が最も有名である。

以上は平安朝に於ける主權の實際の所在に依つて、三期に此の時代を分けたのであるが、此の政治上の區分は又正しく佛教史の上にも、其の反映を認むることが出来る。即ち延暦、弘仁の時代は天台眞言兩宗の發生時代で、最も活氣に富んだ時代である。夫れから、藤原時代は兩宗が全く出來上つて、其の隆盛を競うた時代で、此の時代に於いて、天台宗は事實上に於いて、全く眞言宗と化し、謂はゆる台密の名をもつて呼ばるゝやうになつた。而して、宇多法皇の御出家を始めとして、皇室の御歸依は愈々厚く、天皇、皇后、皇子、皇孫の御出家といふことが漸く行はるゝやうになり、攝關の入道といふことが、一世の風潮とな

つた時代である。而して、謂はゆる門跡なるものが漸次に出来て、諸大寺の主人は皆法親王の手に歸するに至つたので、僧侶が捨家棄欲の形から、王侯貴顯の形に移つたのは、此の時代のことである。それから、院政時代に至つては、信仰の結果、寺領、寺田の寄附が多くなり、夫れが爲に、諸大寺の財政が充實すると共に、自ら手を出して、寺領を擴張することとなり、諸寺の實權が實力ある下位の衆僧に移つた時代で、此れは地方の豪族の勃興と其の軌を一にするのである。寺領の増加は、之れを侵略する者に對する防禦の必要から武力の養成となり、謂はゆる南都北嶺の荒法師が出来たのである。殊に叡山の跋扈は甚しいもので、白河法皇も雙六の采、賀茂川の水、山法師の三不如意の歎を發し給ふに至つた。故に院政時代に於ける延暦寺や、興福寺や、園城寺や、東大寺等は、宗教上の寺院といふよりは、寧ろ、夫れ夫れ一個の豪族といつた方が適當である。即ち我れ等は院政時代に於いて、源平兩氏と並んで、延暦寺氏や、興福寺氏や、園城寺氏や、東大寺氏の四豪族が近畿に勃興したと見たいのである。従つて宗教は全く此れ等豪族の閑餘の遊戯に過ぎないものとなつてしまつたので、此

れ等の豪族の上位に位するものが、修法や祈禱をするのは、恰も藤原氏といふ一族が詩歌、管絃、蹴鞠等を本職として居る閑餘の事業として、攝政、關白、太政大臣乃至は納言等といふ名義の下に、朝廷の政治に表面だけ、形式だけ關係して居たのと少しも變つたことはないのである。斯くの如く、諸大寺が豪族と化し、僧侶が武人と化するに及んで、宗教の生命は全く終焉を告げてしまつたのである。南北の兩京に巍然として聳えて居た堂塔伽藍は、全く死滅した宗教の巨大な遺骸であつたのである。是に於いてか、次の時代に大革命が起つたのである。

第二章 新京の二宗

都が平安城に遷されると共に、新しい二宗派が勃興する氣運に向つて來た。二宗派とは何ぞ。曰く、天台宗。曰く、眞言宗の二宗である。而して、天台宗は近江の人、傳教大師最澄に依つて傳へられ、眞言宗は讃岐の人、弘法大師空海に依つて傳へられたのである。是に於いてか、古京の六宗の外に、新たな二宗派

を加へたので八宗なる名目が出来た。我れ等は平安朝の佛教史を論ずる前に、此の兩個の偉人を紹介するの光榮を有せねばならぬ。

最澄、空海の二人は我が國が曾て産出した偉人中の偉人であるが、此の二人は淺からざる關係を有つてをる。前にも述べたやうに、最澄は神護景雲元年の生まれて、長岡遷都の時が十八歳、空海は寶龜五年の生まれて、長岡遷都の時が十一歳、即ち七歳違つてをる。夫れから延暦十三年平安遷都の時是最澄が二十八歳で、空海が二十一歳、夫れから、延暦二十三年の七月に、遣唐使の船に便乗して、肥前の松浦を出帆した時は、兩人共に同道して纜を解いてをる。最も空海は第一船に、最澄は第二船に乗つて居た。夫れから、最澄は天台山の道邃に就いて、天台を學んで、翌二十四年の六月に長門の國に歸着し、空海は青龍寺の慧果に就いて、眞言宗を學んで、其の翌年の大同元年の八月に歸朝してをる。夫れからは互に經文や悉曇梵語の疑義を質し合つてをることもあれば、交通もし、訪問もして、親しい交際を續け、最澄は空海に就いて、灌頂まで受けた間柄である。早い話が、一緒に洋行して、歸つてからは、同じ都に住んで、尤も一方は

比叡山)同じ朝廷に用ひられてをるのであるし、又同じく新思想の鼓吹者として世に歡迎せられてをるのであるし、且つ空海は非常に溫和な人であつて年齢も七つ下のことであるから、此の兩人が終生親しい交際を續けたといふことは誠にあり得べきことである。夫れを、やれ最澄は空海の弟子であるの、やれ空海は最澄の弟子であるの、我が宗の方が偉い、いや我が宗の方が偉いといつて、後世になつて、天台、眞言の末徒達が眼をむいて争つてをるのは、何と滑稽なことではあるまいか。今天台、眞言二宗の消長を論ずるに先だつて、此の兩偉人の一生を極めて簡単に紹介しよう。

最澄は近江志賀の人で、其の祖先は漢人であるといふ。大安寺の僧て行表といふ人が近江の國に来て居たので、就いて出家し、夫れから、南都に遊學して居たが、後には、比叡山に登つて修行して居た。(延暦四年七月草庵を結ぶ)延暦七年の七月に、一字の寺を建て、比叡山寺と號し、等身の藥師如來を刻んで、本尊としたといふことである。此の比叡山といふのは、前に近江にをつた藤原の武智麿が此に閑居したことがあるので、最澄が初めて此の山に登つた時に

は、其の庵の跡などがあつたかも知れぬ。最澄は此の山に閑居して、天台の法門を味うて居た。併し最澄といふ人は中々な豪傑で、やり手であるので、其中には、折々長岡に出て、朝廷にも出入して居たらしく、朝臣等とも親しく往來して居たやうである。傳説に依れば、延暦十三年の九月に、比叡山の一乗止観院で、初度の供養を行つたが、其の時に桓武天皇が御臨幸遊ばされたといふことである。此れは丁度、長安遷都の前月の月の出来事である。夫れから、同十六年には内供奉と爲り、同十七年の十一月には法華十講會を修してをるし、同二十年の十一月には、南都の十大徳を比叡山に招待して、法華十講を修してをる。之れを見れば、最澄の聲名が漸く高くなつてをることが分るので、當時驕つてゐた南都の宿老が、深山の比叡山までも遙々出かけて行つてをるところを見れば、最澄の聲望といふものが、決して輕くなかつたといふことが分るのである。夫れから、同二十一年の正月には、朝臣の和氣の弘世が高雄山に最澄を請じて法華十講を修してをる。此の人の盡力で、同九月には入唐の聽許が出たが、其の弟子の義眞を譯語通譯として伴ひたいといふことを上奏して、又

許されたところを見ると、最澄の宮中に於ける勢力が想像される。夫れから空海と一緒に入唐して、天台の法門を研究したが、僅に一年で歸つて來た。最澄は一年間の入唐往復を合せてに依つて、如何なることを學んで來たのであらうか。彼れは龍興寺に於いて、道邃に謁し天台の教門を受け、更に同寺の極樂淨土院に於いて、同師から菩薩大戒を授かつた。道邃は天台宗の開祖智者大師には、七世の法孫に當る人である。夫れから佛隴寺に往き、行滿に就いて、又天台の法門を受けた。之れを天台始覺法門の傳授と稱する。龍興寺の順曉阿闍梨に就いて、祕密灌頂を受け、密教の傳法を卒へた。加之、天台山の僧儻然から牛頭山の禪を受けた。(最も禪は入唐前行表から受けたといふことである)。故に、最澄の傳法は單純な天台宗ばかりではなく、天台眞言、戒律、禪の四宗を傳へた譯である。其の系統を示せば左の通りである。

日本天台開祖最澄傳法血脈

達磨附法(即ち禪) (血脈譜には、然の系を除く今之れに從ふ)

達磨—慧可—道信—弘忍—

神秀(北宗) — 普寂 — 道璜 — 行表 — 最澄
 惠能(南宗)

止觀(即ち天台)

悲文 — 悲思 — 智顛 — 灌頂 — 智威

悲威 — 玄朗 — 湛然

道邃(本覺) — 最澄
 行滿(始覺) — 最澄

圓頓戒(即ち大乘戒、又菩薩戒)

道邃 — 最澄

遮那業(即ち真言)

龍猛 — 龍智 — 金剛智

不空(金剛界)

善無畏(胎藏界)

一行
 義林

順曉 — 最澄

菩提流支 — 比丘大素(冥道無遮、並五佛頂法)

河池智多

江祕(普集、瓊瑠、如意、輪法)

靈光(軍荼利、菩薩、聖法、並聖像)

惟象(曼荼羅、大佛頂、行事)

雜曼荼羅

右の様に、最澄の系統は甚だ複雑であるが、最澄は之れを統一して一宗とした。即ち日本天台と稱せらるゝのが是れてある。最澄は歸朝後、非常に活動したのであるが、之れは後章に述ぶるから、此には略して置く。かくて、一代の英雄は弘仁十三年の六月四日、五十六歳を一期として、此の世を辭した。

空海は最澄に比べると、家系等が餘程よく分つてをる。俗姓は佐伯直父は田公といひ、母は阿刀氏で、代々國造の家柄であつた。寶龜五年六月の十五日に、多度津の屏風ヶ浦に生まれ、幼名は眞魚といひ、十二歳の時に、外舅阿刀大足といふ人に就いて、典籍を學んだが、穎悟の天性は此の頃からあらはれて居たといふことである。阿刀氏は有名な學者の家で、大足も伊豫親王の學士と爲つて、京都に出たので、空海も、十五歳の時、京都に出て、阿刀氏の家に寓し、十八歳に及んで時の學者の淵藪であつた大學に入學して、直講味酒の淨成岡

田博士などいふ人々に就いて、儒典を研究し、毛詩左傳等を學びしといふ終に志を佛教に傾け、雙髻指歸を作つて、儒教、佛教、道教の長短歸趣を論じ、佛教の最も優れたることを寓言に、寄せて説いた。夫れから、諸方を歴遊し、延暦十四年、石淵の勤操に就いて出家し、同年の四月、東大寺戒壇に受戒し、名を空海と改めた。かくて、葛城、金剛の諸山を跋渉し、槇尾山寺に修行して居たが、三十歳の時に、大和國高市郡久米寺の東塔大柱の下から、一部七卷の大日經を發見して、頻りに研究して居たが、解せぬところが多かつたので、入唐して、疑問を質したと思つて居た。ところが、延暦二十三年に藤原葛野麿が遣唐使となつて、渡海するといふことになつたので、朝廷に請うて、入唐を許され、同年五月に京を發し、七月に最澄と共に入唐した。夫れから、秋八月に福州長溪縣赤岸鎮に着し、長安に入り、青龍寺の慧果阿闍梨に就いて眞言宗を學び、翌二十四年(唐德宗の貞元二十一年)六月に胎藏界灌頂を受け、同七月金剛界灌頂を受け、同八月傳法阿闍梨位灌頂を受け、全く密教の大法を受けて、大同元年の八月に歸朝したのである。

第三章 新宗と舊宗

前章に述べたやうに寧樂朝の佛教といふものは、佛力法力に依つて國土安寧天下泰平を致したいといふ希望が原動力となつて興隆せられたのであるから、祈禱に次ぐに祈禱を以てし、轉經に次ぐに轉經を以てし、國分寺の造營も、大佛殿の建立も、百萬塔の建造も、皆此の趣旨から計畫されたのである。併し當時は未だ眞言宗即ち密教といふものが、悉しく傳はつて居なかつたので、其の祈禱の方法も、唯經典を讀誦するとか、懺悔法を修するとかいふことに止まつて、一定の本尊を定め、一定の莊嚴を施し、一定の儀軌に依つて、一定の目的の爲に祈るといふ儀式儀禮の方面は未だ整頓して居なかつた。然るに、最澄も空海も當時支那に盛んに行はれて居た眞言宗即ち密教を傳へて來たのである。此で少しく説明せねば分らぬが、密教といふ宗旨は祕密を主とする宗旨で、大日經等を所依とするが、實は印度教の影響を受けた佛教で、理論のやうなものも空海が十住心論を作るまでは殆んど無かつたといつても差支ない位

て、唯祈禱を専門として居たのである。其の祈禱の種類も澤山あつて、例へば降雨を祈る法とか、病を治す法とか、天下泰平の法とか、五穀成熟の法とか、幸福を増す増益の法、災禍を攘ふ降服の法があつて、其の祈禱の道場を莊嚴にする方法から、印の結び方、呪文の唱へ方、凡て深秘な口傳があつて、中々勿體らしく行ふ宗旨である。斯様な宗旨が此の時入つて來たのであるから、朝廷の方の歓迎は勿論、南京の六宗の人達も其の精巧な祈禱法、其の莊嚴な設壇法には、舌を捲いて驚き、我れ等の及ぶところにあらずとして仰ぎ見たことであらうと思はるゝ。加之、最澄が傳へて來た天台の法門にしても、是れまであつた南都の六宗の教義よりも、非常に優れた教理であるので、之れに對しても、反對するどころではなく、渴仰隨喜の眼を以て迎へたであらうと思はるゝのである。

最澄は延暦二十四年の九月即ち歸朝の年に、宮中に於いて毘盧遮那法を修し、同月高雄山寺に灌頂會を修したが、此の時は勅命に依つて、南都の大徳たる道澄、修圓、勤操、正能、正秀、應圓等といふ人達が最澄に就いて灌頂を受けた。以て、最澄の聲望を思ふべく、南都の意向を知るべしである。夫れから、最澄は大

同元年の十一月に比叡山に於いて、大乘戒の受戒會を行つたが、弘仁元年の正月には、天台宗に年分度者八人を賜はり、同四年の正月には、天皇の護持僧に任ぜられた。夫れから、翌年の正月には、諸宗の大徳と宮中に對論したが、併し南都の方では、最澄に向つて、反對した形跡が見えぬのは、翌六年の三月に、勅命に依つて、最澄の齋した天台の經文を寫させて、七大寺に置かれたのを見ても分る。然るに同年の八月に、最澄が大安寺の塔中院に天台を講じてから、最澄と南都の六宗との間には、間隙が出來て來たのである。

最澄と南都との爭論の主題となつたものは、權教實教の争ひ、換言すれば天台宗は實教で、釋迦經説の至極究竟のものであるが、六宗の教義は釋迦が一時の方便として説かれた權りの教へに過ぎぬといふ最澄の主張に對する南都の反駁である。第二は、大乘戒の争ひで、天台宗の僧は菩薩僧であるから、南都のやうな小乘律を持つべきではない。宜しく叡山に大乘戒壇を建て、別に大乘戒を授けねばならぬといふ最澄の主張に對する南都の反駁である。此の二種の争ひが激しくなつたので、叡山と南都とは全く犬猿も管ならぬ間柄

となつた。筑波山に居つた徳一(又徳澄)といふ法相宗で、修圓の弟子であつた人が「中邊義三卷」を作つて最澄に迫り、最澄は「守護國界章三卷」を作つて、弘仁九年(徳一)を罵るに鹿食者の汚名を以てし、一撃の下に粉碎せんと試みた。夫れから大乘戒の争ひは、弘仁十年の三月十五日に最澄が大乘戒壇を叡山に建てんことを朝廷に請うたので、朝廷では南都の六宗に可否を諮詢あらせられた。そこで南都の方では、同じき五月の十九日附を以て、不可なる旨を護命以下七人の宿老が連署して奏上したのである。次いで東大寺の景深は「迷方示正論」を著して、最澄の二十八失を數へて攻撃したので、翌年最澄は「顯戒論三卷」を製し、二月二十九日闕下に捧げて南都に答へ、同二月「顯戒論緣起」を著して景深に答へた。斯様に相争うて居たが、同十三年の六月の四日に最澄は其の結末を見ずに他界の人と爲つたのである。

さて、最澄が斯様に南都の宿老と争うて居る間に、空海は如何なることを爲して居たのであらうか。否、空海對南都六宗の關係は如何であつたかといふことを願みるのは甚だ興味あることである。空海は其の性質が溫和な君子

人であつただけ、其の事業も、最澄のやうに花々しいところが少ない。大同元年の八月に歸朝してから、一步一步と其の地位を固めて居た。即ち弘仁元年には國家の爲に修法せんことを請ひ、同三年十一月には高雄山寺に、金剛界灌頂を修し、同十二月には胎藏界灌頂を修し、威望隆々として、朝野に重きを爲し、弘仁七年六月には、高野山を賜はらんことを請ひ、翌月聽許せられ、翌年の四月には、高野山金堂の造營を始め、同十年五月には右の金堂成り、同十三年の二月には、平城上皇に三昧耶戒を授け奉り、同十四年の正月には、東寺を賜はり、十一月には、東寺を密教の道場と定められて、五十僧を置かるゝこととなり、是に於いて、一方では高野の靈峰を占め、他方には京師樞要の大寺を得て、眞言一宗の教權は此に確立したのである。抑、東寺は平安遷都の翌々年(延暦十)新京の鎮護として西寺と共に朝廷から建てられた寺院であるので、夫れを空海に賜はつたのは、非常な光榮といはねばならぬ。従つて、朝廷の空海に待ち給ふことが如何に厚かつたかといふことが自ら分るのである。それか、あらぬか、此の年天皇に灌頂を授け奉るといふことになり、翌天長元年には、宮中神泉苑に雨

を祈つて成功し、六月少僧都に任じ、次いで、高雄山寺を附せられ、二年の閏七月には、東宮講師に任ぜられ、四年五月には、大僧都に進み、眞に旭日曠々の勢ひである。殊に弘仁十三年の六月に最澄が寂してからは、其の勢ひが益々廣まり、承和元年十二月には後七日法を修し、恒例となさんことを請うて聽され、翌二年の正月八日から一七日宮中に修法を爲し、永世の恒例と爲つたのである。實に最澄滅後十四年目に當り、空海六十二歳の時である。夫れから同年正月眞言宗に年分度者三人を賜ひ、二月には金剛峰寺は定額寺となり、越えて三月の二十一日、高野の山深きところ、三寶鳥の聲澄み渡る曉に、彼れは大往生を遂げたのである。かくて、眞言宗の教權は全く確立し、東寺と金剛峰寺との二大寺は永く佛教史上の重鎮として、朝廷權門の歸仰を集め、以て今日に至つた。

右に述べたのは空海が主として朝廷に對して行つたところであるが、空海は實に滴水の紙を濕ほすやうに、一步一步急がずあせらず、其の地歩を占むる方針に出たのである。従つて、南都に對する方針も亦之れと等しく包容主義であつた。最澄が刃を揮つて南都に殺到せんとする勢ひを示したに拘はら

ず、空海は常に南都と往來し、親んでをつた。のみならず、南都と甚だ親密なる關係にあつたことは、弘仁元年に東大寺別當に補せられ、同五年の閏七月に元興寺の僧中環が事を以て罰せられんとした時に、上書して救解したことに依つても分るし、其の後、十一年の十月には、華嚴會を修し、十三年の二月には、東大寺に眞言院を建て、我が宗の道場とし、天長六年の十一月には、大安寺別當に任ぜられるといふやうなことが起つてをる。之れを見ても、空海對南都六宗の間柄の親密であつたことが分るのである。又空海は前にも述べたやうに、比叡山に對しても、甚だ親密であつた。嘗に最澄と親密であつたばかりでなく、其の遺弟に對しても親密であつたであらうと思はれるのは、最澄滅後、天長八年九月に比叡山の圓澄等十人が、空海に灌頂を受けたいと請うたことがあつたに徴しても分るではないか。空海は實に此の方針を以て成功したのである。

最澄と空海とのやり方は、頼朝と北條氏のやり方とに比較することが出来る。頼朝が將軍の名稱と實權と共に收めんと企てた如く、最澄も名實共に

南都六宗の上に立たんと企て、其の成功を見ずして終つた。之れに反して北條氏が極めて名稱を避けて實權を握るに是れ力めた如く、空海は名稱の如何に關はることをしないで、實權を收攬せんと企てた。故に彼れは東大寺別當にもなつたし、大安寺別當にもなつた。是れは表面上彼れが南都六宗に向つて敢て異を立てなかつた證據である。故に後世に至るまで、東大寺は東寺を以て、其の末寺であると主張し、屢、紛紜を重ねたことがあつた。要するに、彼れは名を捨て、實を取つた人である。従つて南都との間も極めて圓滿であつた。

第四章 最澄の劃策

最澄が右のやうに、南都六宗を敵として、戰つたのは何の爲であるか。當時の佛教は平安朝に移つてからも、依然政教一致の佛教であつたので、僧侶になるには、戒牒を受け、戒壇に登つて具足戒を受け、度牒を受けて、官僧にならなければ、佛門に入つたことを承認されぬのであつた。従つて、當時は戒壇といふ

ものが、中央は南都の東大寺に設けられてをり、東は下野の薬師寺に、西は筑紫の觀世音寺に設けられてをつたのである。故に僧侶になるには、此れ等の三つの戒壇の一について、戒を受けねばならなかつた。而して、此れ等の三つの戒壇は皆悉く南都六宗の權内にあるものである。故に最澄が比叡山に一乘止觀院(後ち延曆寺と改む)を建て、空海が高野山に金剛峰寺を建て、又は東寺を其の掌裏に收めたとしても、延曆寺乃至東寺、金剛峰寺に寓する僧侶が其の資格を得る爲には、必ずや右の三戒壇の一つに就いて戒を受けねばならぬ。従つて、南都六宗の配下を脱する譯には行かぬ。

是に於いて、最澄は考へた。我が天台宗を興隆し、延曆寺を盛んにするには如何しても南都六宗の配下を脱して、其の圏外に立たねばならぬ。換言すれば、宗教行政上南都僧綱の管轄を離れて、自由の行動を取らねばならぬ。而して之れを爲すには、僧綱の所管に係る三戒壇の外に立たねばならぬ。三戒壇の外に立つには、別に戒壇を設けねばならぬ。即ち戒壇を比叡山に設けて、延曆寺乃至は天台宗に屬する僧侶が資格を得る爲には、比叡山の戒壇に於いて

受戒すれば夫れて濟むやうにせねばならぬ。彼れは此の必要から、大乘戒、小乘戒の争論を惹起して、南都の戒壇に授くる戒は小乘戒である。然るに天台宗に傳ふる所の戒は大乘戒である。従つて、南都六宗の僧は皆小乘律を持つ比丘であるが、天台宗は大乘戒を持つ菩薩僧である。此の故に天台宗の僧とならんとする者は、南都の戒壇に受戒する譯に行かぬ。即ち大乘戒を授くる戒壇を新設せねばならぬ。而して此の戒壇は當然我が延暦寺に建てらるべきであるといふのが最澄の主張である。

最澄は斯くの如く、戒律の争ひの上から從來の宗教行政以外に獨立せんと企てたばかりでなく、天下に法華一乘の法を宣布して、天下を精神的に統一せんとする計畫を立てたのである。即ち彼れは延暦寺を建て、桓武天皇の勅願所と爲し、天子本命の道場と爲すと共に、天下に法華經を頒ちて此の計畫を實行せんとした。即ち弘仁八年、法華經六千部を天下に頒たんとし、同九年の四月には、天下の六處に法華經を收めた寶塔を建立せんとしたのである。六處寶塔とは、

- 一 近江國
- 二 山城國
- 三 上野國
- 四 下野國
- 五 豊前國
- 六 筑前國

の六箇處に各一臺の多寶塔を建て、夫れ夫れ一千部の法華經を收め、天台宗の宣布を計畫したのである。而して、傳説に依れば、上野、下野二國の多寶塔は、弘仁六年に最澄自ら往いて、建造を終つたといふことであるが、如何であらう。近江の國の寶塔と、山城の國の寶塔とは比叡山の上に建てたので、東塔院が前者に當り、西塔院が後者に當るので、前者は一に近江寶塔院とも稱せられ、弘仁十二年七月十七日に成り、後者は一に山城寶塔院と稱せられ、承和元年三月三十日に落慶供養を行つたのである。而して、豊前及び筑前の二寶塔は、建立の運びに至つたのであるか、どうであるか、其の邊は確には分らぬのであるが、恐

らくは、計畫ばかりで、建てられずに終つたかも知れぬ。
 最澄の此の計畫は余の見るところに依れば、延暦寺を以て根本となし、六處
 寶塔を以て、聖武天皇御建立の國分寺に比し、總國分寺たる東大寺に擬するに
 延暦寺を以てし、南都六宗に代ふるに天台宗を以てせんとする計畫であるの
 である。夫れは、護國緣起(天台霞標)に出づるところの六處寶塔願文を讀んで
 見れば、思ひ半ばに過ぐるであらう。謂はゆる六處寶塔願文とは左の如きも
 のである。

六所造寶塔願文

- 安東 上野寶塔院 在綠野郡
- 安南 豐前寶塔院 在宇佐郡
- 安西 筑前寶塔院
- 安北 下野寶塔院 在都賀郡
- 安中 山城寶塔院 在比叡山西塔院
- 安總 近江寶塔院 在比叡山東塔院

- 住持佛法 鎮護國家 仰願十方 一切諸佛
- 般若菩薩 金剛天等 八部護法 善神夜叉
- 大小比叡 王子眷屬 天神地祇 八大名神
- 七千夜叉 同心覆護 大日本國 陰陽應節
- 風雨順次 五穀成熟 萬姓安樂 紹隆佛法
- 利益有情 盡未來際 恆作佛事

弘仁九年四月二十一日

一乘澄記

右の願文にあるやうに、佛法を住持し、國家を鎮護すといふ二句は、確に聖武天
 皇が國毎に、金光明四天王護國之寺を置かれたと同じ趣意に出づることは明
 かではあるまいか。又國分寺に於いては、金光明經や最勝王經を讀誦させて
 國家泰平、四民安穩を祈らせ給うたのであるが、右の願文の中に、同心に大日本
 國を覆護し、陰陽節に應じ、風雨順次、五穀成熟、萬姓安樂とあるは、之れと同じ趣
 意の語句ではあるまいか。斯様に考へ來る時は、最澄が延暦寺を建て、天下の
 諸國に六處寶塔を建立する計畫を致したのは、確に延暦寺を以て東大寺に代

へ寶塔を以て國分寺に擬する爲であると言つても敢て謬りてはあるまいと思ふのである。

此のことを確むるに有力な證據は延曆寺の設計の雄大なることが其の一つである。最澄が如何程まで延曆寺を經營したかといふことは、今日から、詳にし難い疑問である。勿論延曆寺といふ名も其の實後に朝廷から賜はつた名であつて、其の存命中には未だ此の寺號を賜はるの恩命に接しなかつたのである。而して、後に延曆寺と爲るべき寺觀の構造規模もどれ程位が彼れの手に依つて完成されたかといふことも大に研究を要することであるが、要するに、後世の謂はゆる三塔十六谷に十六の寺院を建立しようとする一大計畫は最澄の胸中から出たのであらうと想像されるのである。而して、三塔十六谷といふは即ち左の通りである。

東塔

南谷

東谷

北谷

西谷

無動寺谷

西塔

北谷

東谷

南谷

北尾谷

南尾谷

横川

兜率谷

樺芳谷

般若谷

戒心谷

解脱谷
飯室谷

而して、最澄計畫の十六院といふのは次の通りである。

- 一 乗止觀院
- 法華三昧院
- 一行三昧院
- 般舟三昧院
- 覺意三昧院
- 東塔院
- 西塔院
- 寶幢院
- 菩薩戒壇院
- 護國院
- 總持院

根本法華院

淨土院

禪林院

脫俗院

白真院

以て、其の結構の雄大なるを知るべきではあるまいか。而して、延暦寺の境界のことをいへば、弘仁九年三月十八日の官符に載せてあるやうに、東は江の際に至り、南は宜谷（いよ）に限り、西は下の水飲（みづのみ）に限り、北は横川谷に至る。斯様な廣大な地域を占有してをるのである。而して、最澄は之れに六種の結界を定めた。六種の結界とは次の通りである。

- 一 凡聖同居結界 又は 理即結界
- 二 邪正一如結界 又は 名字即結界
- 三 冥薰密益結界 又は 觀行即結界
- 四 好世淨土結界 又は 相似即結界

五 開方便門結界 又は 分真即結界
六 示眞實相結界 又は 究竟即結界

之れを六即結界と稱するのであるが、前の官符の境界を官有符結界といつて之れに加へて、七重結界といひ、更に後世、良源が座主であつた時に、籠山結界といふを置いたので、八重結界が出来たのである。

斯くの如き雄大な計畫も前に述べたやうに、最澄の生存中には、其の完成を見る事が出来ずに、其の成功は後の弟子達に待たねばならなかつたのである。而して、最澄が畢生の心血を注いで争うた大乘戒の争ひも、其の功果を收むることが出来ずに、これも後人を待たなければならなかつた。最澄は斯様に其の生存中には、花々しい結果を見ることが出来なかつたが、而も地上に下された一粒の種子は、早晩其の芽を發し、其の幹を抽んで、其の葉を着け、其の花を飾らずに止むものではなかつた。即ち弘仁十三年の六月四日、彼れが五十六年の光榮ある生涯を終つてから、一七日即ち同月の十一日に官符を以て、朝廷には、比叡山に大乘戒を行ふことを聽許せられ、越えて十四年の二月二十六

日には、比叡山寺に延暦寺の勅額を賜はつたのである。是に於いて、天台宗は全く南都六宗の外に獨立を得ることゝ爲り、最澄の素志は貫かれ、日本の佛教は宗教行政上に七宗と爲り、實際は眞言宗を加へて八宗と爲つた。斯くて延暦寺は平安朝佛教史上の大立物と爲ることが出来たのである。

第五章 僧風の變遷

上篇各章に述べたやうに、寧樂朝以前及び寧樂朝の文化は佛教に負ふところが甚だ多かつた。否殆んど、佛教の爲に、其の根幹を培養されたのであつた。従つて僧侶にして社會事業の爲に働くものが多かつた。然るに平安朝の中葉以後、此の風が漸く衰へて、僧侶は全く世外の一階級となり、紫衣を纏ひ、金襴の袈裟に憧れて、謂はゆる僧院生活なるものが、活世界から隔離された桃源の閑境となつたのである。今此にいふ僧風の一變といふものは、此の意味である。故に詳には僧侶と社會との關係の變化とでもいふべきである。

平安朝以前の時代に於いては、僧侶は如何なる態度を以て、社會に臨んだの

てあらうか。彼れ等は行政的方面に於いて、轉經祈禱に依つて、四民泰平、國土安穩の計を爲したばかりでなく、民間を誘化して、衆生濟度の道を講じたものも決して少なくはなかつた。行基のやうな人は其の例として最も有名なものである。而して彼れ等が諸方を誘化する間に、民利を興し、實益を増進する方面に働く機會も甚だ多かつたのである。

彼れ等の從事した社會事業は如何やうなものであつたであらうか。夫れは自然の成行から、宗教宣布に關して直接の關係ある方面から、間接的方面に向つて進んだのである。即ち布教の道場たる寺院の築造、佛像の彫刻、乃至は繪畫の製作といふ方面に向つて、先づ手を下したのである。併し是れは宗教上のこととて、敢て社會事業と稱するには足らぬことであるが、彼れ等の熱心なる、自ら設計し、自ら計畫し、自ら經營することも多かつたので、其の結果として、當時の美術、工藝の發達を促したことが甚だ多かつたのである。此の方面を詳しく述ぶるのは美術史、工藝史の取扱ふところであるが、其の二三を擧ぐれば、推古天皇の十八年に來た高麗の僧曇徴は五經を知り、彩色や紙墨の製法を

知つて居たといふことである。又推古天皇の六年には、僧觀成が始めて鉛粉を製したので褒賞に與つてゐることがある。夫れから、當時瓦葺は寺院に限られてゐるのであつたが、齊明天皇の岡本宮には始めて瓦葺を採用された。是れは寺院建築の式を宮殿建築に採用された一例である。天平時代に道慈は入唐して寺院建築法をも學んで來たので、大安寺は唐の西明寺に倣ひ、彼れの設計に依つて出來たのである。唐招提寺造營の時には、如實(唐僧)が大殿を建て、義靜(唐僧)が經藏を建てたので、唐招提寺は今日に至るまで、有數な建築として遺つてゐるのである。夫れから延暦十二年には、僧賢璟が藤原小黒等と平安城の地を相する爲に遺はされたことがある。

佛畫、佛像に關して、繪畫、彫刻の發達したことはいふまでもないが、此れ等の工藝、美術の發達に従ひて、採鑛事業、冶金事業の發達したことは注意せねばならぬ。即ち文武天皇の朝には、近江の國から白鑿金、青を、伊勢の國から白鑿を、安藝及び長門の兩國からは綠青を、伊勢及び常陸の兩國から朱砂、雄黃を、對馬の國から黃金を、紀伊の國からは銀を、因幡及び周防の國から銅を、丹波の國か

らは錫を出し、寧樂朝に入つてからは武藏の國から銅を、陸奥の國からは黄金を出してをる。東大寺大佛の造營の時には夥しく熟銅、白銀、鍊金、水銀、白銀等を使用してをる。是れ等は直接に僧侶が鑛山發掘の設計をし、又は指導をしたといふのではあるまいと思はるゝが、併し左様な事に通じた僧侶があつて、直接に間接に便宜を與へたことはあつたであらうと思はるゝのである。而して、元明の朝、和銅開珍を鑄、其の後、開基勝寶(金貨)、大平元寶(銀貨)、萬年通寶(銅貨)あり、稱徳の朝に、新銅神功開寶、桓武の朝に、隆平通寶(銅貨)、仁明の朝に、饒益神寶あり。續いて、貞觀永寶、寬平大寶、延喜通寶等の泉貨が鑄造せらるゝに至つたのも、亦其の結果であらう。

次に僧侶の關係した社會事業は、山野の開拓、橋梁の設計、架設、池沼の開鑿及び治水等の土木に關したことである。特に僧侶は深山幽谷を拓いて寺院を建立したのが多かつたので、此の方面で非常に活動したのである。殊に行基は其の方面に關係の厚い人で、行基年譜や、行基菩薩傳に依れば、

池 十五所

溝	七	所
堀河	四	所
樋	四	所
直道	一	所 <small>(高瀬より生駒山に至る)</small>
橋	六	所
布施屋	九	所
船	二	所

是れだけの事業を爲し、別に四十九寺内、寺三十四、尼寺十五を建てたといふことである。(播磨攝生より韓泊魚住を経て大輪河尻に至る道も、其の設計に係るといふ)其の他大和の益田の池は弘仁の頃、繩主末等律師眞圓と共に鑿つたところで、(性靈集)益田池碑銘讀岐の國、萬農の池は同じく弘仁中空海が別當となつて掘つたのである。其の他道登又は道昭が宇治橋を架けたことは有名な話として、今に傳はつてをる。

空海、眞圓の事は勿論平安朝に入つてからであるが、平安朝も貞觀延喜の頃

まては、僧侶が此の方面に向つて活動してをる形跡が歴々と見ゆる。即ち承和年中には、律師靜安が近江國和邇の船瀬を作つて、船舶碇泊の便を圖り、其の破損したのを元興寺の僧賢和が修繕を施し、(貞觀八年)承和二年六月には、勅に依りて大安寺僧忠が駿河富士郡相摸、鮎河の浮橋、尾張美濃、參河遠江、駿河、下總武藏の渡船十六艘、美濃、尾張の布施屋二處を修造して居る。此れ等は其の著しいものである。

右の外、醫術が未だ開けなかつた時代のことで、醫術のことは多く僧侶がやつて居たので、此の事だけは中世までも續いて居たらしく、平安朝の末、鎌倉時代の頃にも、醫僧などいふ名が諸家の記録に見えてをる。夫れから慈善病院の如き設備は、寧樂朝に於いて、光明皇后に依つて始められたので、皇后は東大寺に施薬院、悲田院を置かれ、病者貧者を救賑し給うたのである。又浴室を建て、廣く溫浴の恵みを施されたことは有名な事である。此れ等は佛教の慈悲仁愛の精神が心のづとあらはれて、慈悲事業と爲つた一例である。

夫れから、寺家に未墾の田地を寄附されるやうなことがあつて、寺家自ら開

墾事業を行うてをることもある。殊に東大寺が奥州の山野を開拓したことは少なからぬことであるといふ。その他、多くの口碑は僧侶が諸國の温泉を發見したことを示してをる。又最澄が入唐して、歸りに茶樹の種子を齎したことも有名な話である。

以上は其の大略であるが、最澄、空海の二大師は、殊に殖産、興業といふことに注意を怠らなかつた人である。即ち最澄は弘仁九年五月に上奏して定めたる六條式の中に、國師の行ふべきことを規定して、

將用國裏修池、修溝、耕荒、理崩、造橋、造船、殖樹、殖葑、蒔麻、蒔草、穿井、引水利、國利人、講經、修心、不用農商、然則道心之人、天下相續、君子之道、永代不斷。

といつてをるところを見ると、其の志の存するところを知ることが出来る。殊に空海は自ら萬農池の開墾に當つたばかりでなく、天長五年の十二月には、綜藝種智院なる學校を建て、をる。即ち京都左京九條の地に方二町を限り、藤原冬嗣の助力に依つて建設し、佛儒老三教の教旨を授くる目的であつた。其の學則は性靈集の中に載つてをる。當時學校といへば、藤原氏の勸學院、在

原氏の獎學院、橘氏の學館院、和氣氏の弘文院、恒貞王の淳和院等があつて、何れも一族の子弟を教育する目的で建てられてゐたのであるが、空海の種智院は斯る制限もなく、平民的で寛容主義であつたので、僧侶の事業としては、特筆大書すべきである。

然るに平安朝の中頃、即ち謂はゆる藤原時代に入つてから、此の風が漸く變つて來て、後には社會に對する僧侶の事業が殆んど見られぬやうになつた。而して僧侶は唯講經論義、祈禱修法にのみ耽り、僧位僧官にのみ憧るゝに至つた。これは如何いふ譯であるかといへば、勿論一方には朝廷の施政が整頓し、地方の文化が發達して、夫れ等のことに僧侶の手を煩はさぬても濟むやうになつたといふこともあらうが、又他方には僧侶が確に平民的から貴族的に化し、縉紳名門に親むに従つて、活氣を消耗したといふことも拒むべからざる事實であらう。

平安朝に於ける宗教行政は依然治部省の行ふところて、僧綱は實に治部省に屬する宗政官吏である。従つて、平安朝の佛教なるものに對する國家の關

係は全く國教制度といふべきであつて、此の點に於いては寧樂朝と少しも變らぬものである。或る論者は寧樂朝の佛教を以て、佛政一致の國教主義なりとし、平安朝の宗教制度を以て、政權に分離した制度で、國教制度ではなく、公認制度、若くは保護制度、兩語妥當ならざるも暫く之れを用ゆてあるといふ。併し我れ等の見るところを以てすると、寧樂朝の宗教制度と平安朝の宗教制度とは、少しも變らぬのだと思ふのである。度僧制度、受戒制度、僧綱任用例(以上假に此の語を用ゆ)等に於いて、何處に變つたところがあるか。唯平安朝には道鏡のやうな黒衣宰相が居なかつたばかりである。道鏡が直接政務宗教以外のに關與するに至つたのは、偶、時の勢ひに依つて起つたのであつて、國教制度其の物から來る必然の結果ではない。唯此の一點のみを見て、兩時代に於ける宗教制度が全然異つてをるやうに論ずるのは、我れ等の同意しかぬるところである。

夫れは兎に角、此の時代に於ける僧綱の制度は甚だ複雑になつて來たのである。寧樂朝に於いては、前に述べたやうに、僧正、僧都、律師の三階があつて、僧

正に大僧正と僧正とがあり、僧都に大僧都と小僧都とがあり、律師には別に階級がなく、以上合して三階五級に限られて居たのであつた。勿論僧位なるものが此の外にあつて、

傳燈大法師位

傳燈法師位

傳燈滿位

の三階があり、其の他に十三階の僧位があつたのであるが、併し未だ未だ簡單であつた。而して、夫れ等の僧官及び僧位に補任せらるゝものも甚だ稀れてあつた。然るに平安朝に至ると、其の制度も複雑に爲ると共に、叙任の例も頻繁に爲つたのである。即ち僧正に於いて、權官を置き、僧都には二種の權官を置き、律師にも權官を置くに至つたので、從來三階五級の僧官は位階九級と爲り、其の複雑の度を増したのである。而して僧位の方でも、從來の傳燈大法師位の上に、法印大和尚位、法眼和尚位、法橋上人位の三位を置き、傳燈滿位の下に、傳燈住位、傳燈入位の二級を置くこととし、法師、法眼、法橋の三位を僧綱に與ふ

ることとした。今其の配合表を出せば左の通りである。

(僧位)

(僧官)

法印大和尚位……僧正

大僧正
權僧正

法眼和尚位……僧都

大僧都
權大僧都
少僧都
權少僧都

法橋上人位……律師

律師
權律師

傳燈大法師位

傳燈法師位

傳燈滿位

傳燈住位

傳燈入位

其の他種々の僧職があるが、一々擧ぐることは省略する。斯様に複雑の僧位僧官が出来たので、此の時代に於ける僧侶の唯一の希望は僧位僧官に登ることであつた。而して、其の任用法は眞言宗と其の他の宗旨に依つて異なるのであるが、眞言宗の方では、灌頂を受けてから傳燈法師位、傳燈大法師位を経て、加持祈禱の功に依りて、僧官に進叙せらるゝのであるが、其の他の宗旨に屬する者は三會(後に説く)の講師を経て、僧官に進叙せらるゝこととなつて居たのである。

平安朝に於いて、天台眞言の二宗が興るに従つて、從來の六宗の時からあつた法會と共に盛んに法會が行はるゝやうになつたのである。而して、此れ等の法會の多くは勅會若くは勅會に準ぜられたものである。其の中で、有名なものに三會といふものがある。而して、此の三會なるものには、二種の區別があるので、南京の三會、北京の三會と呼はるゝのである。南京の三會といふの

は、

宮中御齋會

興福寺維摩會

藥師寺最勝會

の三大法會で、北京の三大會といふのは、

圓宗寺法華會

法勝寺大乘會

圓宗寺最勝會

の三大法會である。此れ等の外に、宮中眞言院に正月に修せらるゝ後七日御修法(眞言)十二月の佛名會、其の他灌佛會、季ノ御讀經等の如き恆例の佛事法會も少なからずあるのである。其の他、臨時の修法祈禱の如きは、月としてあらざるなく、年として修せざるはなしといふ有様であつた。又叡山には六月會しゅいつくわい十一月會の兩會、東寺にも法會があつて、勅會に準ぜられて居たのである。斯様に法會が多かつたので、當時の僧侶は此れ等の法會を晴れの場と考ふるに

至り、論議に出る爲に學を練り、僧官僧位に進む爲に奮發したのである。而して、僧位僧官の定員の如きも、順次増加せられ、其の任用法の如きも、臨機の處分多く、後には師の賞を弟子に譲りて、僧位僧官に叙せらるゝあり、佛師の僧位僧官に上るありといふ有様で、此れ等の外にも、或は牛車を聽され、轡車を聽さるるなど、いふ臨時の恩典が多かつたので、當時の僧侶は全く一種の官吏と爲り、貴族と爲つたのである。是に於いてか、社會事業等の物質的事業を顧みるものがないやうに爲り、僧風全く一變したのである。

第六章 神佛合一の思潮

神佛調和の思想は何時頃から起つたのであらうか。之れを正確に論ずるには、十分の研究を要することである。近時學者の中で、幾分研究した人もあるが、未だ根本的に明かになつたとはいへない。我れ等は此に最近の研究を參酌して、極めて大畧を敘述するつもりである。

從來一般に信ぜられてをた説に依ると、神佛調和思想の完成した形であ

るところの本地垂迹説は、東大寺大佛鑄造の時に、聖武天皇の勅を奉じて、行基が伊勢太神宮に參籠した時に太神宮の託宣があつて、自分は日の神で、其の本地は毘盧遮那佛である。従つて、毘盧遮那佛の像を造ることは大いなる善根であるといふので、其の時から、天照太御神は大日如來即ち毘盧遮那佛が此の土の衆生を救はんが爲に、現に姿を現はされたのであるといふ信仰が起つたのである。換言すれば、本地垂迹の説が成り立つたのであるといふことであるが、此れは確かな記録に見えぬことで、餘り信用することが出来ぬのである。而して本地垂迹説といふことが、既に神佛の合一の出来上つた形式であつてみれば、此の完全なる形式が出来上るまでには、少なくとも數多の年月を經過せねばならぬことは明かである。詳しくいへば、神佛の思想が起つてから、夫れが一定の形式を取つて、完全な形に出来上るまでには、大分の年數を経ねばならぬことであらうと思はるゝのである。従つて、本地垂迹の説が行基に至つて、突然史上にあらはれたといふのは、常識で考へて見ても、随分不思議なことである。従つて無論信用することは出来ぬのである。

或る學者の説に依れば、本地垂迹の説の萌芽は寧樂朝時代に起つたのであるが、併し本地垂迹といふことは、天台の法門が廣まつてから、換言すれば、天台宗が平安朝に興つてから起つて來たのである。其の理由は天台の法門に本門迹門といふことがあつて、本地垂迹のことを説いてあるからであるといふ。併し此の説は佛教の經典を讀まぬ人の説であつて、本地垂迹のことは必ずしも天台の教理を待たぬのである。例へば天台宗で非常に尊ぶ法華經等は、たとひ謂はゆる天台の教理に依らないで、文字の通りに讀んでも、壽量品には久遠の佛陀を明かし、本地普門品には、觀世音菩薩が三十三身を現じて、化身即ち垂迹衆生濟度をするを説いてあるではないか。加之、此の法華經は聖武天皇に依つて、國分尼寺なる法華滅罪之寺が諸國に建てられたのを見ても、其の寧樂朝に於いて、如何に尊信せられ、流行したかといふことが分るではないか。左様なことは殆んど論ずるに足らぬのである。

史乘に見えてをるものゝ中で、古くて且つ神佛の關係をよくあらはしてゐるのは、東大寺大佛建立の時に、豊前の宇佐八幡が託宣して、東大寺の大佛を拜

する爲に、平城に行かれたことである。是れは正史に見えてをることであつて、即ち十二月に入京して大佛を拜せられたことは、續日本紀(卷十七)に見えてをる。此の事に依つて見れば、神は佛法に歸依し、大佛建立に隨喜されたのである。是れが神佛合一思潮の第一歩であると思はるゝのである。夫れから、神佛は漸々接近して、神は佛教に隨喜すると共に、其の供養を受くることを喜び希ふといふ思想が起り、諸處の神社に神宮寺なる附屬寺院が出来るやうになり、此の寺に神の爲に僧を置き、經を讀ませて、神に法樂を捧ぐるといふ習慣が起つたのである。例へば、伊勢太神宮の神宮寺は天平神護元年に出來、神護景雲元年には、宇佐八幡毘咩宮寺が出來、其の前に、八幡太神宮寺が出來たといふことと、天平勝寶元年の六月には、八幡太神宮寺に三口の度者(僧)を上られたことがある。又天平勝寶年中には、鹿島神宮寺が出來(三代格卷三)天平寶字の七年十二月には、伊勢桑名の多度神宮寺が出来るやうになつた。(同寺資財帳)而して、此の二個の神宮寺は、滿願なる僧に依つて建てられたといふことである。夫れから、延暦三年には、勝道に依つて、二荒山神宮寺(今の日光山)が建

てられた。

夫れから、平安朝に入つてからは、弘仁以前に熱田の神宮寺が建ち、天長以前に賀茂神宮寺が建つたのである。斯様に神は佛教に隨喜して、法味を希ふといふ思想が起つたので、其の後、神社に經卷若くは佛舍利を奉納し、僧を遣はして神前に讀經させるといふことが一般の風習となつたのである。夫れから、東大寺に宇佐八幡宮を勸請して、鎮守としたのを始めとして、神は佛教擁護の爲、寺院擁護の爲に、寺院の傍に奉祀されるといふ習慣が出来て、後には諸大寺に必ず鎮守を置くやうになつたのである。(後に説く)

斯様に神は佛教に隨喜し、法味に與らんことを希ふといふ思想から、神は佛教を守護するといふ思想が出来、其の結果として神宮寺が出来、鎮守が出来、神は隨分接近して來たのである。併しながら、神は佛の化身である。佛が衆生濟度の爲に姿を現はして神と爲つたのであるといふ思想は、未だ起つてをらぬのである。平安初期に於いては、神は神道といふ迷ひの世界に墮ちてをるものであるから、佛教の功力に依つて、此の苦界を脱れて成佛したい。佛の

やうな無礙自在な神通力を得、樂地に上りたい、妙覺まうかくを開きたいといふ思想が起つてをる。即ち神は我れ等人間と同じく迷界の衆生であるといふ思想である。そこで、神は佛力に依つて、斯る迷ひの世界を脱却したいといふ思想から盛んに法味に與らんことを要求するやうになつたので、神前に讀經するといふこと、神社に僧を置き、經を納むるといふことが一入盛んに行はるゝやうになつたのである。最澄や、空海や、圓仁や、圓珍といふやうな當時の高僧も亦諸處の神社で讀經して神に供養をしてをることが史乘に散見してをる。例へば、空海は諸神の爲に、經典を寫し、佛像を圖し、神宮寺を建てたことが、日光山勝道之碑に見えてをるし、最澄は入唐の途次、宇佐八幡の爲に讀經したところが太神が喜んで、最澄に法衣を授けられたといふことである。又同じく入唐の途に、香春の神宮寺で讀經して、海上安全を祈つたといふことが諸書に見えてをる。斯様に空海も最澄も神の爲に讀經してをるが、未だ神は何佛の垂迹である。否總じて神は佛の權化であり、垂迹であるといふ思想は延暦の比まては起つてをるやうには思へぬのである。後世では最澄が山王一實神道を

起し、空海が兩部習合神道を起したもののやうに思つてをるが、それは確たる證據のないことであつて、空海や最澄の作と傳へられてをる神道に關する書籍は、悉く後世の偽作であつて、史的價値を有つてをるものは一つもないのである。従つて、山王一實神道や、兩部習合神道などいふものは恐らく鎌倉の初葉以後に出來たものであらうと思はるのである。

以上述べたやうに平安初期までは、神は佛の救恤に依つて、其の苦を救はれるといふ思想であつて、決して、神は佛の代理者である。化現である。垂迹である。換言すれば、神佛は同體である。尊卑同等であるといふ思想ではなかつたのである。然るに、漸く思想が移り行くに隨つて、神は佛の化現である。垂迹であるといふ思想と爲り、神は菩薩である。衆生を濟度するものであるといふ思想に變つた。之れは何時頃からであらうか。正確なる史料が乏しいので、判断に苦む次第であるが、扶桑略記に依れば、延暦二年五月四日の宇佐八幡の託宣に、吾无量劫中、化生三界、修善方便、導濟衆生、名曰大自在王菩薩と見えてをるのが古い方で、三代格にも、大同三年七月十六日の官符の中に、延暦十

七年十二月廿一日の官符を引いてある中に、八幡大菩薩といふ言葉があるし、東大寺要録に見えてをる弘仁十二年八月十五日の官符には、宇佐八幡を護國靈驗威力神通大菩薩等というてをるのがあるので、延暦の末、大同、弘仁の頃には斯ういふ思想が起りかけて來たことが察せらるゝ。夫れから、漸く進んで、神に菩薩號を命けるやうになつたのである。此の思想が更に進むと、何神は何佛の垂迹であるといふやうに、一々神の本地といふものを一定するやうになつたので、これは恐らく平安末から鎌倉時代にかけて完成したことであらうと思はるのである。併し此れ等の思想の變遷は、慎重な態度を以て研究せねば誤謬を生ずる恐れがあるので、十分の研究が出来るまでは確たることはいはれぬのである。今本地佛と神の配合を示す爲に、左に一覽表を掲げよう。尤もこれは徳川時代天和中のものであるが、併し幾分の参考になることであらうと思ふ。但し右の表は諸國の有名な神佛を一處宛出したものであつて、必ずしも神ばかりではない。而して、是れは將軍綱吉公の生母の桂昌院が、家綱公薨去の時に嗣子がなかつたので、綱吉公が後を繼がれるやうに日本

國中の大小神祇佛陀に祈請せられ、願望成就の曉に巡拜に代へて二之九に十六體の佛像を造營された時のものである。(考古界「第六編第四號淺草乘十帖に據る」)

- 山城 男山 阿彌陀佛(本地佛)
- 大和 春日 釋迦牟尼佛(本地佛)
- 河内 上太子 觀世音
- 和泉 松尾 如意輪觀世音
- 攝津 天王寺 聖德太子
- 伊賀 赤目瀧 不動明王
- 伊勢 〇〇〇 大日如來(本地佛) (著者云、太神宮なるべし)
- 志摩 國分寺 藥師如來
- 尾張 □□ 藥師如來(本地佛) (著者云、熱田社なるべし)
- 參河 鳳來寺 藥師如來
- 遠江 龍禪寺 千手觀世音

- 駿河 富士淺間 大日如來
- 甲斐 七角山 地藏菩薩
- 伊豆 三島 地藏菩薩(本地佛)
- 相模 鎌倉 阿彌陀佛(本地佛)
- 武藏 淺草寺 觀世音菩薩
- 安房 清澄山 虚空藏菩薩
- 上總 一宮 觀世音菩薩
- 下總 香取 十一面觀音(本地佛)
- 常陸 鹿島 十一面觀音(本地佛)
- 近江 多賀 阿彌陀如來(本地佛)
- 美濃 南宮 釋迦牟尼佛(本地佛)
- 飛驒 千光寺 千手觀世音
- 信濃 諏訪 普賢菩薩(本地佛)
- 上野 一宮 彌勒菩薩(本地佛)

下野	日光	千手觀音(本地佛)
陸奥	鹽釜	彌陀如來(本地佛)
出羽	羽黑	大日如來(本地佛)
若狹	神宮寺	藥師如來
越前	水落明神	十一面觀音(本地佛)
加賀	白山	十一面觀音(本地佛)
能登	不動山	虛空藏菩薩
越中	立山	阿彌陀如來(本地佛)
越後	國分寺	藥師如來
佐渡	小比叡	聖觀世音
丹波	穴太寺	聖觀世音
丹後	九瀬戸	文殊菩薩
但馬	一宮	十一面觀音(本地佛)
因幡	一宮	藥師如來(本地佛)

伯耆	角盤山	地藏菩薩
出雲	大社	藥師如來(本地佛)
石見	太田八幡	彌陀如來(本地佛)
隱岐	燒火權現	地藏菩薩(本地佛)
播磨	書寫山	如意輪觀音
美作	誕生寺	大勢至菩薩
備前	吉備津	十一面觀音(本地佛)
備中	吉備津	十一面觀音(本地佛)
備後	尾道	十一面觀音
安藝	嚴島	辨財天女
周防	國分寺	藥師如來
長門	豐浦忌宮	愛染明王(本地佛)
紀伊	那智山	如意輪觀音
淡路	千光寺	千手觀世音

阿波	大龍寺	虚空藏菩薩
讃岐	善光寺	大日如來
伊豫	菅生山	十一面觀音
土佐	五臺山	文珠菩薩
筑前	太宰府	十一面觀音
筑後	高良山	釋迦如來(本地佛)
豊前	宇佐	阿彌陀如來(本地佛)
豊後	田原八幡	阿彌陀如來(本地佛)
肥前	千粟八幡	阿彌陀如來(本地佛)
肥後	阿蘇山	十一面觀音(本地佛)
日向	鶴戸	準提觀世音
大隅	霧島山	馬頭觀世音
薩摩	新田八幡	阿彌陀如來(本地佛)

第七章 諸大寺の鎮守

前章に説いたやうに、神佛合一の思潮が漸く進んで来て、諸大寺に鎮守といふものが出来た。尤も是れは寧樂朝時代に始まつたことであるが、平安朝に入つてから、天台、真言の兩宗が出来、比叡山や、東寺や、高野山が開けるといふことになつて、此れ等の諸大寺にも鎮守が出来たのである。而して、此れ等の鎮守といふものは或は一寺に一社或は二社三社、多きは二十一社に及ぶのであるが、是れも、一時に出来たものではなくて、久しい年代を経て出来たのである。今は詳に説明してをる餘地がないから、諸大寺鎮守の一覽表を掲げて置かう。

諸大寺鎮守略表

東大寺	八幡宮 <small>(宇佐より勤王、今の縣社手向山神社)</small>
興福寺	春日神社 <small>(本宮に四神、外に若宮ありて五神を祀る)</small>
元興寺	………(?)
西大寺	八幡宮

- 藥師寺 八幡宮
 - 大安寺 八幡宮(男山勤明)
 - 法隆寺 龍田明神
 - 唐招提寺 春日明神
 - 東寺 八幡宮(外に稻荷神社)
 - 園城寺 新羅明神(外に八幡宮)
 - 金剛峰寺 丹生明神
 - 延暦寺 日吉神社
- 〔以上南都の七大寺〕

略、右の通りであるが、さて延暦寺の鎮守日吉神社は平安朝佛教史には重大な関係があるから、今少しく詳に説く必要があるが、今は餘白がないから、表だけにして置かう。即ち日吉神社は山王權現で、一ノ宮は本地釋迦で、垂迹は三輪明神、即ち大己貴命、二ノ宮は地主で大山咋命、本地は藥師如來である。尤も山王二十一社の祭神については、諸書に異説があつて、輕々しく斷言は出來ぬ。今日吉社家の記に依れば、二十一社は上ノ七社、中ノ七社、下ノ七社の二十一社

て、其の社名は次の通りである。

山王二十一社

- 上ノ七社
 - 大宮(一ノ宮) 二ノ宮 聖眞子
 - 八王子 客人 十禪師
 - 三ノ宮
- 中ノ七社
 - 大行事 牛ノ御子 新行事
 - 下ノ八王子 早尾 王子ノ宮
 - 聖女
- 下ノ七社
 - 小禪子 大宮ノ竈殿 二ノ宮竈殿
 - 山末 琴御館社 巖瀧
 - 氣比

事ある毎には、此れ等諸宮の神靈を山上に振り上げ、或は引き昇いて、三千の山法師が華洛に向つて殺到した光景は、平安朝の中葉以後、殊に院政時代の一大失政の縮圖たると共に、又一大偉觀であつた。我れ等は此れ等の事跡を回想して、祇園執行日記の第一頁を聯想せざるを得ぬのである。

第八章 密教の興隆及び其の分派

寧樂朝に、俱舍、成實、三論、法相、華嚴、律の六宗あり、平安朝に入りて、天台、真言の兩宗が起つたことは前に述べた通りであるが、而も天台宗なるものが、純粹の支那天台と異つて、禪、戒、密の三宗を融攝したる天台宗であつた。加之、其の頃、支那の方では密教(真言宗)が最も隆盛を極めた時代であつた。そこで、我が國から彼の地に留學した僧侶は自ら密教を練習することになつたのである。是に於てか、天台も其の實密教に傾き、後には全く密教化したのである。故に叡山の天台のことを台密と呼び、弘法大師一流の真言宗を東密と呼んで、互に區別することゝなつた。是に於いてか、平安朝の佛教は全く密教と化してし

まつたのである。故に平安朝佛教史は密教史であると稱して適當である。

さて台密、東密の二派が如何にして盛んになつたのであるか。此の問題を解決するのは、平安朝佛教史の一半を解釋する所以である。前にも述べたやうに、寧樂朝までの佛教は殆んど全く祈禱佛教であつて、其の目的とするところは、轉經、修法、悔過、造像、寫經等の功德に依つて、小は一身一家の安寧幸福から、大は國家人民の安寧幸福を求むることであつた。然るに、修法といひ、讀經といつても、唯不完全なる儀式に依つて行ふばかりで、整然たる修壇法、懺悔法、祈禱法等があつたのではない。而して平安遷都の後も、修法、轉經、造像、寫經等に依りて、國土人民の安泰を求むるといふ要求は依然として變らなかつたばかりか、反つて増加して來たのである。然るに密教なるものは、祈禱の壇を築く法から、祈禱の方法の詳密なることから、祈禱の種類が整然と分類されて居つて、何の祈禱は何佛を本尊として何法を修すれば宜しいといふことの規定が一種の權威を以て規定されて居る。加之、口には密語(呪文)を稱へ、手には印契を結ぶといふ有様で、祈禱の方法が甚だ神秘的である、莊嚴である。これが當

時の人心の要求を投じたことは、平安朝に於ける密教興隆の一原因をなして居るのである。

次に密教興隆の原因となつたものは、遷都と共に起つた興國の氣象である。凡そ物は新しい程興味を興ふるものである。否、新しいものは一般に人の心を引立たしむる力を持つてをるものである。從來凡そ七十五年間の都であつた平城の地を出て、平安の地に移つたのであるが、地勢の上から言つても、交通の方面から論じて、新京は舊京に比して雄大である。夫れから、今までは天武系の天皇で續いて來たのが、天智系の天皇に復したので、天皇の方にも、天武系の天皇の經營し給うた東大寺、法華寺等の舊都の寺に力を注ぐよりも、新京の寺に力を注がるゝやうになつたのも、人情の自然であらう。其の證據は延暦の初に造東大寺司を廢して、新京の羅生門の東西に二寺を建てられ、又滋賀の梵釋寺の興隆を企てられたことを見ても分るのである。讀者の知らるゝ通り、平忠度が

さいなみや滋賀の都はあれにしを

昔ながらのやまざくらかな

と咏んだ滋賀の都は天智天皇の舊都である。而して梵釋寺は此の舊都の東大寺といふべき位置にある寺院である。そこで天智系復舊の治世に此の寺の興隆を企てられたことも怪むを要せぬことである。斯様に人心の新たなるに従つて湧いた興國の氣象に投じたのが、天台、眞言の二宗、換言すれば台密、東密二流の密教である。朝廷の新たなる宗教策に適應したのが、此の二宗である。何故に興國の氣象に投じたのであるかといへば、密教の修法はいかにも莊嚴で立派である。換言すれば、莊重であつて、王者の氣象を具へてをる。夫れに造形を盛んに使用する。曼荼羅といひ、諸佛、諸尊の形像といひ、其の彩色の絢爛なること、其の造像法の複雑なること、規律あること等が相助けて、密教は藝術の宗教であり、官能を刺戟する宗教である。加之、神祕的宗教である。此れ等の諸件は積極的であるといふところから、當時の興國的精神に最もよく投合したのである。夫れから、朝廷の宗教に對する感情が變りかけて、寧樂の舊宗に對して、何となく嫌焉たるものがあつた時に、最澄、空海の二傑があら

はれて、新宗教を唱へたのであるから、朝廷の方でも此の二宗に傾かるゝのも
 所以ないことではない。殊に當時右の二傑に匹敵する程の傑人が六宗に居
 なかつたのであるから、猶更のことである。

右の三箇條の理由の外に尙三箇條の原因がある。夫れは外でもない。當
 時支那の文明を尊崇した時代にあつて、其の支那には何が盛んであつたかと
 いへば密教である。従つて外國の文化を輸入し模倣しようとして力むる時代で
 あるから、其の尊崇する文化の飾りであり、誇りであるところの密教が輸入さ
 れ、尊崇されるのは怪むに足らぬことである。夫れから、次の原因は此の兩派
 の密教に人材が輩出したことである。即ち開祖たる最澄、空海の二人と、最澄
 の弟子の義真といふやうな人々が第一の先鋒として、入唐留學したばかりで
 なく、右の三人の如きは、我が國史上第一流の人物である。夫れから、台密の方
 では、圓仁慈覺大師、圓珍智證大師の二傑が出て、同じく入唐をなし、歸朝の後に
 は、盛んに密教を唱へた。東密の方では空海の十大弟子と稱せらるゝ英傑が
 一時に輩出して、鼓吹したのであるから、密教の勢ひといふものは草の上を大

嵐が吹き渡るやうなものであつたに相違ない。十大弟子といふのは、眞濟、眞
 雅、實慧、道雄、圓明、眞如、高岳親王、泉隣、秦範、智泉、忠延の十人である。夫れから東
 密の方で入唐したのは常曉、圓行、慧運、宗叡等の人々がある。右の四人に前の
 四人即ち最澄、空海、慈覺、智證の四人を加へて入唐八家と稱するのである。

夫れから入唐はせぬでも、非常な俊傑が兩派に彬々として輩出したのであ
 る。圓仁が叡山の定心院、總持院を興し、文殊樓を起して延暦寺を大成したや
 うに、其の門下には、安慧、第四座主慧亮、慈叡、承雲、性海、南忠、長意、第九座主常濟、元
 譽、遍照、元實、寺開祖、安然、相應、無動、寺開祖等の俊傑輩出し、圓珍は一方園城寺を
 經營すると共に、門下に惟首、猷憲、康濟、增命、良勇、玄鑒、尊意等を出し、皆天台座主
 に任ぜられた程の人傑である。其の後、叡山の中興と稱せらるゝ、慈慧大僧正
 あり。諱は良源、近江の國の人で、一代の人傑であるが、康保三年の叡山大火の
 跡を再興し、同年八月天台座主に任ぜられたが、最澄滅後恰も百四十五年に當
 るのである。夫れから、天祿元年には、叡山の制度を嚴にし、一代の盛運を開い
 たが、其の門下に人物の輩出したことは夥しいので、其の徒三千、達者七十人に

及ぶと稱せられ、就中源信、尋禪右大臣藤原師輔の子覺運、覺超は四傑の名があり、其の他、性空、書寫山増賀、多武峯寛印、安海、明豪、暹賀、覺慶、院源等の英俊があつた。是に於いて、寂山の隆盛は其の極に達し、悲心、源信を祖とす、檀那(覺運を祖とす)の二流を生じ、源信の門下には、元と良源の門下であつた人、覺超、寛印、明豪あり、直門としては、寂心、寂照(入宋)の二人がある。覺運の下からは、遍救(左大臣藤原仲平の子)植舜、長算等が出た。而して、悲心流に(一)慧光房流(祖)澄豪(二)毘沙門堂流(祖)智海(三)安居院流又竹林房流(祖)長耀(四)猪熊流(祖)聖融の四流が出来、檀那流に又(一)椶生流(祖)皇覺(二)行泉房流(祖)靜明(三)土御門流(祖)政海(四)資池坊流(祖)證眞、但悲心流より出づ)を生じた。夫れから、圓珍の園城寺流は、増命、鴻譽、運昭、智圓、千觀、元範と傳へ、元範の下に、澄義、範守の二人あり。澄義に依つて、龍淵房流が起り、範守門下の良明に依つて、智寂房流が起つたので、台密の學派が通計十派になつた譯である。併し、此れは教相(學解)の分派である。此の外に事相儀禮の分派があつて、台密十三流の稱がある。煩はしいから一々列擧することを止む。

更に翻つて、東密の方を考へて見ると、人物の輩出は台密に劣らぬ程である。空海の十大弟子の中でも、實慧、東堂長者、河内檜尾法禪寺祖、道興大師、眞濟(紀僧正)眞雅、聲明に達す、法務、藤原良房と共に、眞觀寺を建つ、最も有名で、眞雅の門下に眞然、源仁、眞如、載實、慧宿等が輩出した。夫れから、空海の弟子の中で、十大弟子の外に、常曉(法珠寺祖)圓行(靈巖寺)が有名であるが、圓行は播磨の大山寺の開祖で、天王寺の別當と爲つた人である。實慧門下では、慧運、安祥寺祖、眞紹、禪林寺祖、顯はれ、眞紹の門からは、宗叡(後入唐僧正)が出て、清和天皇の御歸依を得、圓覺寺を建て給ふ)一代に重用せられ、其の門に峯殿、禪念、會理の諸傑を出した。斯様に、實慧門下が盛んになると共に、眞雅門下も亦人物の輩出之れに劣らぬ程で、其の弟子眞然は、金剛峰寺に據り、門下に、爵長、無空、源仁等を出し、源仁の下に、益信、聖寶の二傑を出すに及んで、東密が一代の盛觀を呈するに至つたのである。益信は、宇多法皇の御歸依を得て、仁和寺の開創と爲り、法皇の門に眞寂(親王)寛空を出し、寛空の門に、寛朝、寛忠、定昭等を出したが、寛朝最も有名である。聖寶は、醍醐寺の開祖で、修驗道此に始まる、東大寺、東南院(三論)を建て、理源大師

と謚せられた人、門下に延徹、東南院二世、觀賢、醍醐寺座主の始、東寺長者にして金剛峰寺座主兼務の始、觀宿等を出した。益信の一流では寛朝、宇多法皇の孫、最も顯はれ、廣澤、遍照寺の開祖と爲り、門下に濟信あり、濟信の門に性信あり、性信の門に寛助出て、寛朝以來世々大僧正に居り、仁和寺は隆盛の極に達したのである。聖寶の一流では、仁海が最も有名で、仁海は觀賢の弟子、淳祐、淳祐の弟子、元杲の門に出てたのであるが、小野の曼茶羅寺に居り、兩僧正の名最も高く、門下に成典、成尊等が出た。成尊は醍醐寺に居つて、其の門流最も盛んである。斯様に益信、聖寶の二流が榮えたが前者は廣澤流といひ、後者を小野流と稱し、東密の二大派を爲したが、廣澤流は寛助の門下に至り分裂して、仁和寺三流、廣澤三流を出し、總稱して、廣澤六流の稱がある。仁和寺の三流は(一)仁和寺御流(祖、覺法)(二)永壽院流(祖、永嚴)(三)西院流(祖、信證)の三流で、廣澤三流とは(一)華嚴院流(祖、聖慧)(二)忍辱山流(祖、寬遍)(三)傳法院流(祖、覺鏝)の三流をいふのである。小野流は成尊門下に範俊、勸修寺、義範、醍醐寺、明算、中院流(祖)の三人があり、範俊の下に巖覺あり、其の下に、小野の三流を出し、義範の下に勝覺があり、其の下に醍

醐の三流を出した。小野の三流とは(一)勸修寺流(祖、寬信)(二)隨心院流(祖、增俊)(三)安祥寺流(祖、宗意)の三流で、醍醐の三流とは(一)三寶院流(祖、定海)(二)理性院流(祖、賢覺)(三)金剛王院流(祖、聖賢)の三流をいふのである。而して、右の六流を總稱して、小野の六流とも稱す。斯様に小野、廣澤の十二流が、分裂に分裂を重ねて、後には、東密三十六流と稱せらるゝやうになつたが、煩はしいから三十六流のことは省略する。

以上は台東西密に於いて、人物輩出の結果、密教が興隆し、従つて分派を生ずるに至つた次第を述べたのであるが、密教興隆の原因として今一つ重要なものがある。夫れは皇室貴顯の歸依の盛んであつたことである。これは貴族の心理的要求に、密教が適合したからである。

凡そ貴族といふものは何時の世いかなる時でも、保守に傾くものである。而して、此の傾向は自己の既得の權利、位置、財産を保持せんとするには、地盤の固くない急進思想に向つては、危険を感ずるから近寄りぬのである。平安朝の密教の場合に於いては、此の定則に背きつゝも亦適合するところがあつた。

背くといふのは何かといへば、密教は少なくとも南都六宗に比して、新思想である。従つて王侯貴族には普通の場合ならば歸依を得ることは難いのである。然るに平安朝の場合には前に述べたやうに、皇室の要求からして新宗教が必要であつたので、密教が此の要求に應じたので、密教が新しい爲に貴族に躊躇さるゝといふ點は此の理由で消滅した。夫れから、密教は祈禱に依つて、消災増益自在といふので、如何なる物質的慾望でも修法祈禱に依つて成就すると信ぜられてゐるので、自己の地位、生命、幸福を永久に續けたいといふ希望に燃えてゐる貴族が之れに向つたのは又當然の理である。延命の祈病氣平癒の祈、任官の祈、平産の祈等が、如何に頻々として行はれてゐるかを見れば思ひ半ばに過ぐるであらう。

皇室の御歸依は宇多法皇に至つて極まり、自ら出家して、修法し給ふに至り歴代の天皇、中宮、親王の剃髮入道は風を爲し、攝關の家にも又此の風を承け皆出家したのである。夫れから、寺を建つことが流行し、此の時代に多くの大寺が出来た。其の主なるものは鞍馬寺、清水寺、神護寺以上桓武天皇の朝大

覺寺、淳和皇后高志内親王建立、安禪寺、仁明皇后順子建立、嘉祥寺、比叡山、定心院、同、持持院以上、仁明天皇の朝、元慶寺、禪林寺、比叡山、文珠樓以上、清和天皇の朝、仁和寺、醍醐寺、勸修寺、醍醐、母后胤子建立、圓満院、村上皇子、悟圓、法親王餘慶門下、興立、圓融寺、圓融天皇建立、法勝寺、尊勝寺、共に白河天皇建立、最勝寺、鳥羽天皇建立、圓勝寺、鳥羽皇后待賢門院璋子建立、成勝寺、崇徳天皇建立、得長壽院、同朝、延勝寺、近衛天皇建立等、概して、公家に關する大寺であるが、此の外、攝家の造營に係るもの、之れに劣らずある。即ち貞觀寺、藤原良房建立、極樂寺、藤原基經建立、圓覺寺(同上)、法性寺、藤原忠平建立、楞嚴院、藤原師輔建立、法住寺、藤原爲光建立、法興寺、藤原兼光建立、法成寺、藤原道長建立、淨妙寺、同上、平等院、藤原頼通建立等は、其の主なるものである。

第九章 諸大寺の跋扈

寧樂朝では、東大、興福、大安、元興、藥師、法隆、西大の七寺を七大寺と呼んで、勢力あるものと爲し居たのであるが、平安朝に入つてから、東寺、金剛峰寺以上、眞言

宗延曆寺、園城寺以上、天台宗の四つの大寺が出来、帝都の移動に依つて、勢力の消長が生じて来たが、平安朝三百九十年を通じて、最も勢力があつたのは、延曆寺と興福寺とで、前者は鎮護國家の道場であるといふ理由で勢力があり、後者は藤原氏の氏寺であるといふので、非常な勢力を有つて居たのである。此の二大寺に亞いて勢力のあつたのは東寺であるが、而も弘法大師空海の態度と同じやうに、名を避け實を取るといふ主義で、表立つたことはしないし、又亂暴もしなかつたから、史上には其の勢力が明に見えてをらぬやうである。夫れから、高野山も勢力があつたが、これも内証は屢あつたが、延曆寺や興福寺に比べると亂暴は甚だ少なかつた。そこで、歴史の表面にあらはれて居る中では、延曆興福の二大寺に亞いては、園城寺と東大寺とである。園城寺は智證大師圓珍一流の根據地で、特に源氏と特別の關係があるので、勢力があつたし、東大寺は聖武天皇の勅願寺で、古い歴史を有つてをるところから、勢力があつた。

さて此れ等の諸寺は何故に勢力を得たのであるか。固より皇室貴族の歸依が厚かつたからであるが、夫れより、經濟的方面に於いて、優勢であつたから

勢力があり跋扈することが出来たのである。經濟的方面とは何であるかといへば、所領即ち寺田、寺領が多くて、生活が樂に出来、剩へ多大の餘裕があつたからである。此れ等の寺田、寺領は朝廷貴族の寄附寄進に依つて増加し、經濟力の膨脹に隨つて、寺家自ら寺領の増加を計り、開墾、賣得、其の他名義上の所有權(謂はゆる領家)を得る等のことが原因と爲つて、益、富有に爲り、其の結果、寺田寺領の防禦の爲に、其の寺領に屬する莊園から壯丁を徵集したこともあるらしく思はるのである。(著者の臆説)斯様な次第で、此れ等の諸寺は一種の豪族として發達したのである。

此れ等の諸大寺は寺院といふよりも寧ろ豪族であるといふが適當で、平安朝に源平兩氏や、奥州の亙理氏、藤原秀衡一家のことがあつたやうに、而して、源氏にも甲斐、近江等の諸源があり、平氏にも伊勢平氏等といふ區分があつたやうに、此れ等の寺院も豪族で、近畿に據つた延曆寺氏や、園城寺氏や、東大寺氏や、興福寺氏やと見るが正當である。其の證據は地方の豪族が土地私有制度の結果として起つてをるやうに、此れ等の諸大寺も土地私有制度の結果として

起つてをるし、地方の豪族の多くは皇室の裔であるやうに(例へば源平兩氏の如き)此れ等の諸大寺も亦、中世以後皇胤華胄を戴いて、門跡、座主、長吏、別當等としてをるのである。血統の關係の連續するのと、せぬのは異つてをるのであるが、一は血統上に續くかはりに、他は一の皇胤華胄の裔に續ぐに、他の皇胤華胄の裔を以てするのであるから、連續といふ點からいへば少しも變らぬので公家攝家乃至人民の之れに對する待遇は反つて、源平諸氏の上にあつたのである。抑、皇子が下つて臣下に列せらるゝといふのは經濟的關係から來て居るので、皇室費は兎に角、皇族費には一定の制限がある。此の制限があるところに無制限に親王が増加し、皇族が増加して來ては、國家經濟の上から餘地がないといふことになるので、已むを得ぬ方法として皇子に姓を賜はつて臣下に列せらるゝやうになつたであらうと思はるゝ。諸大寺の門跡座主といふやうなものも、初めは信仰上の要求に出でゝをるであらうが、後には前と同一の理由に出づることゝなつたので、豪族の起原と、諸門跡の起原は、恐らく同一であらうと思はるゝのである。(以上著者の臆説)斯様な次第であるから、諸豪

族が起ると共に、諸大寺も跋扈してをるのである。即ち諸豪族の跋扈の初めは天慶の將門純友であるが(天慶三年は西曆九四〇)叡山に始めて武器を用ひたといふ傳説のある良源が天台座主に爲つたのは、康保三年八月で、(西曆九六六)天慶三年から二十七年目である。其の八年前の天德三年の三月には、祇園社と清水寺と闘うてをるし、安和元年(西曆九六八)の六月と七月には、東大、興福の二大寺が闘うてをる。而して、其の跋扈が盛んになつたのは、白河天皇の朝から、天皇には有名な三不如意の歎を發し給うたのである。三不如意とは朕が意に任せぬのは、雙六の采と賀茂川の水と山法師であると宣うたのを指すので、山は即ち叡山である。夫れから、堀河、鳥羽、崇徳、近衛、後白河、二條、六條、高倉、安徳(平安朝終る)の十代は、一代は一代毎に跋扈が甚しく、一代に十餘度の大事件が起つてをらぬことは少ない。

此の時代に亂暴したのは、右の東大寺の外に清水寺、興福寺の末寺、祇園社、延曆寺、別院、金峰山、多武峰、延曆寺の末寺、熊野社、白山、加賀、延曆寺の末寺等、高野山では金剛峰寺の大衆と、傳法院の徒と常に争うて居、南都では藥師寺が屢、東

大寺と争うてをる。

併し此の時代に於ける諸寺闘争の最も大なるものは山延曆寺(寺園城寺)二門の軋轢と南都(興福寺)北嶺延曆寺の争ひである。前者は同じ最澄の門下であるが、最澄直門の徒と、最澄の弟子たる義真門下の徒との争ひである。前者は山て後者は寺に根據を具へ、前者は慈覺大師圓仁を主とし、慈惠僧正良源に至つて大に振ひ、遂に義真門下を山から追却してしまつた。後者は智證大師圓珍を主とするもので、其の争ひの原因は感情の衝突であるが、其の主題と爲つたものは(一)天台座主問題(二)園城寺戒壇別立問題の二つで、鎌倉時代に入つてからは天王寺別當問題が又其の好問題と爲つてをる。夫れから南北の争ひは純然たる勢力争ひであるが、山に接近して清水寺が興福寺の末寺であるので、山徒は事ある毎に之れを火き、多武峯が延曆寺の末寺であるので、興福寺はよく之れを火いて、延曆寺に報じた。其の他、意に満たぬ事があれば、山徒は日吉、祇園、北野等の神輿を昇いて入洛、嗽訴し、興福寺は春日の神木を奉じて入洛、嗽訴し、東大寺は八幡宮の神輿を昇いて訴ふるといふ有様で、朝廷は如何と

もすること能はず唯傍觀するばかりで、非理の訴へも多くは聽許せられ、山科道理といふ語さへ出来た位である。斯様にして山徒が園城寺を火いたこと、清水寺を火いたこと、興福寺が多武峯を火いたこと等は度々であつた。夫れのみならず熊野の神人、石清水の神人、祇園神人等といふ神主連中も亦神輿を昇いて嗽訴したので、此の時代に、跋扈したのは僧侶ばかりでなく、神人も夫れに劣らず跋扈してをるのである。併し勢力が寺院のやうにないので、多くは僧侶の下に働いてをる位で、大したことはしなかつた。そこで、從來の歴史などいふものは坊主ばかり悪くいつてをるが、此れは偏頗で、實は神主連中も出来るだけは亂暴狼藉を働いてをるのである。斯様にして、僧風は頽廢し、飲酒、蓄妻、男色行はれざるはなく、僧服魔心の徒が形式的の祈禱、修法に外部の體面だけを保つといふことになつた。これが院政時代即ち平安末期の有様である。

第二篇 鎌倉時代の佛教

第一章 社會精神の動搖

平安朝の佛教は花の匂ふが如き密教であつた。従つて其の美術は著しく官能を刺戟する極彩色の燦爛たる繪畫彫刻に依つて代表される。夫れが漸々降つて藤原時代に來ると、織巧優美の限りを盡すやうになり、藤原氏の全盛と共に宗教も美術も元氣を消耗した外形のみが整うた活氣のないものとなり了つた。斯くの如くにして、平安朝の末期、謂はゆる院政時代に於ける中央政府の權力が衰へて、地方に移り、地方の豪族が勃興すると共に、宗教の眞精神も、法相、三論、華嚴の三宗はいふに及ばず、天台眞言の精神もいつとはなしに枯稿して、漸く口傳や祕傳を重んずるやうになり、最澄空海時代の潑瀾たる精神は無くなつてしまつた。瑣細な儀式の相違から、台密の十三流、東密の三十六流(必ずしも平安朝に悉く起りしにはあらず)などいふ分派が出來て、夫れを墨守するやうになり、佛教の眞意は遺却されてしまつて、諸大寺の跋扈のみが年

々歳々新らしい記録の頁に誌されるやうになつた。そこで、中央政府の權力が漸次に地方の豪族に移つたと同様に、佛教の精神は僧綱僧位の手を離れて、隱者凡僧の手に移りかけたのが、院政時代の初頃からの傾向である。

五月の陽氣の盛んな時、綠葉は丘を飾り、青草は野を描いて居つて、天地一つとして枯槁の相すがたの無い時節にも、仔細に觀察すれば、一陰は既に生じてをるのである。夫れと同じやうに、叡山の隆盛、其の極に達し、良源が座主の職に據つて一世を睥睨した頃には、誰か他日の凋落に考へ及ぶものがあらう。併しなから、一陰は既に其の中に生じてをつたのである。即ち空也上人は念佛を以て、地方を教化し、到るところに痛切なる求道の心を鼓舞した。性空上人は書寫山を根據として、教化を布いて居た。空也上人は其の名を光勝といひ、天慶元年、京に入りて専ら彌陀の名號を稱へ、市井を教化したので、市聖いちのひじりといひ、又は彌陀聖と呼ばれた人である。天魔は前にも説いたやうに、平將門、藤原純友の跋扈した時代、即ち武人が始めて堂々と其の旌旗を中央政府に向つて翻した時である。空也、性空は既に宗教界に於ける將門、純友である。併しな

がら、彼れ等は叡山や東寺の佛教に向つて、表面上反抗したのではないが、右の佛教に對して、野に叫ぶ豫言者の態度を取つたものであるといふことは、拒むべからざる事實である。斯くの如くにして、叡山最盛の時代に於いて、既に野に叫ぶ豫言者の聲は聞かれたのである。

西方を願ひ彌陀の淨土に往いて生まれたいと願ふ西方往生の思想は、必ずしも空也上人を待つて始まつたのではない。夫れは寧樂朝から、平安朝にかけていくらかあつたことであることは、今に遺つてをる諸の往生傳と稱するものを見れば分る。凡そ叡山の佛教は、前にも述べたやうに、天台、真言、律、禪といふやうに、多くのものを綜合した一大體系を備へたものであつたので、夫れが年處を經るに従つて、漸く分裂して、其の一部が夫れ夫れの方面に向つて發展すべき運命を有つて居たのである。即ち西方往生の如き思想も、叡山の佛教の中に、其の根を有して居たので、敢て突然起つて來たのではなかつた。傳教大師は叡山に四種三昧といふものを始めたが、是れは、摩訶止觀に依る修行で、四つの三昧法である。即ち常座一行三昧、常行佛立三昧、常行常座三昧、非

行非座三昧が是れてある。其の中の常行佛立三昧は慈覺大師圓仁が之れを承けついたので、圓仁は入唐歸朝の後叡山に常行三昧堂を建て、阿彌陀佛を本尊として、五台山念佛三昧法を修したのである。是れが叡山に於ける念佛の濫觴である。其の後、相應、良源、源信、覺超といふやうな人々が起つて、念佛思想が盛んに爲り、一面は叡山の正統派の中に斯様に念佛思想が起ると共に、傍系派、隱者派、ともいふべき空也上人一派の念佛思想が起つて、良忍、源空の先驅を爲したのである。(委しきことは後に説く)

さて斯様に叡山の佛教其の物の中に、夫れ夫れ發展分裂すべき要素を含んで居たことは事實であるが、而も之ばかりが鎌倉時代に入つて、幾多の新宗教を興すべき原因と爲つたのでは無い。夫れには社會的に重大な原因があるのである。此の社會的原因といふのは種々あるのであらうが、大別して三つとすることが出来る。一つは政治的原因で、中央政府の權力が衰へた爲に、地方豪族の勃興と爲り、延暦、園城、東大、興福などいふ大寺も之れが爲に勃興した。夫れに伴うたのは經濟的原因である。第二は權力の争ひから道德は權威を

失ひ、無政府の状態に陥つたこと、第三は經濟的原因である。第一に第三が伴うて、諸大寺の勃興を來し、爲に佛教の腐敗を招きたることは既に平安朝のところに述べて置いたから、此には再び説かぬこととするが、第二の原因は如何いふ邊から起つたのであるかといへば、藤原氏相互の間に於ける權力の争ひから起つたのである。藤原氏が天子の外戚と爲り、攝政や關白に爲るやうになつてから、相互の間の權力争ひといふものは極端に達して、兄弟父子相反目し、相嫉視するといふことが殆んど歴代の例と爲つたのである。其の争ひの標的と爲つたものには種々のものがあるであらうが、第一は外戚たらんとする争ひ、第二は攝政乃至關白たらんとする争ひ、第三は氏の長者たらんとする争ひの三つは其の最も大いなるものであらう。固より此れ等の三つは互に關聯してをるので、斯様に分けることは適當でないかも知れぬが、今は假に分けていふのである。斯様に權力を争うた結果が、父子、兄弟の情誼道德といふものが全く廢れて、父子相怨み、骨肉相食む状態と爲り、延いては保元の亂、平治の亂などを引き起したのである。尤も此れ等の大亂は、藤原氏が互に争うて

をる中に、更に其の家令、家司といふべき陪臣に権力が移り、其の権力争ひの爲に、且つは皇室の内訌の爲に發したのであつて、其の原因は單純ではないが、併し此れ等とても、藤原氏相互間に於ける権力争奪の結果として起つたのであると言つても宜しい位である。そこで保元の亂には弟に渡らせらるゝ、後白河天皇が御兄に渡らせらるゝ、崇徳上皇を松山に遷させらるゝといふ前古未曾有な珍事が出来たのである。夫れのみならず、平清盛は叔父の忠常を殺すといふことに爲り、源義朝は父の爲義を殺さねば爲らぬといふことに爲り、父子兄弟互に敵と爲り、互に殺し合ふといふ痛ましい慘劇歴史あつてより以來の大慘劇を演出した。之れがどれ位社會の人心を攪亂したか分らぬのである。次は平治の亂であるが、此の時も又慘劇たる殺戮が行はれて、昨日まで朝廷に時めいた人が、今日は路傍に梟せらるゝといふ有様となつたのであるから、人心の動搖は甚しきものがあつたに相違ないのである。斯様に人心が動いて来たところに、平氏の全盛時代が来て、清盛の亂暴が次いで起り、方今天下の人平家にあらざれば人にあらずといはるゝやうになつて、天下の耳目を聳

動したが、さて驕る平家も久しからずして、二十餘年の榮華の夢も、壇の浦の春風に跡なく散つてしまふことになり、源氏の世とは更つたのである。其の間の變遷の激しいことは、まるで、走馬燈のやうで、應接に暇ない程であつた。其の時代の人は平家の全盛も見たであらう。而して、日本六十六箇國の半内を領して居た平家の一族が薨を列べて居た京都の栖家を焼き拂つて、西國に落ち延びたあはれな有様も眼の前に眺めたであらうし、木曾義仲が北陸の方から、潮の寄するやうに京都に亂入したすばらしい勢ひをも仰いだであらう。然るに其の義仲が久しからぬ中に法住寺殿の焼討を始め、終には粟津の露と消えた^{はな}儚い夢物語をも知つてをるであらう。加之、平家滅亡の後、前の大將であつた平宗盛が囚人と爲つて、京都を引廻はされ、剩へ關東に下され、終には首と爲つて京都に曝されるといふ激しい運命の神の魔術をも眼のあたり見たことであらう。夫れのみならず、一度は義仲を討ち、二たびは平家の一族を滅した驍勇無雙の義經が兄の勘氣を蒙つて、腰越から追ひ返され、土佐坊昌俊の夜討に遇ひ、主従僅に二三十騎で都を落ちて、大和に逃れたことなどは何

といふ激しいうつりかはりであるまいか。夫れから引き續いては、鎌倉に於ける諸名家の滅亡、梶原一家だの、三浦一家だのいふ名族が相亞いて一家全滅の不幸に陥つてをる。凡て斯様な平安末朝から、鎌倉初期にかけての社會の大活劇、大悲劇は、之れを目撃して居た當時の人々の心に如何なる感想を與へたであらうか。

祇園精舎の鐘の聲 諸行無常の響あり。娑羅雙樹の花の色 盛者必衰の理を現す。

といふのは、有名な平家物語の第一頁に特筆されてをる文句であるが、これは全く當時の人心をいひあらはしたものではなからうか。斯くの如くにして、天下の人心は安んずる所がないやうになつた。即ち藤原氏の權力争ひは延いて、道德の頹廢と爲り、保元の亂から平治の亂、平家の全盛も一夜の夢と化し、義仲の威權も、粟津の露と消え、義經の功績も酬いられずして、流零をかこつ涙と變り、奥州の藤原氏の滅亡について、鎌倉諸侯の滅亡と爲る平安末、鎌倉初期の時代は實に變轉極まりのない慘憺たる修羅の巷を現出し、生命財産の安固

を保障するものも無い無政府の状態に陥つたので、社會精神の動搖は實に甚しかつたので、皆精神上の安慰にあこがれて居たのである。

更に翻つて宗教其の者の方面から觀察して見れば、天台眞言の宗教が漸々權威を失つて來る。南都北嶺の富有は僧侶の腐敗を促し、今や僧侶に對する社會の信用は地に墜ち、其の貴族的の地位と權力とに對して畏怖するのみであつて、信賴の情は、全く失はれたのである。貴族富人の徒は一概に左様でもなかつたやうであるが、一般人民は祈禱をしようにも多大の費用がかかるのであるから、當時のやうに祈禱攘災の効驗が殆んど宗教の全體であるかのやうに考へられて居た時代には、斯様な經濟的關係から、下民は宗教の恩恵に浴することが出来なかつたのである。夫れに反して、貴族は如何なる慾望も祈禱の力に依つて得らるゝものと信じて、汚行敗徳の所爲を助くる爲にさへ宗教を利用して居た時代である。此の例として、延命、幸福を祈る位は何でもないことであるが、仕官の祈に至つては少しく滑稽である、尤も甚しいのは自己の怨みに思ふものを呪咀の法に依りて除き、若しくは生命を奪はんとするに

至つては、弊も亦甚しいのではあるまいか。而して、夫れを達するには、祈禱に依り、僧侶の手を借つたものである。而して、斯様なことを、唯々として引受け、た密教の功力は、貴族の甚だ徳としたところであるが、下民や貧民は、夫れ等の恩恵に與かることが出来ないのである。何となれば、左様な祈禱をするには、多大の供物や布施を要するからである。換言すれば、金力がなくてはならぬのである。斯様な次第であるから、經濟的原因から、當時の宗教は、下民に其の力を仰がれるばかりで、其の恵みを垂るゝことは出来なかつたのである。是れも亦新宗教に向つて、天下の人心が潮の如く歸依した一原因である。

夫れから、夥しく宗教の權威を傷けたものは、平家の東大、興福兩寺を燒盡したることである。以仁王の舉兵の時、園城寺と南都の諸寺は、王に與して兵を擧げたので、清盛は重衡に命じて、南都を襲はせ、東大、興福の兩大寺を一炬に附したのである。是れが當時の人心に與へた影響は、非常に大なるものがあつたに相違ないのである。何となれば、東大寺は聖武天皇の勅願に依つて、天下の總國分寺として建立された寺であるし、興福寺は藤原氏の氏寺として、一門の

歸依を鍾めた大寺院であるからである。凡そ天下の寺院數多き中に、此の二大寺のやうに、(南都の中で)朝廷及び攝家に關係の厚く深い寺院は、他に類例が無いのである。然るに平家の軍勢は何の憚るところも無く、僧徒を屠り、伽藍を火いて、勝利を絶叫したのである。此の一撃は、實に有形的の建造物に對して、根本的破壊であつたのみならず、實に當時の人心に深く根ざして居た此れ等の佛教寺院が代表する信仰に向つて、大々的破壊を加へ、大鐵鎚を下したのである。従つて宗教の權威が頗る傷けられたのである。

以上三種の原因は、或は遠因と爲り、或は近因と爲つて、從來の宗教に對する民心に一大變化を與へ、新しき或る物を求めんとする感情を與へたのである。以上の原因は、個々別々に存在してをるやうに見ゆるが、其の實は相倚り相助けて、其の作用を及ぼしてをるのであつて、其の結果たるや、社會精神の大動搖を惹き起してをるのである。加之、源氏の勃興と共に、主權の實際の存在は京都の朝廷にあらずして、關東の鎌倉に移つたこと、賴朝の新政に従ふ社會組織の變動並に新興國の氣運と共に、人心が新になつたといふこと、此れ等の多く

の原因は互に紛糾し、錯綜して、鎌倉時代に於ける新宗教の興起を促したの
 ある。夫れを従來の佛教史家と稱せらるゝ人々の多くは、單に源平の戦ひに、
 依つて、人々が無常を感じ、夫れが爲に淨土門の興隆が社會の要求に應じて起
 つて來たといふやうに説いてをるのであるが、我れ等の見方から見れば、誠に
 淺薄な議論と稱せざるを得ない。鎌倉時代の新佛教の興起は、唯其の位の淺
 慕な意義の下に現はれてをるのではない。もつと深い原因から起つてをる
 ことを忘れてはならぬ。

第二章 交替神教と一神教及び汎神教

平安朝の佛教と鎌倉時代の佛教との著しい差異は何處に存してをるので
 あるかといへば、一寸答ふことは難しい問題である。併し其の最も重要な
 差異は交替神教が變じて、一神教若くは汎神教と爲つた點に存する。

凡そ鎌倉時代の佛教といへば、源空(法然上人)に依つて起つた念佛宗、榮西に
 依つて傳へられた禪宗、日蓮に依つて唱道された日蓮宗である。尤も小さく

分ければ種々な宗旨があるが、夫れは要するに、後世に至つて、發展した上から
 いふのであつて、鎌倉時代に左様に分れて居たのではないのである。例へば
 眞宗等は後世からいへば淨土宗と別派であるが、親鸞上人は法然上人の門下
 であるので、鎌倉時代では別派獨立などいふことは勿論なかつたのである。
 曹洞宗は道元に依つて傳へられたが、其の頃は榮西の門下であつて、臨濟、曹洞
 などいつて、全く別様の趣きを具へて居たのではなかつたのである。斯様
 な譯であるから、鎌倉時代に於ける新宗教、新佛教といふものは、右の三派で總
 括することが出来るのである。

著者の意見に依れば、鎌倉時代の佛教は交替神教が一神教若くは汎神教に
 變つたのであるといふのであるが、斯様なことは此れまでの學者が唱へなかつた
 こととして、著者一人の臆説である。此に交替神教といつたは、台密、東密の密
 教を總稱したので、一神教若くは汎神教といつたのは、前に擧げた三派を指し
 たのである。學者にいはせると、由來密教は多神教的、一神教又は多神教的、汎
 神教であるといふことである。成る程教理の上からいへば、密教は非常に複

雜なるもので、一面からは多神教とも見えるし、一神教とも見えるし、汎神教とも見えるし、金剛界、胎藏界を説いて宇宙の生成を論ずる所などを見ると哲學上の二元論のやうにも見えれば、數論外道の説と似通つた點もある。夫れて如何やうにも命名することが出来るであらう。而も密教の實際的方面から見れば、疑ひも無く交替神教である。凡そ交替神教(Henotheism)といふ名稱は、古代印度の宗教の中で、多神を立てながら、或る祈りをする時には、或る一柱の神を本尊として祈願し、其の他の神々は存在せぬものとして取扱ふ宗教が起つたことがある。例へば火神阿耆尼に祈る時は因陀羅、婆樓那などいふ神々は、少しも其の祈禱の對象と爲らぬ。其の祈禱に關係がないので、祈る者は唯阿耆尼のみが宇宙唯一の神であると考へて祈禱を爲すのである。そこで祈禱の變る度毎に、本尊と爲る神が變るところから、交替神教といふ名がついたのであるが、我が平安朝に行はれた密教も、教理に於いてこそ、種々の高尚な點もあらうが、實際は交替神教として行はれて居たのである。即ち不動明王を本尊として、或る祈禱をすることもあれば、藥師如來を本尊として祈ること

もあり、或は普賢菩薩を本尊とし、或は歡喜天を本尊とし、其の他の諸神諸佛諸天を本尊として、一々の祈禱を致したものである。其の詳細なことは阿婆耨抄か其の中の一部たる諸法要略抄を讀めば分ることであるから、詳には述べぬが、此の實際的方面から見れば、密教は左程高尚なものでは無く、全く交替神教なのである。此の説は著者一個の私見であつて、密教の人々は首肯するか如何か分らぬが、事實は確に左様であると思ふ。従つて、我が平安朝の佛教は全く此の交替神教であつたのであるが、鎌倉時代に至つて一神教、即ち淨土教と汎神教、即ち禪宗及び日蓮宗の二つの形式に變つたのである。

第三章 復古思想と新思想

凡そ何の世、何の時を問はず、或る種思想が權威と爲つてをること久しくあると、必ず沈滞し、腐敗して革新を要するに至るものである。而して其の革新の手段は種々あるが、其の形式として現はるゝものは、第一に舊思想に對する懷疑的態度を取る思想で、其の次に起るものは復古思想で、次に來るものは

新思想である。尤も斯様にハッキリと分れて起るものではないので、懷疑思想と共に、復古思想も起れば、復古思想と共に新思想も起るのである。否々懷疑思想其の物が既に其の實は新思想、新運動であるのである。

鎌倉時代の新思想新宗教も又初めは舊思想、舊佛教に對する懷疑思想を先きとして、復古思想が起り、新思想が起り、其の形體を確立したのが、新宗教であり、新佛教である。即ち念佛宗又は淨土教と呼ばれる、一派、夫れから、禪宗、夫れから日蓮宗である。最も早く起つてをるのが念佛宗で、次いで、起つてをるのが禪宗、最後に起つたのが日蓮宗である。而して、念佛宗と禪宗は舊宗教に對する懷疑思想に出發して、復古思想に往き、終に新思想と爲つて、其の形體を得たのであるが、日蓮宗は之れと頗る其の趣きを異にして居る。即ち其の興起の時代が最も後れてをるので、平安朝から在り來りの天台、眞言の兩宗、律宗等に對する懷疑的態度を取ると共に、念佛宗、禪宗等の新思想に對しても、懷疑的態度を取り、更に「釋尊に還れ」「傳教に還れ」といふ復古思想に進み、更に新思想を以て舊佛教を解し、新たな一宗を建てたので、頗る複雑な態度を取つたもの

といはねばならぬのである。日蓮宗は舊佛教の天台宗が念佛、禪等の勃興に刺戟されて、反省した結果、復古思想に進み、念佛、禪等の新思想の影響を受けつゝ、自らも新しい形式を取つて現はれた宗旨である。従つて、日蓮の諸宗に對する態度を研究するには、此處まで進んで考へねば分明せぬのである。單に日蓮の遺文を熟讀したところで、時勢の觀察、思想の流れが分らぬでは、日蓮なる人のやり方が唯男らしいとか、狂氣じみてをるとか、國家に對する態度がどうとか、元寇の預言者であるとか、ないとかいつて争うても所詮の無いこと、兒戯に類したことである。著者が長々と佛教渡來からの思想の變遷を敘述したのも之れが爲である。仍つて鎌倉時代に於ける事實の變遷を簡單に述べて、日蓮の佛教史上に於ける位置を明かにしてから、上人の傳記を紹介しようと思ふのである。

第四章 鎌倉佛教の三期

鎌倉時代は元暦元年から始まるとすれば、其の前の時代から引續いて起つ

た念佛宗の運動、夫れに亞いて起つた禪宗の運動、是れ等の運動が略、形體を得たのを第一期念佛、禪創唱の時代とし、次期は此れ等に對して起つた日蓮宗の勃興時代で、其の次は此れ等の三宗が漸次に勢力を得て來る時代で、即ち發展時代である。固より思想の推移、思想の傳播に關することであるから、斯様にハッキリ區別することは出來ぬのであるが、夫れ夫れの時代の主要なる思想並に其の傾向を抽出して、斯様に名づけたのである。

凡て政治史の上からは、鎌倉時代を三期に分ち、第一期元暦元年から承久の亂の前まで、第二期承久の亂から、時宗の卒去まで、第三期時宗卒去から元弘三年高時滅亡までとするのが普通の分け方であるやうであるが、佛教史の方でも左様に分けられぬことは無い。そこで此の政治史の區分に隨ふときは、其の間に起つた重要事實を抽出して、前に述べたやうに、第一期を念佛宗及び禪宗創唱時代、第二期を日蓮宗創唱時代、第三期を新佛教發展時代と名づくることが出来ようと思ふのである。之れを年數の上からいへば、第一期は元暦元年から承久三年に至る三十八年間、第二期は貞應元年(即ち承久四年)にて、此の年

四月貞應と改元す)から弘安七年(此の年四月四日北條時宗卒去す)まで六十三年間、第三期は弘安八年から元弘三年(七月北條氏滅亡)まで、四十九年間、即ち合計一百五十年間と爲るのである。

此の年代上の區分法が佛教史の上で、左程不都合でないといふ理由を少しばかり述べて置かう。即ち第一期の三十八年間に於いては、前時代から引續いて念佛宗の開祖源空(法然上人)の運動があり、續いて禪宗の輸入者榮西の活動があり。幾多の衝突の後、漸く社會に認められ、建暦二年の正月に源空は寂し、建保三年の七月に榮西も寂して、漸く發展時代に移らんとしてをるのである。而して、第二期の始まる承久三年(二月)には日蓮が生まれ、第二期の終る三年前の弘安五年の十月には日蓮が寂してをるのである。第三期は發展時代といふべきこともないが、此の間に新佛教は京都を中心として起つたものは、鎌倉に傳播し、鎌倉を中心として起つたものは京都に向つて、傳道の歩を進めてをるのである。而して、次の南北朝に入つて、盛んに發展してをるから、新佛教の運動は南北朝に入つて完成したやうなもので、鎌倉時代を通じて、新佛

教の發生時代と見ることも出来る。而して、其の中に、更に時期の區分を設けることにするといふのならば、右に述べたやうに爲るのも餘り不自然なことは無いのである。固より見方に依つては種々の區分法もあるであらうが、今は政治史の區分に随つておいたのである。次に日蓮以前の鎌倉佛教として、第一期を紹介し、日蓮時代の鎌倉佛教として、日蓮活動時代の諸宗の梗概を述べ、終に、日蓮の鎌倉佛教史に於ける地位及び諸宗に對する態度を述べて、本篇を終り、日蓮の一生を敘述して、本書を終る積りである。

第五章 日蓮以前の鎌倉佛教

日蓮以前の鎌倉佛教といへば、元暦元年鎌倉の開府から承久三年に至る三十八年間の佛教を指すのであつて、謂はゆる念佛宗及び禪宗創唱時代である。此の時代に於ける佛教の概観を述べると、先づ舊佛教と稱すべき南都の六宗及び平安の二宗は前々から度々述べ來つた通り、宗教としての勢力は殆んど無くなつて、唯物質的に豪族として働いて居るに過ぎぬ。即ち南都では、東

大興福の二大寺が勢ひを有つてをるし、京都では延暦寺と東寺と園城寺が勢力を有つて居る。而して、此れ等の諸大寺が或は別當職のことから、或は戒壇のことから、或は武士との衝突から、或は所領のことから、神輿を振つたり、神木を捧げたりして、嗷訴亂暴を極めて居ることは、平安朝の末期たる院政時代と少しもかはらぬのである。而して、念佛宗は源空に依つて、此の間に創唱され、禪宗は能忍及び榮西に依つて少しく後れて傳へられたが、是れ等に對して、從來の諸大寺は大に妨害を與へ、亂暴を加へたのである。今先づ此の時代に於ける諸大寺跋扈の有様を述べて、新宗教興隆の事情に及ぼうと思ふのである。

鎌倉時代の幕が落ちると、第一番に起つて來たのは東大寺の造營である。抑、東大興福の兩寺は寧樂朝の昔から、平安朝を通じて、非常な勢ひであつたのであるが、源賴政が以仁王を奉じて兵を擧げたときに、園城寺は宮を迎へ奉り、南都の二大寺も之れに同意し、山門も同意して居つたのであるが、山門の方は清盛と厚かつた天台座主明雲の鎮撫に依つて同意を齎し、官兵は園城寺に向つたので、宮は南都に落ちられたが、路に於いて薨去といふことになり、一時は

治まつたのであるが、源頼朝が起るに及んで、園城寺及び南都の二大寺は源氏に屬した。そこで、平重衡が南都を攻めて、右の二大寺を盡く灰燼としたのである。そこで、頼朝の世になつてから、東大寺造營といふことが、佛教界の一大問題と爲り、上は皇室の御力に依り、頼朝の盡力が之れに加はり、俊乗房重源が大勸進と爲つて、天下を勸誘し、宋の佛工陳和卿がやつて来て、大佛を鑄るといふことになり、建久六年の三月に總供養を行ふことに爲り、天皇行幸遊ばされ、頼朝も態々關東から出て来て、此の式に臨んだのである。凡そ頼朝といふ人は、敬神崇佛の念の厚かつた人で、鶴岡八幡宮の造營を始めとして、關東の國分寺や一ノ宮の造營に心を寄せ、自身は又觀世音菩薩を信仰した人である。殊に平家は東大、興福の二大寺を^燒く等といふ亂暴を働いて、夫れが爲に少なからず天下の輿望を失うたのであるから、其の邊にも十分注意したと見えて、神社佛閣に對しては殊に意を用ひて居るのである。就中、園城寺とは特別の關係があるし、東大、興福兩寺に向つても、成るべく懷柔策を取つて、其の意に逆はぬやうにしてをる形跡がみゆるばかりでなく、延曆寺に向つても、出來るだけ

は温和な政策を用ひてをるのであるが、併し延曆寺の眼中には殆んど關東幕府といふものがないといつても、差支ない位で、随分亂暴を行つてをる。即ち第一回の亂暴は建久二年の四月に關東の家人の佐々木定綱のことに依つて、叡山の大衆が神輿を奉じて京都に迫り、嗽訴したので、流石の幕府も之れには讓歩するの已むを得ざることとなつて、定綱配流といふことになつて、一段落を告げたのである。此の事件で見ても、延曆寺の勢ひに對しては、幕府の方でも、思ふやうに處分することが出來なかつたのである。此の時代に於ける諸大寺の跋扈の有様を概観する爲に、左に年表を掲げよう。

文治三年九月 山徒佐々木定綱と争ふ。

同 五年二月 幕府奏して山徒の兵杖を停む。

建久二年四月 山徒神輿を奉じて入洛し、佐々木定綱を訴ふ。

同 四年四月 佐々木定綱を赦す。

同 六年 山徒榮西の禪宗を稱ふるを訴ふ。

同 七年七月 實慶天王寺別當に補す、園城寺の大衆蜂起す。

同 九年九月 興福寺大衆和泉の國司を訴ふ。
 正治元年六月 園城寺の大衆相闘ふ。
 建仁元年十月 延暦寺の學生堂衆と闘ふ。
 同 三年八月 延暦寺西塔釋迦堂の堂衆と争ふ。
 同 年九月 東大寺の大衆相争ふ。
 同 年十月 延暦寺の堂衆金子山に據り官軍と戦ふ。
 元久元年五月 延暦寺の堂衆等を配流す。
 同 年十一月 延暦寺念佛を訴ふ。源空七箇條起請文を製す。
 同 二年九月 興福寺の大衆源空を罰せんと請ふ。
 同 三年二月 朝廷源空の徒住蓮、安樂を捕ふ。
 建永二年二月 住蓮、安樂を刑す。
 同 年二月 源空を土佐に配す。〔親鸞を越後に配す〕
 承元元年十二月 源空を赦す。〔親鸞を赦す〕
 同 二年二月 金峰山の徒多武峰を火く。

建暦元年三月 山徒園城寺を火かんとす。幕府兵を遣し園城寺を護らしむ。
 同 年八月 延暦寺の堂衆四百人を赦す。
 同 年十月 源空の入京を許す。
 同 二年八月 金剛峯寺の徒三千餘人入洛を企つ。
 建保元年七月 清水寺の僧清閑寺領に一寺を建つ。
 同 年八月 山徒清閑寺領の建寺を怒り、清水寺を火かんと官兵と戦ふ。
 同 年十月 清水寺、延暦寺の末寺と爲る。興福寺怒つて叡山を火かんとす。
 同 二年四月 延暦寺の大衆、園城寺を火く。
 同 年五月 園城寺及び南都の僧、六月令を停めんと請ふ。
 同 年八月 興福寺園城寺を助けて延暦寺を攻めんとす。
 同 三年三月 園城寺の徒叡山東坂本を火く。

同 年三月

延暦寺僧綱園城寺を訴ふ。

同 年五月

僧徒の武事に與かるを禁ず。

同 四年三月

空阿四十八日念佛會を京都九條に修す、山徒之れを妨ぐ。

同 六年九月

山徒入洛末寺、大山寺僧の管崎の徒に殺さるゝを訴へ、管崎を末寺と爲さんと請ふ。

同 年九月

山徒神を奉じて入洛武士と闘ふ。

承久三年六月

山徒官軍を助け東軍と戦ふ。

三十八年の間に、延暦寺、園城寺、東大寺、興福寺等が佛徒の本分を忘れて、武事に關はつてをすることは右の通りである。朝廷や幕府で屢、兵杖を禁ぜられたけれども、何の役にも立たなかつた。實際の勢力を有して居る者に向つて、いくら空文虚律を以て號令しても何の効果があらう。否、幕府の如きは、平家を滅し、義仲を滅し、いはゞ天下を一統する程の武力を有して居たのである。而も、延暦寺に向つては、思ふやうに處分を行ふことが出来なかつたのである。是

れを以て見ても、當時延暦寺の勢力がどれ程強大であつたかといふことが容易に想像されるであらう。現に平家の如きも、延暦寺の跋扈を恐れて、福原に遷都したともいはれてをるし、後白河法皇が潜に叡山に御幸あつた爲に、平家は都落ちを決してをるのであり、又平家が愈、都を落ちようとする時に、宗盛以下平家の主なる人達が連署して、延暦寺を以て氏寺と爲し、日吉社を以て氏神としようといふ起請文を書いて、叡山を味方にしようとして試みたことがある。以上の事實を以てすれば、叡山の勢力の盛んなことが思ひ半ばに過ぐるであらう。

斯くの如く、源平氏をも恐れぬ延暦寺があつて一方に構へ、藤原氏の勢力を利用する興福寺があつて殆んど大和一國を領してをり、其の他、園城寺、東大寺のやうな諸大寺が、夫れ夫れ多大の勢力を蓄へて居るので、鎌倉時代に入つて幕府天下を一統したとはいふものゝ、夫れは表面上のこととて、右の四大寺の如きは、幕府の勢力範圍内にあつたのではないので、唯園城寺は源氏と特殊の關係があるので、別であるが、延暦寺及び興福寺の二大寺は實に嚴然たる一敵國

の觀を爲してをるのである。而して、此れ等の諸大寺は當時の新氣運に乗じて起つて來た新佛教に向つては亂暴狼藉を加へ、百方其の運動を妨害してをるのである。我れ等は翻つて、此の時代に於ける新興の氣運に乗じた新佛教の運動を觀察せねばならぬ。

此の時代には、佛教を唱へた人は多くあつたであらうが、今日確に傳はつてをるのは、源空即ち法然上人(圓光大師)と能仁と榮西(明菴、葉上房、千光圓師)の三人である。即ち源空は念佛宗(淨土門)を開き、能仁及び榮西は禪宗を傳へたのである。而も、能仁は後世に向つて太した影響がなかつたので、今日深く注意する人が無いやうであるが、其の功績は十分に認めて置かねばならぬ。百練抄にも、能仁と榮西が禪宗を開立せんことを朝廷に請うたことが記してある位であるから、其の當時に於いて、能仁は決して榮西の下にあつたのではなかつたのであるが、而も能仁は其の事業が未だ緒に就かぬ中に非命に斃れたので十分の功績を擧ぐることも出来なかつたのであるが、確に先見の明ある達識の英俊であつたのである。

さて、此の時代を念佛宗及び禪宗創唱の時代と名づけたやうに、此の時代の新佛教は念佛宗と禪宗との二宗である。源空は美作の國久米南條稻岡の人で、長承二年の四月七日に生まれたのであるが、保延七年九歳の春、父時國が殺されたので、父の遺言に依つて佛門に入り、修行して居た。而して久安三年の二月十五日、十五歳の時、叡山に登つて源光の門に入り、同じく四月八日に皇圓の室に轉じ、天台の法門を學び、同十一月東大寺の戒壇に就いて大乘戒を受け、六年の九月十二日十八歳の時、黒谷の叡空の室に入つて、研鑽を重ねた。夫れから諸宗の學を研究したが、非常な俊才であつたので、當時智慧第一法然房と稱せられたといふことである。然るに聖道自力の法門では、末代の我れ等が佛に爲るといふことは到底望まれないといふことを悟つて念佛門に歸し、承安四年の春、四十二歳にして、黒谷を出て、吉水に住し、念佛を勧めたので、之れから、念佛の一門が非常に盛んになつたのである。前章にも述べた通り、我が國の念佛は叡山の四種三昧に起原を有するので、慈覺大師の常行三昧の系統を引いた念佛は、隨分平安朝にも行はれて居たので、慈慧僧正から其の門下の

源信即ち慧心僧都に至り、往生要集を著して西方往生を勧めたので益々盛んになつたが、殊に大原の良忍即ち聖應大師が出て、融通念佛を勧めてから、又一層の盛観を呈したのである。夫れから、一方高野山に於いても、念佛が盛んに行はれて居て、西方に生まれたいと願ふ隠者が多く高野山に集まつて居たので、天野の別所等といふ念佛道場が出来、西行法師等も此處に住して暫く行ひ澄して居たことがあつた位である。殊に高野の念佛は興教大師覺鑊に至つて、一層盛大を致した。覺鑊は眞言の名師で、今日から新義眞言宗の祖といはるゝ人であるが、非常に念佛を勧めたのである。密嚴諸祕釋等で見ると、其の念佛して往生する淨土は密嚴淨土であるが、而も母に贈つたといふ孝養集の中に説いてある念佛思想は、全く阿彌陀佛の淨土に往生することを勧むる西方往生思想である。斯様に、西方往生を願ふといふことは、平安朝から引續いて、當時に行はれた思想であつたので、源空が非常なる徳望と熱心とを以て、念佛を勧めたので、當時の人心は響の音に應ずるが如く、吉水の幽棲を叩く求道者が西からも、東からも集まつて來たのである。而して、其の勢力は忽ち上は經

紳から下は平民に及んだので、諸宗の嫉惡を招くに至つた。其の行狀畫圖に記載してあるところに依ると、當時の貴族で、源空に歸依した人は凡そ左の通りである。

中 宮 任 子
 太政大臣兼實
 左大臣經宗
 左大臣兼雅
 右京權大夫隆信
 民部卿範光
 大宮内府實宗
 野宮左大臣公繼

夫れから、各宗の僧侶で、歸依した人も少なくは無い。其の主なる人は、

聖護院靜惠（後白河第五の皇子）
 竹林房靜嚴

天台座主顯真

天台座主慈圓(慈鎮和尚)

明 遍

聖 覺

公 胤

禪 林寺 靜 遍

明 禪

等の人々で、武士には、宇都宮頼綱及び熊谷直實等がある。而して、建久九年の春、選擇本願念佛集を撰して、兼實公に上つてからは、都鄙の歸依者が益々多くなつて、到るところに念佛の聲が聞かれるやうになつた。而して、この念佛門といふのは、今の時代は末代惡世であるから、天台眞言などいふ立派な教へも、教理としては誠に立派ではあるが、實際救濟する力がなくなつてゐるので、今は念佛の力に依らねば成佛は出來ぬのである。たとひ、戒律を持つことが出來ぬても、念佛さへ唱ふれば往生が出來るのであると説くので、末輩に至つては、

動もすれば諸宗を誹謗し、風俗を壞亂するといふやうなことが起つたのである。そこで、元久元年の十一月には、比叡山の方から、苦情が出たので、源空は七箇條の起請文を書いて漸く無事に收まることが出来た。然るに、翌二年の九月には、興福寺の方から、念佛禁止の訴を起したのが、事が面倒に爲つて來たところ、住蓮、安樂といふやうな弟子達が念佛會を修してをると二人の宮女が夫れに感じて出家するといふことがあつたので、朝廷の方でも棄て置かれず、元久三年の二月には、住蓮、安樂の二人を捕へて、訊問し、あくる建永二年の二月に至つて、右二人を死刑に處し、源空を土佐に配流するといふことになつた。併し承元元年の十二月に赦免になつたのであるが、猶入京を許されなかつたので、攝津の勝尾寺に留まり、建暦元年の十月に入京を許されたが、翌二年の正月二十五日に入寂といふことになり、念佛の興隆も一時頓挫を來したやうなもの、迫害の甚しいのにも拘はらず、念佛の一門は益々盛んに爲つたのである。翻つて、禪宗の興隆を見ると、又念佛と共に隆盛を極めたものである。念佛門は前に述べたやうに、京都を中心として、榮えたのであるが、禪宗が京都に起

つて、後には鎌倉を中心とし、鎌倉幕府の後援を得て、隆盛を來したものである。榮西は備中の國吉備津の人で、姓は賀陽氏、字は榮西、永治元年四月二十日に生まれ、十四歳にして叡山に登り、十九歳にして有辯に天台を學び、次いで、密教を伯耆の基好に受け、葉上流を起した人であるが、仁安三年二十八歳にして、商船に乗じて入宋し、明州に達したが、偶、俊乘房重源と一緒に爲つたので、共に天台山に登り、同年九月共に歸朝したのである。併し此の時は天台を研究する爲に入宋したのであつた。其の後文治三年、四十七歳の時、再び入宋し、印度に向ふところであつたけれど、亂に遭うて行けなかつたので、天台山に登り、萬年寺で、虛菴懷敏禪師に謁して、禪宗を受け、建久二年七月に平戸に着したのであるが、此の時臨濟宗を傳へたのである。翌年筑前に報恩寺を建てたが、同五年の七月には、笠崎の良辨並に延暦寺の妨害を蒙つた。併し屈せずして同六年には又筑前に聖福寺を建てたが、延暦寺の妨害は益、甚しかつたので、鎌倉幕府に頼るの得策なるを思ひ、頼家に説き、其の歸依を得て、京都に建仁寺を建てた。建仁二年の三月のことである。併し延暦寺の妨害が益、激しかつたので、翌三

年の六月には、建仁寺に台密禪の三宗を併置するといふことにして、眞言止觀の兩院を興して、調停が出来た。元久二年の三月に、建仁寺は官寺と爲つたのであるが、思ふやうに禪宗を布くことは困難であつた。承元二年の五月に法勝寺の塔が火けたので、同八月には勅が榮西に下つて、榮西は右の塔の工事を監督することになつた。而して、右の塔は建暦三年の四月に落慶供養を行つたが、榮西は功に依つて大師號の宣下に預りたいといふことを奏請したが、生前に左様の例がないといふので、權僧正に任ぜられた。(五月)此の年は建仁寺に居つたが、やがて鎌倉に至り、源氏の歸依を受け、建保三年の五月には、龜ヶ谷に壽福寺を建てたが、同年の七月に入寂したのである。年七十五で、門下には退叡行、眞釋、圓榮、朝佛、樹明、全等の人があつて、明全は建仁に、行勇は壽福に、榮朝は上州世良田の長樂寺に居つて、禪宗を廣めたので、禪宗が大いに興ることとなり、圓爾辨圓、心地覺心といふやうな人々が起つて、更に一層の光輝を放つやうになつたのである。併し其の活動時代は日蓮と同時代である。

右の外に、有名な高僧として、此の時代を代表するものには、華嚴宗に高辨即

ち明慧上人があり、法相宗に貞慶即ち解脱上人があつて、共に盛んに戒律の復興を唱へたが、高辨は高雄山梅尾の高山寺に居り、貞慶は笠置山に居つた人で、前者は寛喜四年の正月(第二期)に寂し、後者は建暦三年の二月に寂した人である。共に念佛に反対した人で、高辨は源空の寂した建暦二年十一月に「摧邪論」を、翌三年の六月に「同莊嚴記」を著して、念佛を破し、貞慶は源空配流の時、興福寺の訴状を書いたと傳へられてゐる。夫れから正治元年四月に俊苜が入宋し、承元四年二月長門に歸着し、建保六年夏泉涌寺に入り、大に律を唱へ、夫れから建保五年の七月に忍性が生まれてゐるが、此の人に依つて、律宗が大に起つたので、日蓮が攻撃の標的とした一大人物である。斯くの如くにして、鎌倉時代の佛教は第二期に入るのである。

第六章 日蓮同時の鎌倉佛教

鎌倉佛教は政治史の區分に従つて、承久四年を以て、第二期に入るのであるが、承久四年は四月に改元して、貞應元年と爲つた。而して、其の前年即ち承久

三年には皇風競はず、東風徒に暴びて、三上皇の遠國遷御と爲り、主權の實質は全く北條氏に移つたのである。而して、承久四年の二月には鎌倉時代に於ける一大宗教の開祖たる日蓮が安房の國小湊の浦に呱呱の聲を擧げた。

我れ等は此の時代に於ける佛教の形勢を敍するに於いて、先づ第一に、諸大寺の運動を一瞥せねばならぬ。謂はゆる東大、興福、延暦、園城の四箇大寺は、前期の新佛教に向つて、多大の壓迫を加へたのであるが、今期に於いても、念佛宗並に禪宗の興隆に向つて、多大の妨害を試みたのである。

先づ念佛宗に加へた彼れ等の迫害を一瞥しよう。念佛宗は源空寂後其の弟子に依つて東西に説かれ、南北に廣められて、一時に其の勞力を増加したのである。前期に於いて、源空の歸依者の主要なる人々を擧げたが、今期に入つて活動したのは、此れ等籍紳よりは寧ろ其の門弟子であつた。源空門下多士濟々であるが、其の主なるものを擧ぐれば、

辨 阿 聖 光 (鎮西流)

善 慧 證 空 (西山流)

安	乘	石	念	俊	覺	長	法	朝	眞	西	正	法	勞
居	願	垣		乘	明	樂	性	日	觀	仙	信	蓮	觀
聖	宗	金		重	長	隆	空	信	威	心	湛	信	源
覺	源	光	阿	源	西	寬	阿	寂	西	寂	空	空	智

(長樂寺流)
(九品寺流)

成 覺 幸 西
法 本 行 空

其の他後に眞宗の祖と爲つた親鸞等であるが、此れ等の人々に依つて、念佛宗は潮の如く、當時の思想界を動かしたのである。而して、之れに對する迫害を列擧してみると、安貞元年の六月には、延暦寺の徒源空の墓を毀たんとしたので、弟子達は先師の遺骸を奉じて、他處に移すの餘儀なきに至り、同七月には、叡山の住僧で、上野の定照といふ者が、彈選擇を製して、選擇集を破したので、隆寛は之れに應じて、顯選擇を作つて、戰つた爲に、叡山の嫉惡を蒙り、隆寛は陸奥に、空阿は薩摩に、幸西は壹岐に配流さるゝに至つたのである。夫れから十月には、叡山の徒が、選擇集の印板を取り上げて、火いて了ふといふことに爲り、續いて、延暦寺の僧綱は、念佛停止のことを朝廷に奏請するといふことに爲り、隆寛は其の年の十二月十三日に相摸の飯山に寂するといふ、非運に陥つたのである。翌二年の正月には、源空の遺骨を粟生野に荼毘するの已むなきに至り、迫害は益々激しくなつて來た。然るところに、同七月には、長西が寂するといふこ

とに爲り、夫れから六年目の文暦二年五月には、鎌倉幕府なども念佛停止を令することゝ爲り、一時大に迫害を被つたが、其の後は第二期に於いては、左程のこともなかつた。併し、念佛宗は此に新たなる敵を發見した。それは日蓮との衝突である。

次に禪宗の被つた迫害も少くはなかつたが、併し此の時代に入つては禪宗の勢ひが甚だ盛んであつた。日蓮が生まれた翌年には、貞應二年二月、明全と道元が入宋したのを始めとして、入宋求法者が甚だ多かつた。左に略表を掲げよう。

此の期に於ける禪宗の入宋者

貞應二年二月

明全、道元入宋、安貞二年正月、道元歸朝、明全は彼の地に

寂す

嘉禎元年

榮尊入宋 (曆仁元年歸朝)

仁治二年七月

辨圓歸朝

寛元元年

院豪入宋

建長元年春 覺心入宋 (同六年六月歸朝)

同 三年 普門入宋

同 四年 靜照入宋 (文永二年歸朝)

正嘉二年 悲雲入宋 (文永六年歸朝)

正元元年 紹明入宋 (文永四年秋歸朝)

同 元年 義介入宋 (弘長二年歸朝)

文永元年 義尹入宋 (文永四年歸朝)

同 三年 悲曉入宋

略、右の如くてあるが、更に宋僧の來朝者も少くはない。道隆及び紹仁共に寛元四年來朝、普眞、文應元年來朝、文永二年歸宋、正念、文永六年來朝の如きは此の期の中で名高く、殊に道隆は建長寺に住し、時頼の歸依を受けた人で、日蓮が攻撃の標的となつた一人である。弘安四年の四月に道隆が寂したので、時宗は使を遣して、祖元(佛光國師)を迎へたが、祖元は覺圓、徳悟と弘安二年の六月に日本に着し、八月に鎌倉に入つたのである。斯様な勢ひで、禪宗は北條氏の歸

依を得て益、盛んに爲つたので、紀伊の由良興國寺、肥前萬壽寺、博多承天寺、越前永平寺、京都普門寺、鎌倉建長寺、京都東福寺、同萬壽寺、鎌倉淨智寺、京都正傳寺、鎌倉禪興寺、金澤稱名寺、肥後極樂寺、鎌倉圓覺寺等の名刹が建立されたので、屢、他宗との争ひを惹起し、寛元元年に筑前智山寺の徒が承天寺を火かんとしたことがあるし、文永五年に山徒が蜂起して、京都正傳寺を毀ちたこと等は大きな事件であらう。併し當時の武家が禪宗に歸依したばかりでなく、京都の方でも名望隆々たる道家(兼實の孫)の歸依に従つて東福寺が建つといふやうなことに爲つて、旭日の勢ひであつた。そこで、日蓮は大に禪宗に向つて、攻撃を加へたのであるが、其の標的と爲つたものは建長寺に居つた蘭溪道隆大覺禪師其の人である。

夫れから、翻つて、念佛宗が鎌倉に入つたのは、前の時代からであつたのではあるが、盛んに爲つたのは、肥主良忠から始まるのである。良忠は石見の國の人で、鎮西流の祖聖光の門に入り、延應元年の春、京都に入り、翌二年の二月に鎌倉に來り、悟眞寺に居り、北條經時の歸依に依つて蓮華寺の出來たのは、其の翌

月で、日蓮が出家した翌年である。夫れから寛元元年の五月に蓮華寺は光明寺と改まつたのであるが、其の後、光明寺の隆盛は大したもので、關東の念佛宗の本山と爲つた。日蓮時代には其の初期に當るので、新興の勢ひ當り難きものがあつたに違ひない。良忠の門下から、京都三流(然空の一條流、道光の三條流、慈心の木幡流、關東三流、良曉の白旗流、尊觀の名越流、性眞の藤田流)の六流が出たので、念佛宗は非常な勢ひを以て興隆したのである。

此の時代に於ける律宗は、泉涌寺の俊菴(月輪大師)に依つて、前期から引續いて興隆したのであるが、これは主として、京都に行はれたので、北京律と稱せらるゝ。夫れから承久三年に圓照が生まれて居るから、圓照は東大寺戒壇院を根據として、華嚴律を起し、(建長三年)其の下に有名な凝然(示觀國師)が出た。(但し凝然の活動時代は第三期に屬してをる)右の中で俊菴は安貞元年の閏三月に寂し、日蓮六歳の時に當るので、日蓮との交渉は無い譯である。夫れから南京律と稱せらるゝ招提寺、西大寺の律宗は、大悲興正の二菩薩、即ち覺威と睿尊の二人に依つて再興されてをるので、嘉禎二年を始めとして復興してをるの

である。睿尊は朝廷の御歸依が非常に厚かつたことは、勘仲記に見えてゐる通りであるが、忍性が其の下に出て、鎌倉に入るに及んで、關東の律宗が昌んに爲つたので、北條長時が極樂寺を建て、忍性を請じたのは弘長元年のこととて、日蓮が「安國論」を草した翌年に當るのである。即ち日蓮伊豆配流の年である。従つて、日蓮が攻撃的の的と爲つたのは、此の人である。

其の他、此の時代六十三年間の佛教を通観すれば、諸大寺の跋扈は前期と異るところなく、却つて跋扈の度を増してをるのであるが、一々の事件を紹介することは煩雜に渉るから略して置かう。殊に注意すべきは、高野山には中院頼瑜が出て、愈新義派の獨立が出来る氣運に向つたのであるが、是れも日蓮に取つては大した關係がないことであるから略して置かう。又眞言の餘弊が此の期から次期に入つて、益々盛んに爲り、陰陽道と融合した結果、遂に立川流の一派を生じたのであるが、是れは寧ろ第三期に論ずべきもので、且つ又餘りに専門的に流るゝ恐れもあるから省略しようと思ふのである。

我れ等は以上兩篇に於いて、日蓮以前の日本佛教が如何やうに變遷したか。

又如何やうに發達したかといふことを概観したつもりである。従つて、日蓮の佛教なるものが、如何やうの意義を有して起つたものであるかといふことは、自ら明かに爲るであらうと思ふ。我れ等は是れより、齎つて、主人公日蓮の一生を紹介しようと思ふのである。

第三篇 日蓮上人評傳

第一章 法華經の行者

經には、上行等こそ出させ給ふべしと見えて候へども、いまだ見えさせ給はず。日蓮は其の人に候はねども、ほゞ心得て候へば、地涌の菩薩の出させ給ふまでの口ずさみに、あら／＼申して、况滅度後のほこさきに當り候也。

(本尊問答抄)

第二篇第六章に述べたやうに、鎌倉時代の第二期の劈頭に、呱呱の聲を擧げたのは、實に我が英雄兒日蓮である。彼れは鎌倉時代の新思想と復古思想とが糾へる繩のやうに相纏綿して、興起し發展し、衝突してをる中に七字の題目を提げて奮起した俊兒である。

日蓮の一代は例へば暴風の大海原に吹き荒ぶが如く、鎌倉時代の思想界に大紛亂を興へ、大擾亂を試みた活ける火薬である。一たび念佛の門に向つて爆破し、二たび禪宗の關門に向つて衝突し、乃至台密及び東密の眞言に向つて

火の手を擧げ、南北の律宗に向つて大破壊を加へたのであるが、其の間或は松葉が谷の焼討と爲り、或は伊東の法難と爲り、或は佐渡の遠流と爲り、一波起りて、萬波之れに従ひ千波萬波の大波瀾を描き、終に身延の幽棲と爲り、池上の入滅と爲り、六十一年の生涯を通じて、慘憺たる活劇を演じて居るのであるが、併し彼れの一生は決して悔恨の無い一生である。男らしい一生である。たとひ後世に於ける彼れの成功を控除しても、少しも悔恨の無い一生である。彼れは赤裸々にして、安房の一漁夫の子と生まれ、赤裸々にして、鎌倉の宗教界に横行し、赤裸々にして、佐渡が島根に一宗の基礎を定めたのである。誠に赤裸々といふ言葉程彼れの一生を飾る言葉は外に發見されぬのである。門地もなく、保護者もなく、僧位僧官もなく、唯一巻の法華經を手にして、天下に呼號し、四海を叱咤した彼れの精神は、實に秋霜烈日底の峻烈なるものがあるてはあるまいか。

凡そ世には黄金の力を以て事業を爲した人は多い、何となれば、黄金は實に萬人の希求するところて、之れを握つて浮薄なる世の謂はゆる伶俐漢を驅使

するならば、事を爲すや誠に易しといはなければならぬ。又世には權勢を提げて成功した者も少なくはない。何となれば、權勢の下には、人の集まらんとを欲して、日も是れ足らざる有様であるから、權勢を有しながら、而も事を爲すことが出来ないのは、寧ろ怪しむべしである。黄金と權勢のあるところ、滔々たる世の愚人にして、歸趨して、後れざらんことを恐るゝの有様ありといふべしではないか。然るに彼れ日蓮は如何。

日蓮は何物をも持たなかつたに相違ない。黄金の神は彼れに向つて、喜びの笑みを示さなかつたに相違ない。權勢の神は彼れの門に立寄ることを避けたに相違ない。否々あらゆる俗界の權勢は彼れに向つて、其の笑顔を惠むことを惜んだのである。彼れは何物をも惠まれなかつた。併し彼れは思ひのまゝに其の欲するところを求めたのである。而も彼れは與へられずして、苦んだばかりでなく、有してをる唯一のものをも奪はれんとしたのである。夫れは何であるか。曰く、彼れに屬する唯一の財産は、他の動物と等しく生命であつた。而して彼れは此の唯一無二の財産たる生命までも奪はれんとし

たことは一度ではなかつた。併し幸ひにして彼れは生命を奪はるゝことを免れたのであるが併し事情が生命を奪はなければ止まなかつたならば彼れは必ずや此の貴重なるものを拂つたに相違ない。凡そ拂ふといへば何物かに向つて拂ふのであるが然らば彼れは何物に向つて生命といふ貴重なる財産をも拂ふことを辭せなかつたのであるか。曰く、信仰これのみである。彼れに取つてはあらゆる動物の如く生命より尊いものは何物もなかつたのではない。確に更に尊いものがあつたのである。曰く信仰これのみである。

信仰！

信仰！

これが彼れに取つては、何よりの財産である。彼れは何等の財産を有しなかつたといふのは事實である。併しながら彼れは唯一つの何物よりも貴重なる財産を有して居たのである。曰く、信仰これのみである、彼れは之れあるが爲に、安房の國東條小湊の浦の一漁夫の子にして末代の大救世主大導師と爲つたのである。凡そ世に生命より以上に尊いものを有しないものは他の

動物と何の選ぶところがあるか。何となれば鳥も生命を愛することを知つてをる。猫も生命を愛することを知つてをる。然れば生命を愛することを知つてをるのは、何等人間の光榮ではないのである。而して、生命の貴重なることを意識してをるのは、動物或は人間に優るかも知れぬ。嗚呼生命よりも貴きものを有せざる人は、何ぞ夫れ高からざるの甚しきや。いかにいはんや生命以下の名譽、富貴、權勢を是れ尙ぶものをやである。日蓮は斯る凡人恐人の上に濶歩する英雄兒である。

日蓮の行動は思ひ切つたところが多く、いかにもハキハキしてをるので、壯快だ痛快だといふ感じを起させる。そこで世の多くの擔ぎ屋に騒がれるのであるが、實際日蓮を知つて擔ぐなら未だしもだが、知らずに擔ぐものが多いのには、さすがの日蓮も地下で變な顔をしてござることであらうと思はるのである。日蓮は誠に威勢のよい坊さんである。夫れに法華宗が團扇太鼓等を叩くことから、一層威勢の好い宗教と爲つてをる。そこで斯ういふ點から日蓮を好きな人物だと考へる人も多いやうである。やれ日蓮は日本國の

一本杉
法華

柱だ、船だといへば、成程偉い人物である。何人も感服する。關東の大小名が謂はゆる綺羅星のやうに並んでをる真只中で、身は随へられても心は随ひ奉ること能はずと傲語したといへば、其の芝居が、りのところがえらく観客の心を動かして、ひいさの連中が多くなる。一事が萬事といふ工合で、やれ日蓮は偉い。偉人だ、快男兒だといふ聲があらからちからも聞こえる。やれ日蓮は元寇の預言者でござるの、日本第一の忠臣でござるのといふ有様で、後には銅像まで建てるといふ有様。何たる愚論だ、俗論だ、日蓮は左様な氣の利いた人ではない。左様なコセくした人ではない。時代の思想からいへば確に氣違ひだ。宿なし坊主の乞食坊主だ。辻説法で石を投げられたの、瓦を投げられたのといふ傳説があるが、今日の大道演説にからかふやうなもので、通りが、りの者が悪戯した位のものだ。夫れを小町の辻に記念碑を建てるなんて、何といふ馬鹿なことだ。日蓮はそんなセ、ゴマしい男ではない。素裸にして百貫の價のあるところが日蓮の價値だ。

日蓮の一舉一動は法華經に對する信仰から出てをる。夫れから「安國論」を

一本杉
法華

始め幕府に對する行爲は、鎮護國家の思想から出てをる。日蓮の一生は此の二つの原理さへ握つてをれば、譯なく解釋が出来る。夫れを忠君だ、愛國だ、元寇の精神だ、何だ彼だといふ工合に牽強附會をやるのだから、サツパリ分らぬやうになつてしまふ。日蓮は亭々として、山上に聳ゆる一本杉だ。素裸だ、生一本だ。法華の行者といふ緑葉の外には、何一つの飾りも香ひもない偉人である。

我れ等は此の見地から日蓮の一生を物語らうと思ふ。

第二章 「旃陀羅が子」日蓮

日蓮は自ら稱して「旃陀羅が子」(旃陀羅が子)と稱してをる。凡て印度には古代より階級制度が嚴格で、四種の階級があつた。即ち第一は婆羅門種で、宗教を司る僧侶の階級である。第二は刹帝利種で、武辨である。第三は毘舍種で、農民である。以上三種は西北方から侵入して、印度を征服した白人種に屬するものである。而して第四は即ち須達種で、白人種に征服された土人である。而

して第四階級の外に最も賤むべき階級があつて、屠獸漁獵を業として居た。是れ即ち旃陀羅である。故に旃陀羅は我が國の穢多の如く、四民に齒されぬ最賤民である。日蓮は自ら稱して旃陀羅が子というて居るから、穢多の子であるとして、動もすれば輕蔑するものがある。是れ果して眞であらうか。

我れ等を以て見れば、斯る問題は愚問に過ぎぬと思ふ。日蓮をたとひ穢多の子とするも、何の耻づべきことがあらう。偉人は門地階級を超越してをる。門地階級は人間の定めた便宜である。赤裸々にして偉人たる者は更に尊いではないか。日蓮果して穢多の子であつたならば、彼れの人格は更に一層の偉大を加ふるのである。何となれば、彼れは斯る社會上の關門を打破して燦爛たる光を放つてをるからである。故に斯くの如き疑問は一笑に値せぬが、或は日蓮の「遺文録」を誦し「深密傳」を讀みて、誤解を生ずることなきにしもあらざるべしと思つたので、茲に此の事を一言して置くのである。

日蓮の家系は明かでない。遺文中にも見えぬ。併し後世に出來た「註書讀眞實傳」等に據れば、彼れは武士の子孫であるといふことである。即ち藤原鎌

足十二代の孫、備中守共資、遠江國村櫛に住み、備中太夫共保を養ひ、井桁にたかばなを以て家紋と定めた。夫れより、共家、共直、惟直を経て盛直に至つたが、盛直に三人の男子があつた、即ち長は次郎良直、中は三郎俊直、季は四郎政直である。四郎政直は眞名に住んで居たので、眞名四郎政直と稱したが、是れが日蓮の先祖である。夫れより數代を経て、次郎重忠に至る。重忠は即ち日蓮の父である。其の頃は平家既に西海に沈み、世は鎌倉の威權に服し、大頭將軍の勢威は旭日の如くであつた。次郎重忠は遠江の山名郡に住んで、源家に屬し、忠勤怠りなかつた。然るに、北條時政は源氏を倒して、政權を奪はんと企て、密に人を四方に派して、己に不利なる人々を除かんと圖つた。次郎重忠は元來性質忠直で、媚を呈するやうな人てなかつたので、遂に時政に忌まれ、平氏と通ずるといふ罪名の下に、鎌倉に引致され、糺明もなく、直に房州長狹郡に流罪に處せられたのである。時に建仁三年五月七日の事であつた。小川泰堂「眞實傳」の著者は此の間の事情を次の如く記してをる。

「其栖むべき方としては、東條市河の郷、小湊といへる海濱にて、浦山近く、松の嵐

の吹きあれて、寢覺の床に夢も結ばず。昨日まで賑ひ暮したる、男女の影もとゞめず。所願なければ粟飯だに炊ぐべくもあらず。斯くて果つべき世の住家ならねば、舊きゆかりを求め、下總國路野邊なる大野吉清が女梅菊女を迎へて妻となしぬ。此は清原氏にして、舍人親王十世の孫裔世に賤からぬ身にあれど、夫婦の罪なくして、配所の月に憔悴給ひし面影をいたはり、磯が根に甘海苔を搔いて、日の暮るゝをいとはず。夜は麻を績み網をつゞりて、宵の更くるを知らず、夫婦の次郎も沖の小舟に命を任せ、釣する海人の群に入りて漁獵を事とし、妻も夫も軀に馴れぬ賤が仕業も恒となり、其いとまには、郷の童等に筆握る術など教ふるにぞ、ありし昔の思はれて、物辨へぬ磯村の伏屋のうちにも敬はれ、富むとしも、なけれども、物不足なく暮しける。

(一の巻)

斯くの如くにして、夫妻は配所の月に昔の春を歎ち、弓矢を棄て、舟を操り網を綴つたのである。見渡せば、雲や空なる小湊の沖に、鯉釣りにと出てし、夫を待ち詫びて、妻は幾度磯に立つたてあらうか。思へば駿馬に跨り、銀鞍を叩

いて鹿を追ひ、猪を狩つた衣の袖に、今は空灘の月を宿して、いかに身の不運を泣いたてあらうか。斯るうちにも軒端の白梅幾度か咲き、幾度か散り、貞應元年の春、後堀河天皇位に即き給ひ、鎌倉には四代將軍頼經職を襲ひ、世は尼將軍の掌中に歸した。此の年二月十六日の曉、小湊なる賤が伏屋にも春風が吹いて來た。即ち重忠の妻梅菊は一子を擧げたのである。夫妻の喜びは譬ふるに物なく、善日應と名けて鍾愛した。是れ即ち絶代の獅子兒、後の日蓮其の人である。

浦波の寄せては返す磯邊のほとり、節をかしく、廻らぬ舌に童謡歌ひながら小英雄はいかに楽しく蟹を追ひ、貝を拾うたてあらうか。澁紙のやうな磯育ちの小童等と、繩飛び、さては鬼ごつこ、如何に厥の如き拳を振つて遊んだてあらうか。鬼神を挫き、雷霆を叱する底の大英雄も、頑是なき五つ六つは腕白盛り、蝶を追ひ、小松を曳き船の胴に腰打かけては、鈴のやうな眼を睜つて遠く遠く、沖の鷗の數を讀んだてあらう。小湊の浦の荒浪、東條の里の松風は、小英雄の耳に、天來の妙音と響いたてあらう。

○ 佐渡御勘氣鈔

九月十二日に御勘氣を蒙て、同年十年十日佐渡ノ國へまかり候也。本より學問し候し事は佛教をきはめて佛になり恩ある人をもたすけんと思ふ。佛になる道は必ず身命をすつるほどの事ありてこそ佛にはなり候はめとおしはからる。既に經文のごとく惡口罵詈刀杖瓦礫數々見擲出と説かれて、かゝるめに値候こそ法華經をよむにて候はめといよいよ信心もあこり、後世もたのもしく候。死して候はゞ必ず各をもたすけたてまつるべし。天竺に師子、尊者と申せし人は檀彌羅王に頭をはねられ、提婆菩薩は外道につきころさる。漢土に竺ノ道生と申せし人は蘇山と申所へながさる。法藏三藏は面になやき(火印)をやかれて江南と申所へながされき。是皆法華經のとおく佛法のゆるなり。日蓮は日本國東夷東條安房ノ國海邊の旃陀羅が子也。いたづらに朽ちん身を法華經の御故に捨まゐらせん事あに石に金をかふるにあらずや。各、なげかせ給ふべからず。道善の御房にもかう申きかせまゐらせ給ふべし。領家の尼御前へも御文と存候へども先か

ゝる身のふみなればなつかしやとおぼさざるらんと申ぬると、便宜あらば各、御物語申給候へ。

十月 日

日蓮花押

第三章 清澄山の修學

小湊の里に花散りて、磯山は青葉若葉の衣を装ひ、そぼふる雨に、郭公鳴く頃となつた。善日磨は健やかに育つて、今や十二の夏を迎へた。生來利發な子であつたので、父母はいかにもして、家をも興し、一たび墜ちし家名をも起させんと望みをかけ、緑の黒髪を撫てゝは、幸あれかしと祈らぬことはなかつた。

其の頃小湊より程遠からぬ清澄寺に、道善密師といふ眞言の僧があつた。徳望近里に高く、信徒の歸依も篤かつたので、重忠夫婦は如何にもして、善日磨を出家させ、先祖の追福さては身の得脱、二世安穩の便りにもと、相談一決して、善日磨に言ひさかすれば、磨は大いに喜んだので、天福元年五月十二日、父重忠に伴はれ、清澄山に登つて、密師に出家の素懐を啓し、佛門に入つた。夫れ、河川

海に入れば元の名字を失ひ、衆生佛に歸すれば、萬姓一に歸す。重忠の一子善日、應は名を藥王應と改めて、佛弟子となつたのである。

抑、清澄寺は千光山と號し、傳説に依れば、寧樂の昔、寶龜二年不思議律師の開基で、慈覺大師(圓仁)の中興に係る東條の名刹、眞言宗に屬し、虚空藏菩薩を本尊としてをる。道善密師は慈愛深い人であつたので、藥王應を愛すること一方ならず、手習算術より、小學論語を授けたが、藥王固より穎敏の質で、多くの難僧達に秀て、記憶も確に學問の進歩も著しかつた。かくて、朝には花を摘みて御佛に捧げ、夕には燈を掲げて古經を繙き、眼も漸く開けて來たので、嘉禎二年の冬、十六歳に及んで、一山の衆衆を集め、道善密師を導師として、十月十八日剃髮の式を行ひ、棄恩入無爲、眞實報恩者の聲朗に、緑の黒髮剃落して、墨の衣に姿をかへ、愈、入門の式を遂げた。

かくて藥王應は名を是生坊蓮長と改め、愈、大聖佛陀の眞意を探らんと決心して、大藏經の研究を始めた。然るに佛海深くして、尋ねれば尋ねる程遠く、繙けば繙く程深く、凡智には眞意の何處にあるか、分らぬ。蓮長つくづく思ふ

やう、今や佛教は宗を立て、派を分ちて相争ひ、或は眞言といひ、或は華嚴と呼び、或は律と號し、或は天台と名けて、何れも自宗を以て釋迦說法の本意としてをるが、釋尊の眞意は想ふに一なるべく、決して二あるべからず。いかにもして、それを究明したい。之れを究明するには非常なる智慧を要する。「我れ大願を發して、此の大業をなさんとす。希はくは、我れに大智を與へ給へ」と、本尊虚空藏菩薩に祈願をこめた。斯くの如く、彼れは日夜怠りなく誦經研鑽したので、遂に肺を害ひ、或日石段を下る時血を吐いたと傳へられてをる。

清澄の山は幽邃であるが、大鵬の棲家ではない。雲氣を負ひ、扶搖を搏する大鵬は、空しく小林に屈せない。鳩は鳩の如くに道を説くが、鷹の心を繋ぐことは出来ぬ。嗚呼、小湊の浦、東條の里、父母の國を去らなければ眞の道は得られない。恩師の許を去らなくては、眞の光は見えず。鎌倉は天下の大都である。政治の中心、學者の淵藪である。宗教の中樞、思想の中軸である。いかにもして、鎌倉に至りて、諸宗の名師に遇ひ、疑問を叩かんものと、暮れゆく秋も黍の穂に黒む頃、蓮長は師に暫しの暇を請ひ、清澄山を下つて、鎌倉へと志した。